明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

September. 20th 1909.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 210

大日本蠶絲會報

第貳百十號目錄

▲現代武士道の典型 故酒勾農學博士▼

●再び種類改良と蠶の遺傳性に就て一言す　農學博士　外山龜太郎

●製絲業經營の方針　蠶業講習所技手　松下憲三朗

●絹絲と他纖維との區別に就て　卷島庄之助

●開墾地の蠶業　重富三男三

●屑物整理　米會事務嘱託　吉永信

●參遠の玉絲事業　永野莊吉

●農蠶學校の蠶室は果して贅澤なるか　農學士　針塚長太郎

●原々種の官營に就て　學藝委員　八田達也

●中米及南米視察談　法學士　岡實

●面白き小學兒童の貯金法　岐阜縣會議員　長谷川藤藏

●蠶絲業と冷氣　サンペリー蠶業講習所長　エフ、ブンベール

●桑園改良試驗　埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

▲精力主義の成功者 若尾逸平翁▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

特許中原式　（乾燥器）（煮繭器）佛國伊第三國出願　貳九三三號中

實力と効果とより打算すれば現代に於て最も廉價にして亦最も安全なる乾繭器なりとの好評嘖々たる

中原式乾燥器は

壹回壹石五斗入り參石入の火熱式あり

壹回六石入よりは火熱式蒸汽式の二樣あり

詳細は説明書に記載せり

東京市本所區德右衛門町三四三

特許中原式合資會社　（電話浅花二千二百二十六番　振替貯金口座壹六五〇四〇番）

震災地への御見舞

天災地變は人力の及ばざる處なりとは申し乍ら今夏に於ける大阪の大火江濃地方の震災は悲慘の極に有之候就中震災の中心たる滋賀縣東淺井郡虎姿村より東西三里南北四里の地は古來著名の蠶業地なるに家屋の全潰及半潰三千七百餘人畜の死傷五百餘を算するに至りては慘中の慘悲劇中の悲劇吾人其謂ふ處を知らず唯嗚呼の二字あるのみに御座候天意果して奈邊に存するかを知らず候へども當業者の不幸之より大なるはなく轉た痛歎の至に不堪罹災諸氏の心情察するに餘りあることに候然れども既往は追ふ可らず徒に泣涕悲哀するも今更如何とも難致候へば諸氏庶幾は更に百倍の勇氣を鼓舞して善後の策を講じ以て一日も速に舊態に安ぜられんことを切望する次第に御座候不取敢御見舞迄申述度蕪詞如斯に候匆々

九月二十日

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報　第二百拾號

目次

口繪

●千葉縣八街村に於ける開墾地の蠶室
●江州東淺井郡震災地の慘景

論叢……一―九

●再び種類改良と蠶の遺傳性に就て一言す　農學博士　外山龜太郎
●製絲業經營の方針　蠶業講習所技手　松下憲三郎

芳集……一〇―一九

●絹絲と他纖維との區別に就て　卷島庄之助
●開墾地の蠶業　重富三男三
●屑物整理　吉永信
●蠶種界に行はるゝ不正の實例　在松本　不正蠶種撲滅期成同盟會

調査……二〇―二五

●參遠の玉絲事業　永野莊吉

叩門……二四―三二

●農蠶學校の蠶室は果して餐澤なるか　農學士　針塚長太郎
●原々種の官營に就て　學藝委員　八田達也
●中米及南米視察談　法學士　岡實
●面白き小學兒童の貯金法　岐阜縣會議員　長谷川藤藏

心影……三三―四三

●現代武士道之眞髓　故酒匂農學博士　本會編輯主任　加藤知正

●精力主義之成功者　若尾逸平翁　秋秤……重富三男三

●千九百六年度世界重要產絲國產額統計……四四―四六

●蠶絲業と冷氣饗務……四六―四七　モンベリー蠶業講習所長　エフ、ラムベール

●桑園年中行事……四八　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎

絲況……馬場由

●横濱市場……四九―五二

讀者の領分

●富士登山記……五三―五七　蠶業講習所技手　松下憲三郎

試驗

●桑園改良試驗……五八―六一　埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

問答

●蠶室消毒に就ての質問並答●有蠶に就ての質問並答●秋蠶專用桑園に就ての質問並答●秋蠶飼育に就ての質問並答●桑樹の凍害に就ての質問並答……六二―六三

會務錄事……六三―六六

總裁殿下各會へ臨場＝支會の設置及支會職員の囑託＝地方委員並職員の囑託＝特別會員の推薦＝本會職員の出張＝蠶學者の招請＝會員一行の山陰紀行

蠶桑雜觀……六六―七二

廣東絲の改良＝米國改正關稅法＝江州の震災＝ス氏の本邦視察談＝カルロ、バイニー氏本會を訪ふ＝夏蠶の實踐と初期秋蠶の狀況＝世界の蠶況＝東西蠶業講習所試驗問題＝茶藤理事の渡米＝廣東の蠶況

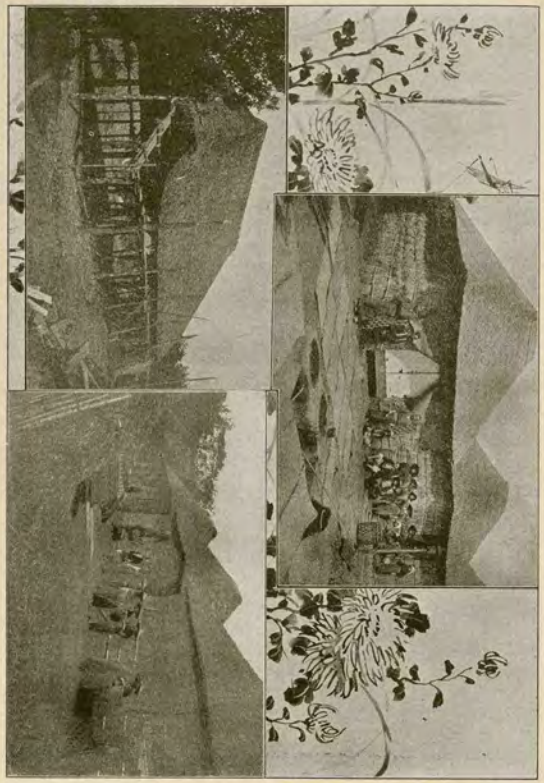
●文藝●蠶海涓滴●新刊紹介●寄贈書目

次號目次

●細菌と養蠶との關係　農學士　上田桑次郎
●居宅兼蠶室の修理に就て　練木・喜三
●微粒子病に就て　農學士　石渡繁胤
●蠶の觸覺の研究　池田桑太郎
●甲州流の桑園整理法　早川文太郎
●唐土大明神と蠶絲業の關係　石田孫太郎
●絹絲と他纖維との區別に就て　巻島庄之助
●蓼遼の玉絲事業　永野庄吉
●秋季に於ける害蟲驅除　丹羽四郎
●中米及南米視察談　法學士　岡實
●屑物整理　吉永・信
●製絲業經營の方法　松下憲三郎
●原々種の官營に就て　八田逸也
●開墾地の蠶業　重富三男三
●乾燥の方法及其原理　小松豐作

本報の編纂は果して讀者諸君に滿足を與へつゝありや？

本報の編纂に就て會員諸君に何か御意見があるならば忌憚なく申越し下さい本會は多數讀者の意見に從て出來得る丈けの改良を施し可成的讀者諸君の希望に添ひたいといふことを發表して既に四ヶ月になりますが夫に就て意見を申越されたのは二三氏に過ぎませぬ大袈裟にコンナ事を言ひ出しても存外反響のないものであると今更の如く編者も感じたのであるが多數の讀者は果して現在の編纂に就て滿足せられてをるであらうか否決して然らずてある希は獨り本誌の爲めのみではない斯業の爲と思召し續々御意見のある處を申越して戴きたい更に嘱望します



蚕蠶立場君飯永熊本縣る付於に地塾間の街入縣業千
Magnanerie de M. K. Akimoto à la terre difficiles de la préfecture de Chiba.

（ニ本ヰ蚕糸業試験場提供）

（立題）蚕業上の中藏語

去八月十四日に於ける江州東淺井郡震災地の慘景

Panorama des Villages de Higashiasaigori à Omi dévastés par le tremblement de terre du 14 Août dernier.

北條侍從虎ノ關大字大字寺に於ける北川健次氏方御殿間の
狀況(北川氏の家族八人中死者二名重傷者六名輕傷者ナシ)

東淺井郡役所及大谷派五村別院

虎ノ關村停車場　五村に於ける臨時救護所の光景

虎ノ關村附近の慘景

(村田光大郎氏寫眞)

大日本蠶絲會報　第貳百拾號

論叢

再び種類改良と蠶の遺傳性に就て一言す

學藝委員
農學博士　外山龜太郎

蠶絲業の進歩發達に蠶の種類改良の必要なるとは動かす可からざるの眞理で今茲に喋々するに及ばぬとであるが、已に維新以來屢々其必要を唱導する人もあつたが、一種の理想的の仕事と見做され一度も世人の注意をひくことがなくて今日に至つたのは其だ遺憾の事である、之は唱へた人が悪いのでもなく、又之を聞いた人の不都合なのでもなく、つまり我國の時勢が然らしめたものである、維新後の劇變の際に當りては農業も亦た蠶業も大體を改良して急に眼に見へる成果を示さなければならぬ、故に肥料の如き耕作法の如き又飼育法の如き日施して明日其結果の見える仕事を專一とした所は已を得ざる次第である、此結果外界の刺戟を利用して收穫を增加することに全力を注ぎ、又一方には政治上の力を用ひて其發達を助けた爲めに、今日では此等の方面は非常に進歩したが種類と言ふ問題に就ては其當時學問の發達が不充分であつて具體的に改良することが出來ず、學者が反て農業者に敎はつて理屈を言ふやうな有樣で、實業家の方では屢々種類を改良して世に大益を與へたものがあるにも關らず、具體的に之を實行することは出來ざるを以て口に之を唱ふることを得るも、之を實際に應用して實蹟を擧ぐることは頗る難きものであつた、こんな曖昧な事柄を唱導して實家を導くのは甚だ面白からざる事柄なれば、何人も思ひ切て大膽なる奬勵を爲すことの出來なかつたのは決して無理なる事ではない。

今日にありては前に記したるが如く政治的又は外界の刺戟を利用するの方法は略ぼ完全に近づきたるも其根本たる種類の改良に至りては、維新前と全く異る所はない、故に他の方面は進歩したるにも關はらず、其結果の著しからざるは其だ遺憾の至りである、幸ひなることには近事遺傳の進歩著しく其原理明確となり、古來の學者の如く推論を爲すにあらずして、事實上其理を示すことを得るに至りたるを以て具體的に種類を改良することも頗る容易となるに至つた、假令ば性質

に優性と劣性とありて、優性中には劣性は一代二代又は數代潜伏することを得るものなりと言へば、事實上直に之を示すことが出來る、即はち歐洲の或る黃繭種、熱帶の多化蠶黃繭種、日本產金黃種の或るもの丶如きは白繭性に對しては優性であるから、白繭性のものと黃繭性のものとを交尾せしむるときは、其子は全部黃色となり、白繭は更に生ぜぬのである之れに年々純黃繭種を交尾せしむれば十年百年千年に至るも白性は更に發生することなきも、純黃繭種の代りに同一の親より生じたる黃繭同士を交尾せしむれば、百年固定したるものも一朝にして白繭を生ぜしむることが出來る、又兩親の性質の一部分宛を取り集めて新種類を作ることを得べしと言へば、之れ亦た事實を以て直に示すことが出來る、余が蠶にて實驗したるもの丶外に植物、動物とも其實例甚だ多く、今日にては實行上に應用せられたるものが甚だ多い、即はち有角種の角を取り去ること、病氣に罹り易き性を取り去ること野生の果にして食用に供することを得ざるものを一朝にして美果に變じたるが如きは其最も著しきものである。

理論上に於て此の如く進步したる以上は、余輩は具體的に種類の改良を爲すことが出來るから、從來の如く「出來るかも知れん」位の僥倖的の事業にあらずして確實なる仕事となるに至りたるものである。

具體的に種類の改良を爲さんとせば先づ改良せんとする生物の各種の性質の遺傳する法則即ち順序を知らねばならぬ之を知らねば如何に力を盡すも、其結果は甚だ曖昧であつて古代の方法と大差なきものとなるであらう。

故に余は種類改良の必要を唱ふると同時に、其方法の一斑を示し、常に其研究を怠らなかつたが、近年に至りて蠶の性質遺傳の法則なるものは、大要左の數者に他ならざることを知ることを得たから、此原理によりて實行せられたらば甚しき誤はなからう。

一　メンデル氏遺傳法則　之れは二種以上の性質が互に分離遺傳を爲すものであつて、交雜の結果兩親の性質が一時合一するも其子孫に至りて規則正しく互に分離して獨立したる性質となるものであるから、若し兩親に數多の異りたる性質のあつたときには、數學的の分解並に結合を爲して種々なる性質の新結合を生じ、爲めに新種類を生ずることが出來る、此法則に從ふ性質は最も改良し易いものである。

二　一部分解遺傳　之は頗る奇なる性質であつて、兩親の性質が合一し子に至りて其性質の一部分は分解して獨立したる性となるも、其一部は互に融合して之を全く分離せしむるには數年を要し、特に兩極端の間に中間性を多く生ずるから、二代目の子を見るときは遺傳の現象甚だ混雜となり、如何にして固定種を得べきやを知ること能はざるが如き現象を呈するものである、此の如き遺傳の性質は其發現したる各種の性質を選出し、漸次淘汰を加ふるときは、淘汰力の存在する間は其性質を保存する、若し絕對的固定種を得やうとなれば漸進法によらねばならぬ。

三　分離遺傳　を爲す性質にして一代は兩親の一方のみに似、二代目より不規則に分離する性質がある即はち一代目は雌又雄に似る遺傳性であつて、產卵の性質の如きは多く

之によりて遺傳又は如何なる性質にても一代は全部又は殆んど全部は雌性を發現し、雄の性は一代潜伏するものであるから、純粹なるものを得やうとならば分離遺傳を爲すにも關はらず二三代以上の淘汰を爲さねばならぬ。

四　分岐遺傳　之は兩親が有せざる性質を時々發生する現象であつて、發生したるものは固定性のものがあり、又一時的のものもあつて一樣でないけれども、蠶では屢々見ることを得るものである、世間ではムタチヲン即ち突然變化と同視するものもあるけれども余が蠶にて實驗したる結果は決して純粹の突然變異ではなくて潜伏したる性質の發現したるものである、故に雜種の場合に多く生ずる突然變異と言ふ語は甚だ便宜なもので机上にて理窟を言ふには甚だ便利なものであるけれども、蠶に於て此の如き場合を見ることの出來なかつたのは甚だ遺憾の至りである、勿論ド・フリー氏の研究せられたるが如く天然に存在するには相違なきも、耕作植物又は家畜等にては種々なる性質のものが混じて居るから、純粹のものなるか否やを判別することが出來ない、兎に角此法によりても新種類を得ることは甚だ容易である。

五　優劣二性の關係　優劣二性の關係は絕對的にして劣性は全部休眠して其性質を發現せざるものである、又比較的にして少しく一方の性質を發現するものがあり、時には兩親の性質の混合性又は之れと全く異りたる性質を發現するものもあり稀には甲乙兩親の子が一部分は甲の親に似、一部分は乙の親に似、而して兩者とも其內部に地方の親の性質を休眠するものもある、故に優劣二性の關係なるものは如何なる性質にても絕對的のものなりと思考することは出來ない。

六　吾人の耕作又は飼育する動植物　は近來學者の研究する所又吾輩の實驗する所によれば頗る複雜なるもので動植物學上の眼を以て之を類別するときは數多に小別することとが出來る、而して其區別したるものは外觀は一寸似ても其性質は同じでなくて之を純粹に分離して耕作又は飼育するときは、實際上大に異りたる結果を生ずるものが少くない故に系統栽培を爲して不純のものを類別し、其中の最良なるものを用ゆるの策を講ぜねばならぬ、之れヨハンゼン氏の久しく實驗して好成蹟を得たる所であつて吾輩も亦蠶及稻等にて同一の結果を認めたるが爲めに大に同意を表する所である。

支那又は歐洲種と日本種との雜種又は改良種を作る法

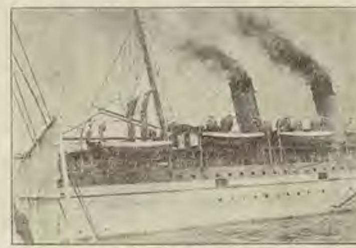
以上の理窟を基礎として支那又は歐洲種と日本種との雜種又は改良種を作る方法を示せば左の如くてある。

理窟を言へば中々六ケしいものなれども、實際造る丈けならば決して六ケしいものではない、先づ交雜せしむ可き原種を充分に選むのが第一のことである、假令ば短縮圓形にして中央に縊れを有し、豐美なる形の繭であつて解舒が良好で絲質の雪白なる種類を得やうとなれば先づ第一に支那種を選むがよい、支那種には江蘇浙江邊何れにても得らる丶けれども普通の種の實狀を爲したる種類の外に短縮圓形にして中央に淺き縊れを有し、周圍に綿毛の少なき種類があり、中には極

子種と混合して存在するものもある、此の如き種類を取りて一二年一蛾飼育を爲し、其病毒と混合性とを除去したる後(若し急速を望めば直に用ゆるも宜しいが、かくするときは種類を固定するときに至りて時に手數を要することがあるであらう。

之に配する日本種も成る可く混合性少なく且つ繭形の變異の度の少なきものを選びて交雜するがよい、交雜せしむるには雌雄何れにても可なれども初代の飼育を容易ならしむる爲めに、日本種の雌を用ゆるを便とする、若し雌雄とも健全なれば何れを用ひても宜しいが、又蠶の斑紋等にありても一定の希望あれば兩親の斑紋を選むがよい又支那種には繭の色澤に種々あるから必ず雪白のものを選出するを可とする如何なる繭色にても後に至りて自由に變化せしむることが出來るけれども原種を選めば夫れ丈の手數を省くことが出來る、又產卵の色は支那種には帶綠色のものが多い、若し之を嫌ふなれば成る可く帶綠色の卵より生じたる蠶を用ひぬが宜しい。

此の如き兩親より生じたる蠶の繭は日本種の繭の長短によりて形は違ふけれども長からず又短からざるものを用ゆるときは少し圓みを帶びたる俵形であつて周圍の綿毛も少なく頗る體裁の宜しきものである、而して兩親の繭色が雪白なれば色も直に純白色となるけれども、日本種も亦支那種も多少の淡色を混ずるものが多いものであるから一代に生じたる繭色は多くは雪白色とならずして多少色を有する傾がある蠶の性質は一般に强壯にして蠶の斑紋は親の斑紋によりて一樣でない、兩親とも普通の形蠶であれば、一代目は形蠶であるけれども一方が姬であつて一方が形であれば全體形蠶となるも、次代に至れば必らず、姬を生ずるのである又一方縞にして一方姬又は形なれば其子は縞となる、其他種々なる變化があるけれども、要するに分離遺傳を爲すものなれば何れにも固定することが出來る種の色は多くは全部帶綠色か又は一部は帶綠にして一部は普通の暗褐色を爲すものが多く、支那種の卵には、帶綠色多くして假令ひ普通の色のものにても其內部には綠色を休眠するもの多い爲めに、此の如き結果を呈するものである、要するに交雜初代は變化少くして、比較的に善良なるものである、又不良にても一代の結果では不明であるから決して放棄してはならぬ、


去八月二十四日正午紫霧生絲檢査所長を乘せたるインプレスオブヂヤパン號解纜の光景

二代目に至るときは繭の形も色も多少不規則となるべく、親の性質によりては甚しく不齊となるやも知れない、此の時に蠶性の發育盛にして强壯なるもの丶みを選みて上簇せしめ、(時には强壯なる蠶が弱き蠶より少なきことがあるけれども心配するには及はず)此中より己の目的にかなひたるものを選出して、發蛾產卵せしめ、產卵中綠色又は己れの好まざる色を有するものを除去し、三四代も同一方法を施行するときは繭色も形も其性質も固定して一種類となすことが出來る。

此の如き方法によりて造りたるものを一回改良雜種と稱する若し蠶性倘弱くして不都合なるか、繭の形狀又は細大一致せずして不都合なるときは、倘一回絲口の細くして强壯なる且つ原種に繭形の類したる日本種か、又は原種を交尾せしむるがよい、然るときは蠶性一層强壯となり、繭形も齊一となるものである、然れども此の如く反覆交雜の度を重ぬるに從て、支那性の解舒の宜しい性を失ふから、三四回以上の逆交雜は爲さゞるを可とする、若し止を得ずして之を爲すときは每代蠶性と繭性を仔細に檢して、不良なるものを除去し、善良なるもの丶小數を選みて原種となし、嚴密なる淘汰を爲すが宜しい。

之れ一回又は二回交雜によりて日本的の形を爲したる支那雜種を作る法である。

横濱港頭を解纜せんとするインプレースオブヂヤパン號甲板上に於ける紫霧所長

柚子形を爲したる支那種を用ゆるときは日本種の如何にか丶わらず、其の子の繭は柚子形に多く似て、日本形を爲すものは少ない若し此の如きものを全然日本種と同形に爲さうとすれば勢ひ逆交雜の度數を增し、絹性を淘汰するに年月を要するものであるから、改良種用としては餘り面白くない特に此の如き種類にては一代目に柚子形を爲したるものが、二代目には柚子形より楕圓形に至る迄の種々なる繭を生して不齊となるを免れない、然れども之より楕圓形の者のみを選出して、三代以上を經れば大抵固定に近き繭を作ることが出來る。

蠶性の强弱、絹絲の良否、其他の淘汰法は前と異る所はない、何れにするも後者の法によりたるものは、前者よりも年々種繭淘汰を嚴にするの必要あることを忘れてはならぬ。

西洋種と日本種とては西洋種は多く金黃色又は肉色であるから、交雜第一代目は全部黃色か又は肉色に近い色の繭が出來る、其形は兩親の中間か又は少し一方に片似したる者が出來るが大體に言へば中間のものである、絲の太さ其他の性質も亦た同樣である、蠶性も雌が日本種の强壯なるものなれば

製絲業經營の方針（承前）

農商務省農務局蠶糸課技手　松下憲三朗

製絲業に於ける職工即ち工女は資本及原料と共に經營上三大要素の一である、即ち製絲業は前既に述べた通り機械力によること甚大の工業に比すれば極めて少くして、主として、人力即ち工女の巧頭の技によりて營むものであるから之が經營をなすに當りては、必ず先づ工女問題に就て充分の攻究をなし、之に對する方針を確定せねばならぬ。

製絲工女は何故に缺乏するか

製絲工女の缺乏は今に始つた問題でなく、數年以前より隨分入〆を載し問題である、殊に關東地方に於ては製絲業の古き丈因襲の久しき、種々なる弊害を醸成して工女の爭奪其極に達し、やや其影響は關西地方の製絲業界にも波及する樣になつた、今にして之が救濟の策を講じ、同時に工女問題に對する經營上の基礎を確定しなかつたならば、將來斯業の發達上由々敷大事であると思ふ、何が故に製絲工女は斯の如く缺乏するか、又何が故に如斯爭奪の狂態を演ずるのであらうか、今各種の方面より之を研究して見やう。

製絲業は人の嗜好に適した業であらうか

一般に繭糸は、珠紋の關係は前と同樣である。

二代目になると繭の大小、形狀が不齊となるも、色は二種又は三種に別れて白色も必ず出來る、歐洲種は種類により白色が多かつたならば、淡色のものにても宜しいから、最も淡き色のものを選び純白となること疑ひなし、若しどうしても純白ならざれば日本白繭種を一回逆交雜せしむれば、直に純白の繭性となる、繭絲の性質、蟲の斑紋卵色等は已に記したる通りで、固定せしむることが出來る、又西洋種には白繭種にても黃繭性に合するときは其子は白色となるものもあるから此の如き種類を輸入すると中々面白き結果が得られる。

此の如くすれば種々新種類を作ることは何人にも出來るが、成功不成功は觀察力の細大と忍耐の有無によることが多いから、人によりて大なる差を來すこともあるが、要するに此種の如くすれば新種類はきつと出來る。

之れは學問的にする人に働めて、一言するのである。

此の如くにして生じたる種類を試驗所又は相當の學校で飼育檢査をしてもらつて新名を附し、其名稱を商標條例により登錄してもらへば、何人も同種類は販賣することが出來なくなつて、一定年の間は專賣する權利が得られる。

製絲業に於ける職工即ち工女は資本及原料と共に經營上三大要素の一である、即ち製絲業は前既に述べた通り機械力に比すれば極めて少くして、主として、人力即ち工女の巧頭の技によりて營むものであるから之が經營をなすに當りては、必ず先づ工女問題に就て充分の攻究をなし、之に對する方針を確定せねばならぬ。

製絲工女は何故に缺乏するか

製絲工女の缺乏は今に始つた問題でなく、數年以前より隨分入〆を載し問題である、殊に關東地方に於ては製絲業の古き丈因襲の久しき、種々なる弊害を醸成して工女の爭奪其極に達し、やや其影響は關西地方の製絲業界にも波及する樣になつた、今にして之が救濟の策を講じ、同時に工女問題に對する經營上の基礎を確定しなかつたならば、將來斯業の發達上由々敷大事であると思ふ、何が故に製絲工女は斯の如く缺乏するか、又何が故に如斯爭奪の狂態を演ずるのであらうか、今各種の方面より之を研究して見やう。

製絲業は人の嗜好に適した業であらうか

凡そ何業に拘らず總て業務は人の嗜好に對して夫々合意嫌焉

がある、夫れ人が職業を選ぶに當りて有する欲望を指摘せんか、第一、其仕事が高貴優美で、前人より欲ひ尊ばるゝこと、第二、操作簡單、習熟容易で心身を勞すること少きこと、第三、精神爽快で、衛生上好に修身上友として喧噪極まる工場内にて極めて優化の少き仕事をなすであるから、人の嗜好に適したものとは思はれぬ、併し人の嗜好に適したものとは思はれぬ、殊に如何なる仕事でも勞働は神聖なるものであるから、仕事に趣味を見て從へば實に愉快なるものである、由來製絲工女が他に劣なるものゝ如く一般の品性が低く、教育に乏しく且つ監督者が適當の方法を以て完全なる服縛と管理と待遇とを與へずして、勝手氣儘に放置して置いたから自然品格を墜して、遂に他より卑めらるゝやうなることに立つたのである次第である、次に操作簡單、習熟容易なる仕事であるからと云ふに、左程困難なる仕事ではないが、一刻も精神上油斷のならぬ始終注意を怠てはならぬ仕事であるから、他の工業に比すれば先づ六ケ敷仕事であると云ふてよかろう、是れ製絲工女の精神的に之を養成せねばならぬと云ふ所以である、次に健康上及衛生上にはどうであるか、朝早くから晩く迄絲工は日濕氣多き工場内で、極めて綿密なる仕事をなすので、あるから、決して障害なしとは云へないが、適當なる工場、衛生上に思安保養の道を講じたならば、敢て健康を害する迄に至らないことは受合である、最も危險も少ないことは他工業に比すれば良成化を與ふるに違ひない、只働き盛りに婚期に達すると云ふことは是れは何れの職工も免れぬところである、之を要するに製絲業は職業として其性質上人の嗜好を滿足せしむるに足る業務であると云ふことは幾ヒーキ目に能く考へてもてドーモ申げる迄には行かない、是れは即ち工女拂底の原因の一つとして數へてもよかろうと思ふ。次に

報酬賃金は他の工業に比して多いであらうか

製絲工女の賃金は勞力單位即ち勞働の價値より云ふ時は多いとも云へないが、他の職工の工賃日給に比すれば先づ多い方である、最近の統計に徴すれば、養蠶屋女、機織工女等に

編輯顧問三宅水蓮氏替所

比して、常に高價であることは確かなる事實である、是れは前述の職業の合意嫌焉の關係やら勞働時間の多少等も無論關係して居るであらうが、近時斯業の發達に伴ひ雇入競爭の益々激甚になつた結果でもある、尚又近年に於ける物價の騰貴と工賃の昇騰とが相伴ふて併進せぬ傾向のあるのは、總ての職工を拂底ならしむる原因の一つではあるまいか、蓋し物價と工賃とは必ずしも同一の比を以て進退するものであるとは限らないが、苟くも人類生活の要素たる衣、食、住、三者の原料品の市價の高低は生活の唯一の資料たる工賃の多少に自然重大なる關係を有するに至ることは申す迄もないことと思はれる、然るに最近の統計により之を其五ヶ年以前に遡りて調査するに、衣料品に於て二割六分　食料品に於て二割八分の騰貴をなせるにも拘らず、總ての職工賃金は僅かに一割、女工總平均に於ては一割二分、製絲工女に於て一割五分の騰貴をなしたのである、故に勢ひ職工の生活難と云ふ現象は當然起るべき筈である、況んや社會の進運に伴ひ人の欲望即ち生活程度の向上するは止むを得ぬこととなるに於ておやだ又近來諸工業の發達に伴ひ、女工を要すること愈々多きを加へたるは前述の統計により男工賃よりも女工賃の方が騰貴の割合が多いことを見ても之を證することが出來る。以上の事實は益々工女の拂底を來したる原因の第二である。次に

近年著しく製絲業の發展したること

確に工女不足の原因となつて居る、獨り製絲業に止らず總ての工業は彼の日清戰役後の現象と同じく、日露戰役後に於ても亦著しく諸工業の勃興を見るに至つたとは、之を統計に徵して明かなる事實である、即ち日清戰爭前明治二十七年に於ける全國の諸工場數は五千九百八十五なりしものが、戰役後の明治二十九年に於ては、工場數七千六百四十に增加したるが如き、又日露戰役前即ち明治三十六年には工場數八千二百七十四職工數（四十八萬三千八百三十九人）なりしものが、戰役後の明治四十年に於ては工場數（一萬〇九百三十八）職工數（六十四萬三千二百九十三人）に激增したるが如き、而して尚之を既往十年以前に比するときは工場數に於ても職工數に於ても約一倍六分の增加を示せるは、明かに工業の進歩發達を表はして、爲めに職工の需要多きを致したるものと云はねばならぬ、殊に我蠶絲業は年々歲々長足の發展をなし之を既往十年前に比すれば、產額に於て約一倍六分、價格に於て約二倍餘の激增をなしたるは從て職工數を多く要する所以であつて、是即ち製絲工女拂底の第三原因である。次に

製絲業の多くは年中營業でないこと

も亦工女の拂底の原因の一つである、凡そ何業でも就職の狀態が連續的でなくして、中途に缺けることがあると、此期間は無爲に日を暮すものが多く、殊に婦女子は僅かに家事の手傳をする位に過ぎないから、成可長期間働ける所を選むのは人情の常である、然るに製絲業は一ヶ年間の營業原料を一時に購入するが故に、購入上の困難幷に流通資本の運轉上多大

の困難あるのみならず、多額の原料品を倉庫內に固定せざるべからざる事情あるが故に、金利の關係より可成早く事業を切上げんと欲し、先づ六月に原料を仕入れて事業を開始し、其年十二月頃を以て業務を終了すると云ふ向が隨分多い、併し是れは主として小製絲家にして且つ新開の地方に多く、大製絲家は多くは年中營業をなし殊に舊來より製絲の盛んなる地方では、多くは年中營業をして居るけれども、全國を通じたならば其工場數より云ふときは、無論十二月頃迄にて終業するものが多いと云はねばならぬ、是れは製絲業の性質として誠に止むを得ぬ次第である、是れ新絲當時而かも農業の繁忙なる時期に際して、一時に多數の工女の需要ある譯けて、從て短期の就職等の關係より應募者少く、（短期は却て應募者多い場合もある）從て工女に不足を告ぐる第四の原因であると思ふ。次に

女子教育が盛んになりたること

も其原因の一つである、併し是れは大に喜ばしいことであるが、製絲工女は其大部分は結婚以前の年輩で、結婚後は家事に從事することになつて居るから、先づ十三四歲より二十歲頃迄の間が多い、然るに此時代は恰かも小學教育時代の終期と、高等女學校又は女子技藝等の專門修學時代であるから女子教育の盛んになると同時に、勢ひ工女の拂底は免れぬ、夫れに近來は女子の實業教育が盛んになり、又は女子の官吏事務員等の就職の途が開けたから、勢ひ女工が少くなる、是れ製絲工女拂底の第五の原因としてよかろう、序に云ふが如斯事情あるが故に製絲場の管理者は此精神を以て適當の方法により、工場內に於て業務の餘暇を以て女子として必ず修めねばならぬ學問及技藝を授け、且つ婦德の修養に力を注ぎて以て良家の子女の善美なる家庭に於けるが如く、彼等の人となりを完からしめ、他日平和にして幸福なる家庭を造り、良妻賢母として決して恥かしからぬ資格を造らしめねばならぬ。（未完）

長野縣立小縣甲種 蠶業學校十六年要報

明治二十五年四月本邦蠶業學校の嚆矢として信州上田町に創立せられたる小縣蠶業學校に於て十六年間試驗せる成績の要點を集錄したものである、甲桑葉と蠶兒の關係試驗、乙蠶種に關する試驗、丙蠶兒種類に關する試驗、丁飼育標準に關する試驗、戊飼育に關する試驗、己上簇に關する試驗、庚同功繭試驗、辛蠶病に關する試驗、壬蠶及繭に關する調査、癸桑園に關する試驗等第一編の養蠶試驗成績は蠶絲業家の爲に好個の參考資料であつて、第二編の農作物試驗成績は普通農家の一讀を要するものである、卷頭に揭げられたる二十七葉の口繪は各種の試驗成績と相待つて有益のものであるが、只其圖の餘りに縮少せられた結果文字の判明せざるもの〻あるのは洵に惜しいことである、併し之は白玉の微瑕にして敢て本書の價値を左右するに足らない、吾人は此珍書の公にせられたるを斯業の爲に深く喜ぶものである。（發行所長野縣立蠶業學校內產業會）

集芳

絹絲と他纖維との區別に就て

通常會員　卷島庄之助

絹布は、他の纖物に比較しますと、價が頗る高いから、中等以下の人々には、得易くない、併し、其優美なる光澤、高尚なる絹摺れの音、然も輕くして温く、且膚合ひの何とも云へない快感は、貧富上下を問はず、垂涎の情に堪えざらしめる、此故に安價で絹布のやうなものがあれば好いがとは、誰れしも望む所であるから、此要求に應ずる爲め、絹布の擬擬品を作らうと、昔から種々研究せられまして、或は純絹絲の中に絹絲よりも、安い他の纖維を交ぜたり、又は、全然他の纖維で織つた物を、絹布のやうに見せようとだ、此等の事は、單に絹布よりも、狡猾な商人は、此等の擬物を、純絹布と稱して絹布同樣の價で賣り付けやうとする、而して現今では此擬絹布を製する技術は、非常に進歩して、底肉眼では其眞贋を看破し能はざる域に達して居る、で苟も身を織業に發くの士は勿論、一般の人々も其織物が果して純絹絲であるか、交織纖維では無いか、又は全く他纖維であるか、無いか、何割か他の纖維であると云ふ事を、確然と知る必要がある、特に商業道德の未だ發達しない我國では、猶更である、夫れで私は淺學を省みず、少しく純絹絲と、他纖維との區別に就て述べやうと思ふ。

纖維を區別するに、普通三つの方法があります。

第一　顯微鏡に依るもの

燃焼に依るもの

第三　化學藥品に依るもの

以上三つの方法がありますが、此内何れでも一つの法で滿足な結果を得るかと云ふに、さうはゆかない、完全に映なき區別を爲すには、二方法以上試みなければならぬ、扨て此三つの方法に就て述ぶる前に、絹と共に混織せられる纖維に就て、概略を述べる必要があると思ふから此等纖物纖維に付て少しく述べませう。

凡て纖物纖維を分ちて四種に區分致します。

（イ）動物纖維
（ロ）植物纖維
（ハ）礦物纖維
（ニ）人造纖維

此の内礦物纖維は、玻璃纖維や、鑛纖維が、無いではないが、先づ石綿が唯一と云ふてもよい、而して此の石綿も纖物としての用途も甚だ狹く、且絹と交織せらるゝ事は、殆んどないから、此の礦物纖維を除き其他の三者に就て述べませう。

（イ）動物纖維

其名の示す如く動物が生產した物で、絹や毛は此部類に屬します。

絹絲　絹絲は御承知の通り蠶が吐いた絲で、蠶には野蠶、天蠶、柞蠶、家蠶、等がありますが、普通絹絲と稱するは、家蠶の吐いた絲のことである、此の絹絲は二つの成分から成立して居るので、即二五、八二パーセントのセリシンと七四、一八パーセントのフェブロインとで出來て居る、此内後者は絲の基素、即本體と爲つて居る物であります、又前者は其外部を被ふて居る所の膠質樣のもので　此物は金々絹布となつて市場に現れた時は既に取り除かれて居るものである、此の絹絲は、他の纖物纖維に比べて多くの優れて居る點がありますが、即、美麗なる光澤、及彈張力其だ強くして、同直徑の鐵の針金と同じであること等は尤も著しい點である、扨て近年迄は此の絹絲と他纖維とを區別するに、絹絲は、膠質したりすると、一種の音を發するから、此點で他纖維と區別して居つたが、今日では普通の絹を、稀薄な有機酸を以て、處理し同樣の音を發せしむる方法が發見せられたから、此點だけでは區別がつかなくなつた、而し幸にも、今日迄知られて居る、次のやうな、絹絲の特性に依り、區別することが出來ます、即絹絲は

a 一定の直徑を有して居ると、（少しは差はあるが他纖維の如くでない）

b 透明なること。

c 無組織で平滑なること。

d 獨特の條痕を有すること。

毛　毛とは廣義の意味で申せば、有脊動物の皮膚を被ふものであるが、纖物に用ひらるゝ物は、主に山羊の毛、羊の毛、駱毛、等である、此の纖維の貴重すべき性質は、耐張力の强いのと、光澤ある、保温に適して居ると、染料の吸收力が良い等の點である、此の纖維は顯微鏡で視れば次の諸點で他の纖維と區別することが出來る。

a 特性の鱗あること。

b 纖維の外部に鱗形物の存在して居ること。

（ロ）植物纖維

此纖維は名稱の示す通り植物から採つた物で二部類に區分することが出來ます。

(1) 種子纖維

此は種子の保護機關として、種子の周圍にある物で綿、パンヤ等は此の部類に屬します。

(2) 靱皮纖維

此は材質の保護機關として、存在する物で大麻（Hemp）苧麻（Ramie）黄麻（Chinagrass）亞麻（Flax）等は此の部類に屬します。

綿　綿は主としてセルローズ（Cellulose）から、成立して居つて、五パーセント位の、不純物を含有してゐますが、此の不純物は、灰酸曹達で漂白すれば除去するを得て、全くのセ

ルローズのみとなります、然るに他の植物繊維大麻、亞麻、苧麻等は、主成分は綿と等しく、セルローズですが、三十五パーセントの、木質や、蝋の樣な、不純物が存在して居つて此の不純物は、綿と反對に、何んな方法でも、除去するとが出來ないのである、又綿は單細胞から出來居るが、他の報皮繊維は、細胞の集合に依り組織されて居る、綿の繊維を顯微鏡で見れば、極めて扁平な管狀のもので、其管は捻るコルク抜のやうに螺旋狀になつて居る、又所々に紋狀のものを認める、此等の點で他の繊維と區別することが出來ます。

次に現今盛んに紡布の技術に應用せらるゝ、マーセライド綿絲に就て少しく述べます。

マーセライズとは、化學藥品を以て、綿絲に絹の光澤を與へる作用を云ふのであります、此の方法は千八百四十五年即今より六十四年前、英國人ジョンマーサー(John Mercer)と云ふ人の、發明に係り、苛性曹達の濃厚なる溶液中に綿絲を緊張したまゝ、浸すのであります、此方法により綿絲は眞に美麗な絹の光澤となり、純絹絲と見分が付かなくなります、特に上等の綿絲をマーセライズした綿絲は、光澤が良いのみならず、靭張力も增加し、且染料の吸收力を增して、マゼンタの如き染料も、吸收するやうになります。

（未完）

開墾地の蠶業

犬も歩るけば棒に當る

重富三男二

ト云ふが、井の内の蛙然たる茶には得て世間の廣さが判らなかつたと云ふて茲に拠くる開墾地の蠶業と云ふことを記述するには、自分の生國を明にして置く必要があるが自分は、なまよみの山の國、冒業を換へて云へば夏季にいつも小低氣壓を起して甲信の堺の山脈から、秩父山系にかけて時ならぬ降雨の誘因をする盆地に生れた。

人も知る如く此の盆地は幸ふじて足跡を印し得る山、言ひ換ゆれば鹿や猿の住居する處を、合せて二百八十四方里しかない、其處に五十萬の人間が明日を迎へて居るのだ、隨つて、登り得らるゝ地點迄は奈何なる傾斜でも、桑なり麥なりを作つてある、斯る有樣であるから平地に原野などは八ヶ岳及富士の裾野を除ては眼藥にしたくも見得られぬ、是さへもあらかた鍬で剝かれて居る有樣であるので時々新聞や雜誌で人口の增加する割合や、面積などの關係を論じてあるものを見ると、空想は先入主となつて居る學時代に習つた大陸の平原に飛んで、此の先き人口の膨張と個人經濟の昇騰、其に國家經濟の關係を如何になすらんなど、小鍋の歯さしの的に考へたこともあつた、夫れと云ふのも、年々年に農家の爐りは細うなり行き、日に〳〵山は裸にさるゝ處を

見て居つた其井蛙的印象が、推理的に、想像的に、纏つて行くからであらう、斯る考へは敢て自分許りでもなからうと思ふ……處で昨年の九月會務を帶び吉池理事の御伴をして千葉縣下に講話に趣いた處が、

面白い蠶業の經營

をして居るものがあるから是非一邊見よと山本鈴木兩技師の切なる願を受けたが實地飼育して居る處でないと面白味がないから翌年を期して歸つた、爾來忘れざる如く思ひは過ぎ去り水の如く、其年の一月、自分は茨城縣筑波郡に趨く爲に上浦から車を驅つたが、中途約二里にも達せんかと思ふ計りの原野を通過した、眼には物珍らしく寂然砂漠を橫ぎる樣な感じがした、而も處々に「オーシス」も見える、

諸君笑ひ賜ふ勿れ、吹ろ余は其眼界の狹き盆地に育ちたるを憐れまれんことを願むのである、其時、嗚呼此の良野と思はず呼び、（東大の御一）、天に手を伸ばして歩く所だ、

（筑波山手萬の遠望）

見渡せば倭松處々に物凄く筑波山を淺い樣にも見えるが、生ひ繁りたる雜草は秋の枯野に趣れて、無慘の遺骸を橫へたるを、見るにつけ、自分は幼な感じに打たれた、夫れにしても何故に天然の給源を無視して荒寥筑波山のすさみに委し、剩へ自分許りの洗ふに任せて置くであらう夫れのみならず、年々例令若葉を刈るにしても燒土法を行ふ邪魔に敢てするぞ。

一方には自然を利用し自然を刻き過ぎたが爲に見る〳〵家財田畑は勿論いとし妻子迄も濁流に奪ひ去らるゝ怒りに觸れた山梨の如きさへあるに、是は亦自然を無視するの甚しきよと、さもならぬ彼を思ひ是を怨みて歸りしが此の時よりして思はざる如く忘れざる如き千葉の其を思ひ浮べて、花咲く春を待ちこがれたが、急ぐ背葉がくれに吐息鳴く五月二十五日面白い蠶業の經營を研究すべく山本君に案内せられて行つた。（日曜に親で會せる處に山本技師の撮影せられたもので彼が寫眞師だから動るもの多くは甘く行つて呉れしばらいとは錄り者にして館のもの四光がパラジオ御手際）

何處が面白いか

處は千葉八街といへば、徳川時代に佐倉の七牧と云ふて良牧場の隨一、其内街と云ふのであるが、此の地に牧場を開いたのは北條氏康の時からであつて、而も明治十五年五月には近衛諸兵の對抗演

攻撃　早稲田　慶應三　明治　東京　野蠶　株行　式蔵　會せる　社む　館の　四光　一十奈

ても廣さを以て名あり、衆小間子と柳澤の二牧場合せて八百ヘクタールの廣さ、其内一、其内の隨一、良牧場の開墾地の北條氏康の對抗演

胃、御蚕神の爲、聖陛下の御臨幸ありし有名の地で其廣袤は四里四方もあるとのこと。

抑も此の地を開墾するに至つたのは明治維新の際で、徳川家が牧場を廢して江戸時代に勤め居る貧民を救ふ爲に、茲に移住せしめて開墾を進めたものである、處が初めの内はセッセと開墾にも從事し、素性らしく畑も打つたが、從來虎の威を籍り百姓町人奴がと嘲つて遊手徒食に慣れた下郎共迄が、明治四鬼の如くになり鍬は痛み、肥桶迄かつぬぼ食ふゐから堪らない、倒令緑に離れればとて少し氣の利いた仕事もがなと打ち縋つて、一人去り、二人去り、五年頃までに大抵何處となく逃げ去つたから、其跡は、自然荒蕪に帰せざるを得ない傾きになつた、仍て居られた者迄が寄り〳〵相議して明治六年に開墾會社を起して鹿爪らしく規則などを拵へて見たが逃ぐるものはあつても、寄り付くものもない奏でであつたから、開墾された土地は大部分紅員に騙着されて終つたとのことである。

岐阜縣惠那郡東野村桃谷式會社蠶桑用桑園

八街の蠶業王

秋本熊太郎君の事から說かねばならぬ、君は印旛郡和田村に慶應元年生れたのであるが、手許不如意の爲に明治十八年八歳の其頃、御蚕神の爲、聖陛下の御臨幸ありし有名の地で其廣袤は四里四方もあるとのこと。

抑も此の地を開墾するに至つたのは明治維新の際で、徳川家が牧場を廢して江戸時代に勤め居る貧民を救ふ爲に、茲に移住せしめて開墾を進めたものである、處が初めの内はセッセと開墾にも從事し、素性らしく畑も打つたが、從來虎の威を籍り百姓町人奴がと嘲つて遊手徒食に慣れた下郎共迄が、明治四鬼の如くになり鍬は痛み、肥桶迄かつぬぼ食ふゐから堪らない、倒令緑に離れればとて少し氣の利いた仕事もがなと打ち縋つて、一人去り、二人去り、五年頃までに大抵何處となく逃げ去つたから、其跡は、自然荒蕪に帰せざるを得ない傾きになつた、仍て居られた者迄が寄り〳〵相議して明治六年に開墾會社を起して鹿爪らしく規則などを拵へて見たが逃ぐるものはあつても、寄り付くものもない奏でであつたから、開墾された土地は大部分紅員に騙着されて終つたとのことである。

街の眞唯中住野と云ふ（停車場を距る十五六町）處に移住して細い畑りを墾げつゝあつたが、迚ても麥や豆では追付かないと云ふ處からボツリ〳〵桑を植ゑて、漸く明治二十三年から同ひ初めたとの事であるが、現今は七町歩の桑園を有し春夏秋で年々六百貫内外の繭を取つて居る、而も其繭は全部紡績製糸に出して一つも繭にして居らぬ（酒々井に繭氷紡の分場がある）其製糸に出る高は昨年度百十五貫餘、昨年が六十三貫、昨々年が四十九貫餘とのことである、尤も昨年と一昨年とは他から少し繭を買ひ入れたとのことであるが八街の地方では此の産に出づるものはない、否八街のみならず千葉縣ドコにも此ぶ敢むるが除てはない、最て五六百貫の繭を收むるが除てはない、赤之を全部製糸して遊ぶのも除とするに足らぬが、只唯除とするに足るものは其蠶室と經營とである。

茲だ面白い經營とは

其蠶室から說明しやうが、日繪に在るのは夫れで、今桑摘みから離つた迚中も其前に居る、眞に寫眞や繪に書くならば立派であるが、此の蠶室は、堀立の竹の柱に蠶の屋根云ふ仕組である、マサカ柱が竹でもないが間口三間に奥行二間半で、堀立の柱へ一尺三寸上つた處に板を仕組んで、床板丈けは確かに張つて中央に二尺五寸に三尺許の盛がある、屋根と壁とは莚である、而して現今七棟建てあるが何れも南向でもあるし北向きでもある、家が時計の針の樣に廻る譯で、三間目口の中央の一間、南北共に左右に動く障子で其他は五寸厚さに莚を木綿に宛てゝからげてあるので、雨降れば其障子に外から簾を吊る樣になつて居るのみで外に越向とでもない而も屋根は四方拜みであつたからドッチ向きでも云へぬ、例へば指手を打つてドチラが鳴つたかと聞く樣なもの左斯る蠶室であるから壁からでも屋根からでも、床下からでも風は自由左右に通じて、中に廻してある紙張はガサン、コツンと莚と共に衆樂すること、もある、其樂樂すること、畑りが或はゆるく或は急に一張一弛するのは伸々雅致がある、吾輩の見た時には四令の蠶兒が五十目分と二令の蠶兒が五十目分許り椿の畑に育てられて居つた。

此の蠶室に移すのは二眠起きてからで二眠迄は居宅の方で飼つて居る、居宅と云ふても背しと忍ぶ古き破屋であることは今クダ〳〵しく除述するにも及ぶまい、此の二間半三間の一蠶室で六尺能を使ふて居るから、十七八匁の蠶を飼育し得らるゝ割合で、此一棟に屋根から壁から床板から悉皆で此築費が四十五圓から五十圓の間であるとは又安ではないか、尤も二年に一度は壁の塗り換へも否、縛り換へをせねばならぬが之が補足費と手間代とで一圓五十錢を要するとのことである。

實驗から得た勞力分配と經濟

仍て早く聞かんと欲する處は經濟關係で言ひ換ゆれば換勘定はどうか との問題であるが、之を說明する爲には赤勞力分配の狀況から述べねばならぬが、後が見に行つた折には男が六人女が五人秋本君と君と二人と雇人が三人、女が主婦に嫁さんに屬て女が二人（或は娘だつたかも知れぬ）都合十三人で、外に赤坊と子守とも居つた、兎に角勞動に堪ゆる

ものが十三人で、春第一回が五十日第二回に十四五日隔てゝ五十日位掃立て、夏蠶と秋蠶を六七十日位宛掃立てをするのであるから、忙しくもなく暇もなく、五月初めから九月中頃迄セッセと働いて居る。

處で吾輩が茲で秋木君の收入をサラケ出して勘定するのは濟まないことではあるが、其處迄曰はねば御義理が惡るいから我輩の胸勘定で曰はう。（未完）

屑物整理（承前）

本會事務囑託　吉永信

汚繭は如何にして繰絲するか

養繭の方法　汚繭を養ますには、先づ以て清水に浸さねばなりませぬが、一升の汚繭ならば十五分乃至二十分間位浸すのであります、夫れから之を取り出して百八十度乃至二百十度位の湯の中へ入れて能く湯を浸込ませ、鍋蓋で抑さへて沸騰せぬやう時々其蓋を取り外づし斑煮とならぬやう注意し五七分間を經たならば焚火を弱くして十分乃至十五分程養るのであります、倘茲に御注意を願たきは此繭を養るのには出來得る限り蒸すといふ心を以て煮て貰ひたいのであります。

玉繭繰絲の圖

繰絲湯　汚繭を繰絲するには初に清き新湯を用ひ、次第に其湯の色が黒くなるやうでは絲の色が一齊にならぬから煮汁を三分の一位混ぜて初めから之を濁らせ、始終湯の色を同一にするやう氣を付けねばなりませぬ。

乃て繰絲湯の温度は百五十度より百八十度位と致しますが時季に依りて大分相違があります、即ち六七月頃は百五十度八九月は百六十度、十、十一月は百七十度、十二、一月頃は百八十度とするのであります、又夏秋蠶になりますと煮繭の時間も短く繰湯の温度も十度以上低くてよろしいのでありますが、汚れの最も甚だしいものは之を麻袋に入れて十時間程清水に浸し置き赤い汁の出た處で之を煮るとは前と同じ事であります、又解舒の最も惡るいものや色澤の甚だしく良くないものは十五分間清水に浸し置いて、燒糖を一升に付二分入れて之を煮、一度水に入れ繰絲湯には煮汁を入れずに繰絲するのであります、それは藥が入つて居るからて其後は湯の色を前通り揃へて引くのですそれから藥を用ゆる場合は必ず量を過ごさぬやう、且つ煮る時間も六七分間で充分でありますから、之を過らぬやう御注意が肝要であります。

黴繭は如何にして繰絲するか

汚繭と別に變つたことはありませぬが、御注意を要することは黴の種類に依て直に煮えて口明きとなり、非常に困ることがあるのであります、此種は多くは乾繰不充分な繭を鐵葉鑵などに入れて黄色に黴びさしたのでありますが、斯ういふ品は始め百二三十度の湯の中へ入れて靜に混ぜ時々指頭にて摘んでみて試めし〳〵煮ねばなりません又繰絲湯も生繭位の適りでよろしく、其取扱は薄皮繭のやうにせなければなりませぬ。

又同じ黴繭でも空氣中に晒して青黒いやうな黴であるとか黴が出たといつて日光に干して切りに空氣に當てゝ永く放置したものは二時間程水に浸し、十分乃至十五分養きて後火を去り、二十分も蒸した方がよろしいやうであります。（未完）

蠶種界に行はるゝ不正の實例（承前）

在松本不正蠶種撲滅期成同盟會

第六　不正製造人の實例

盜賊には、贓物故買と云ふ連路があるやうに、不正蠶種製造人には自ら又之と連絡して居る者がある、併し、先づ不正製造人の實例より說明するのが、當然の順序であらう、尤も、夫にしても、多くの實例を一々枚擧する事も出來ぬから、最も顯かなる事例だけに止める。

一、廣告の利用　廣告は便利の方法に相違ない、未だ知らざる遠方の人へは是非廣告の力に賴らねばならない、其の代り又之を濫用して詐僞も行はれる。其處で不正蠶種の製造人は、最も廣告を濫用する仕懸である、尤も、又之を濫用せねば、他に立場のないのである。蓋も一畝なり、一反なりの桑園があれば蠶室の必要あり、九尺四方の蠶室なり、一二の蠶具なりがあれば又其繼續の必要があり、新調の必要もあり、從ひて時間も必要である、資金も必要である、然るに、此の徒輩には何もないから、不斷此の濫用に勉めて居る、即ち廣告が、唯一の事業である、事業の全體である而して、又廣告が、唯一の資本である、資本の全體である、併し廣告する材料は一つもないから、一から十まで虛僞で固めて居る。

其の一例を擧げて見ると、他地方の新聞へは大廣告をしてあるけれど、其の土地では何處に住んで居るかを知らぬやうなものもある、又、近頃は貸附、販賣組合と云ふものが出來た、併し名を署して居る責任者は果して製造するのか、即ち製造せぬのか、其の土地での疑問となつて居る。

勿論、是は極端の例として、其の他普通廣告の外、大家然と自ら雜誌を發行したり、何萬と云ふ印刷物を配布して、蠶を飼つた事もないのに曰く經驗に富む、一頭の原蠶もないのに曰く原蠶強壯などと吹聽し、甚だしきは縣立高等女學校の裁判所を撮影して自己の蠶室なり、蠶病豫防事務所の顯微鏡を寫眞しては自宅の顯微鏡使用實況なりと、思ひ切つた虛を云つたり、或は五圓十圓と云ふ立派なる土產を以て、同氣相求むる他地方の奸商を語つて不正の連絡を着けたり、歩合を出して、二度と其の地へ行かぬ繭の仲買人を手先に使用したり、詐謀奸策殆ど到らざるなしであるから、他地方の養蠶家は思はず之に釣り寄せられるのである押被せられるのである。

二、蠶室も虛、名簿も虛　勿論、多數の養蠶家中には、態々來られる向もあり、或は總代を派遣される向もあつて、其の人々がイザ原蠶拜見と云ふ段になると、直證の人の立派な蠶室へ同行して、其の方の主人へは御邪魔ながら拜見致したいと申込み、而して他地方の人へは是が卽ち自分の蠶室なりと欺くのであるから時としては、出鱈目に狹原蠶と語つた所が、他地方の人の方が目が高くて是は夏蠶なりと駁された滑稽もあつた、東筑摩蠶種同業組合立夏秋蠶試驗場へ同行した所が、如何にも種類が區々なりと詰られた滑稽もあつた、が併し此術で瞞される人が多く、其人は又餘りに智惠が無さ過ぎ

るが、併し事を顧りて、標札を見るの餘裕を與へぬから、不圖此の詐略にも罹るのである。

夫から何會、何社と云ふものに又怪しいものがあつて、會員名簿なり、社員名簿なりを拝見したいと云ふと諸所の組合の名簿を綴たり、或は寫に大蠶種家の姓名を謄寫して置いて、此の通りと、白々しく示して居る。

三、不正の製造　不正製造は、違法の除去繭でも製種する、他所の蠶紙を貰受けて夫へ製種すると云ふ様に種々あるが、最も了解し易き框製に就きて其の一例を擧げう。

云ふまでもなく、框製の善い所以は、一々母蛾を檢査して、母蛾に微粒子毒があれば、其の產卵へ有毒の印を押して除き、毒のない蛾の產卵だけへ無毒の證印を押し、飼養紙の裏へは原種用と云ふ圓形の證印を押される故に、其の無毒の分だけを飼育するは頗る安全なりと云ふの點にある。

併し、框の中へ別々に蛾を入れて產卵せしめ、產卵終れば一々番號を合せて、母蛾を袋に入れるのであるから、先づ一人にて一日三四十枚位より出來ぬ夫を五人や十人で一日に千枚も二千枚も製造するから不思議だけれども、扨て其の裏面へ廻つて見ると、產卵は悉く未だ發蛾もせざる以前に、番號のある蛾袋へは已に蛾を入れてある、何故左樣の事が出來ると云ふに、手を廻して檢査成績の宜しかつた家の平製母蛾を引出し、夫を豫め袋へ入れて置くのであるから卵と蛾とに何等の緣故もない、故に、假令母蛾は檢査上無毒であつても、夫がため蠶卵の無毒を保證し得るものではない。

此の事を母蛾の摺替と云ふが、寧ろ是は母蛾の替玉と云ふ可きものである、而して、松本平の某原蠶は年々成績の宜しい所から、以上の如き平製の母蛾は二十八羽に就き四錢程の相場で、春蠶種增方の替玉に年々輸出されて居る事實がある。

滋賀縣東淺井郡虎姬村字宮部寺院道場蠶室の倒壞の慘狀

近頃、蛾を二百十二度以上の高熱に觸れしむると、其の微粒子は、色澤や形狀を變化して容易に微粒子たる事が分らぬと、珍らしそうに云ひ出して居る、併し、是等は遲い話で、母蛾の替玉も少し念の入つた方法としては、數年來不正の徒輩が、母蛾を太陽の酷熱に曝して、先に斃死するものを捨て、長く生きて居る方を更に乾燥して蛾袋に入れつゝある、即ち、學理上から來たてはないが、兎に角不正の徒輩は、疾の昔から幾分づゝ此點の研究をして居たのである。

更に、一例を擧げると框製にしてさへあれば、多面に桐圓形の製絲用と云ふ印のある、即ち檢査濟除蠶用にあらざるものをも喜んで買入れる地方もある。

尤も、幼稚の養蠶家は欺かれる筈で、二十八の區劃毎に無毒と云ふ印を押してある、夫が、製造者から仲買等への賣價は十錢で、他地方養蠶家の手へは六十錢、即ち檢査濟除蠶用同等の價を以て賣渡されて居る事實もある、他地方仲買の奸惡も、亦實に憎む可きの限りである若夫れ同功繭の製種に至りては最も甚だしいものは二千貫目の出殺繭中八百貫は同功繭であつたと云ふ事實、夫れ已に甚だしきに、年々八分まで同功繭で製種して居ると云ふ奸商もある、併し、夫では如何にも豫防吏員が迂闊過ぎると云ふ感もあるが、此の場合に於て、豫防吏員に見せる出殺繭は、矢張替玉などを用ひて居るのだ。

此く記し來ると、東筑摩は如何にも危險のようであるが、安曇にも、諏訪にも此る事例は多い、否、啻に此等二化性の蠶種の生產地ばかりでなく、春蠶種の地方などこそ、此の不正手段の先輩である、而して風穴種などにも勿論不正が多い、即ち、今や天下の蠶種界を通じて、到る處に不正は行はれて居る、幸ひにして、東筑摩では粹製母蛾の對照檢査を當局者へ依賴するとか、或は本會の如きもの、組織されたのは、必竟健全分子の多きを意味するもの、聲價の回復は何れ遠い事であるまいと信ぜらるゝ。

更に、安曇や、諏訪や、其の他全國の確實なる蠶種家も本會へ同盟してくれたならば、蠶種界の大掃除も次第に出來よう。

此の故に、本會の如きは、不正蠶種續出の間に於て多少とも東筑摩に此の健全分子あり、又偶誠を期すると云ふのは少しく急激であるが、兎に角不正商人に反抗して起つの熱誠あり、一般養蠶家の迷惑に對する同情あり、且つ、蠶種界の廓清の氣運を促進しつゝあるを以て、私かに以て誇として居るのに、安んぞ圖らん、此くの如きは東筑摩に對する世間の信用を失ふと杞憂し或は他縣他郡の同業中には逸早く東筑摩の信用を傷つくるの材料に供すると云ふが如き不心得の者が今日已に現はれて來たようである、併し、本會は東筑摩郡にのみ不正蠶種あり、故に東筑摩郡に於て其の不正を撲滅すると云ふが如き狹い量見ではない、安曇なり、諏訪なり、其他天下一般に亘りて、不正の事實を認めて居る、中には東筑摩以上に不正の多い所もあるようだ、兎に角右の次第であるからして廣く健全なる同分子を糾合し、堅固したる分子を驅逐して、天下一般の不正撲滅を希望して居るので、區々東筑摩の小區域に局蹐して居るのではない、尚、少しく餘事にわたるけれども、願はくば、此の一事に徹しても、亦、如何に今日の蠶種界が錯雜して居て、公明にして而も單純なる本會の希望に對してすら、此る防碍のある事を認めて貰ひたい。

更に、少しく露骨に過ぎるけれども、序に言ふのは、天下到る處に不正蠶種あり、東筑摩又必ずしも之無しとなさゝることは、恐らく何人にも異論はあるまい、但し、夫は玉石を混淆したものである、正確なるものあれば不正實のものもある、然らば不正實とは何ぞやと云ふ事、即ち隱すに隱されぬ不正の實例を擧げて夫との比較、區別を乞ふことが十年も後れたから、爲めに玉石混淆、今では一と口に筑摩產は什麼とか、安曇產諏訪產は什麼とか、信州蠶種は什麼とか貶顆されることになつたのみならず、一般養蠶家にも影からざる疑惧を懷かせたのである、而も、今や又躊躇す可きにあらず、天定りて不正の人に勝つのは何時の事か分らぬが、兎に角、斷乎として、此る實例を擧げ、蠶業に關係ある官民諸君の御一讀を煩はすのである。

幸ひにして、蠶種業に對する本會の意識と、少くとも長野縣東筑摩郡には健全の分子ありと云ふ事を、認めて貰らへば本懷之れに過ぎずであるが、假令認められずとも、混沌極る今日、又已むを得ざる次第である、併し、本會の主張が公認せられ、本會の如き有らゆる健全の分子が歡迎せらる可きは、時間の問題であつて、夫も五年十年の後と云ふほど遠いことではあるまいと信ずる。（未完）

製絲奬勵之歌（承前）

十二、工女心得

繰絲工女の心得は　枠の夫れより手を早く
繭の緒より氣を長く　而も好い絲繰く事よ

十三、品性

技術如何に巧者でも　品行惡しき其人は
世間の人にさげすまる　夢で忘るな此一事

十四、結歌

品性も良く生絲も好く　賣れも良ければ都合好く
帝國の名譽は何時迄も　變らず輝くものなるぞ

調査

參遠の玉絲事業

特別會員　永野莊吉

客觀或用務を帶びて三遠地方に出張したるを幸ひ、州豐橋及二川地方に於ける玉絲事業の狀況を視察したから、其梗概を記述して茲に報告せう。

三遠玉絲事業の濫觴

我國玉絲事業の發達として斯界に知られたる群馬縣多郡前橋附近と相並び、最も盛んなる參州豐橋及二川遠州濱名郡の一部）地方である、今之が沿革を尋ぬるに、凡そ三十年前明治十二年群馬縣勢多郡富士見村の人島伊勢松と云ふもの、其の內緣（妻小淵しちと共に遠州濱名郡より二川に移住し來り、僅々座繰器二臺を以て創業に着手したのが本事業の濫觴である、當時同地方の蠶は其だ幼稚であつて玉絲業の如きは原料の不足より專業として經營し難き爲め、傍ら年々女工の養成に腐心しつつ七八年を閲して漸く發達の端緒に就き、時に沿て二十年四月不幸にして夫伊勢松は病に罹り間もなく同年六月を以て死去したので事業に一段跌を來さうとしたが、隣保に援けられ其敢爲の氣象に感銘せられたるシチは寡婦の身を以てして事を繼承し、一身を擲て經營に當つたのであるが、此の間に他面の蠶業亦逐年發達し來り比隣亦本業の前途有望にして利益のあるを悟り、シチに就いて技術を練習し、本事業に從ふもの年々增加するに至り、二川は勿論遠州濱名郡の一部に及び遠州豐橋及び遠州濱名郡の一部に及んで、創業以來茲に三十年間の歷史を作つたのであるが、其の間盛衰常ならずして幾多の艱苦困厄に遭遇せるも、シチは能く此困難と奮鬪して遂に斯界に貢獻するに至つた、其功や實に偉大に属す、今日の有力なる玉絲事業は全く同人の誘導啓發に因れる賜と云ふも敢て過賞ではない、今日にあつては參遠の玉絲業は、シチ一人の力のみならず、寧ろ玉絲の參遠なる所以に至り目下本業に從事せる當業者の數は百三十人であつて、現在の繰絲釜數は實に七千を以て算せらるゝのである、而して組合員の數は實に七千を數へ、此の數は既に古稀に近き老齢に達してゐる御年元氣が旺んで、多くの女工を督勵指導して百五十釜の工場を有し、盛大に本業を經營して居る、其に現に斯業界の功勞者といはねばならぬ。

玉絲事業經營狀況

事業經營の狀況は組合員各自に工場を設け、其釜數少きは三十釜內外であつて、多きは百五十釜以上に及び、目下は創業地たる二川地方より豐橋附近最も盛んであるが、何れも百釜內外を有してゐる、而して釜數に應じて二馬力內外の「インジン」及び之れに相當せる汽罐を備へ、以て蒸煮及び再繰に、洗錦機器を應用してゐる、其組合十戶若くは二十戶の內に更に小組合を設け、原料より燃料たる粉炭其の他の薪炭に至る迄共同購入の方法を採つてゐるのである。

工場の設備

工場の設備は普通器械製絲工場と違つてはをらぬ、平長家の工場であつて、中央の通路三尺五寸若くは四尺の處を三和土に敷き、側に繰絲床を上に座繰器を取り付け、女工作業の背面は三尺の通し窓にして前子張りとなし、以て光線の透射を計つてをる。

繰絲器と繰絲方法

繰絲器は一般に上州式を採用してをる、繰絲器即ち座繰しく構造の異れる點を擧ぐれば、燃絲器に代用するに一般に敢を取り付け、小環を裝置し、接緒器たる弓形より鍍金の距離は一尺七寸、敢より三寸の間隔を以て環に通してある環と手振りの一尺、小枠の周圍は一尺六六寸五分、幅七寸の繰絲器の用材は杉若くは松を用ひ、小枠の用材は「ルヒ」を用ひ、繰絲方法は素繰りと煮取りの二樣となし、目下其の多くは煮繰りであつて輸出向きを主とし、繊度は三十五以上四十「デニール」內外の太物を以てし、素繰にありては努めて細節に注意し、繊度二十以上二十五內外を目的とし、多くは內國向きを主としてをる。

繰絲工程と賃銀

女工就業時間は午前七時より午後四時半に終る、其の間九時三十分、內食時間は午前十時三十分を控除すれば、全く就業九時間、一人一日の繰絲量は熟練せる一等女工は七十匁より八十匁、裏に不熟練なる女工四十五匁以上である、さうな、今假に一升の繭を平均（原料の良否に由るも）八匁五分とすれば一升の繭を一等女工が約八九升普通女工が五六升を繰絲し得るものに相當してをる、而して賃金は十匁五錢であつて一等女工一日の平均賃金四十錢、其以下は二十錢內外である尚其の內より一日の食費十錢を引き去り殘額を月末に女婦ふ規定にしてをる。

女工の養成

女工の養成に關しては組合の規定により、養成期間は百五十日より二百日とし、通勤者百五十日寄宿者二百日、其の間には食料のみにて無給とし、其の期間を過ぐれば繰絲量相當の賃銀を支給する、最初女工雇入れの當時五ヶ年間を契約して養成する規程である、中途他の工場に轉ずる女工等絕えて無く、且つ各工場共に規程を遵守してをる、又女工の年齡に關しては十五年以上四十年以內とし、別に規定はない

女工の養成に關しては組合の規定により、養成期間は百五十日より二百日とし、通勤者百五十日寄宿者二百日、其の間は食料のみにて無給とし、其の期間を過ぐれば繰絲量相當の賃銀を支給する、最初女工雇入れの當時五ヶ年間を契約して養成する規程である、中途他の工場に轉ずる女工等絕えて無く、且つ各工場共に規程を遵守してをる、又女工の年齡に關しては十五年以上四十年以內とし、別に規定はない

やうである。

女工の就業狀態と風紀

女工就業の有樣を見るに就業中は一人の私語する者無く、又餘所見もなさずして業務に熱心忠實であるのを認むる、之れを他の製糸場に於て多くの女工が、就業時間中徒らに私語して雙眼を觀して笑びさゝやき、時々之れを靈視して笑びさゝやき、甚しきは大聲放歌し場外數丁の外に達するの不體裁を示しつゝある女工に比すれば、確かに範とするに足るのである。更に区面に於ける女工の風紀につき工場主以外の某工場病豫防庚員其の他に就て之れを聞くに、其の言に曰く數千の女工中には風紀如何はしき者なきにあらざるべく必らず立派とは言ひ難いが本員豫防事務所に勤續三年間なるも、今に醜聞を耳にせない、本事務所（豊橋）の如き洗濯婦二百人以上出入するから上り、直ちに耳に入る筈であるけれども、今日迄非難の聲なきのみならず、反つて玉糸工場に勤むるが故に素行には懸念なからうとは當地方人の一般に有する信念である云々、而して此の點は乗口期せずして一致してをる、亦以て如何に女工風紀の佳良端正なるかを窺ふに足るであらう。

愛知縣東郡牟呂村字五軒町に於ける強震後の建物

荷造りと檢査

荷造りの方法は大枠より取り外し、乾燥の上、十個若くは八個を一括となし、結束法は烏田造、総造長手造の三種であるけれども、其多くは長手にして括り、にて二廻し五ヶ所を結び一括り四百匁内外を標準とし、之れを紙袋に入れ、青帯紙を巻き、組合の商標を貼付し、更に檢査濟の上證紙を貼付する。一梱は二十四括りを以て荷造りを爲すものであつて九貫を目的とするも、多少量目に増減は免れざるものゝやうである、荷造り出來の上は之れを組合檢査所に送りて、一梱毎に十五匁を繰り取り、繊度類節強伸力色澤趣味の正否により左の六階級の等位を附けるのである。

優等金鶴　一等金紅雀　二等金孔雀
三等金鳩　四等金鶏　五等金ペパ？

原料購入と問屋仲次商

原料の買入は組合員が直接府縣に出張して購入する場合がないでもないが、其多くは坐ながら問屋則ち依託商の手を經て購入してをる、此の依托商なるものは豊橋二川共多數あるが、其の間慣例合ひで生産者たる買人を苦しむる等の弊なく、且取引實に活潑であつて、問屋會社は買賣兩者に對し眞に公平切實を旨とする取引上相互に於て毫も不信の念を抱くものなく、如何にも安心せる實況に至りては他に其類を見ないのである、其の仲次商なるは、利益は、此依托商の倉庫若くは依托者の倉庫中にありて格安のものから順次製糸家に賣れ行くものである、而して荷主は問屋を信用し、荷作りをなして販賣を依托する、若し此場合作業不味なるときは庫敷料を拂ひて相場を見送るのであるが、問屋は全く日常の利を顧みず、何れも其の信用を重んずるの氣風は、營業振りに顯はれ、其に商業道德の進捗してをるのを認むるのである、故に仲次商等の好策を弄する餘地なく、自然誠實を旨とするやうになるが、個々不正行爲の仲次商があれば、全體より取引を謝絶せらるゝから、其の制裁は遂に好商等をして跡を絶たしむるに至るのであるから、其の間買人の躍否を求むるに取引を終るの價が標準相場以下であるなれば、談話として取り除け、若し一錢たりとも標準相場を超過すれば賣買成立と見做すものであるから。（未完）

愛知縣東郡牟呂村字大郎大郎会村神社前の建物震災後の狀態

農蠶學校の蠶室は果して贅澤なるか

農蠶學校の蠶室は果して贅澤なるか

農學士　針塚長太郎

本篇は針塚文部省書記編著に語られた談話の梗概なり雖も敢て聞き誤り本旨に背くることなきを期す

農蠶學校の蠶室を批評する者は誰か

農蠶學校の設備に就ては斯教育者の隨分苦心するところで、創始以來既に年所を閲してあるから、今日に於ては各學校とも相當の研究が出來てをる從て餘り非教育的の餘りに非常識の設備もせないやうに至つたのは差し斯教育界の一進歩であらうと思ふ、然るに世間の批評を下すものは曰く、（農蠶學校に於ける蠶室は餘りに家大壮麗に失して居る、コンナ處で養蠶を習つても之を實地に應用することが出來るものでない」と進んでは當路の有力者迄にも頼りに此問題を以て農蠶教育者の非常識のやり方を攻撃するさうであるが、甚だ遺憾の次第である。

批評者は如何なる資格を有して居る者であるか、如何なる智識と如何なる經驗とを持つて居る者であるかは判らないが、兎に角學校教育其者に就ては何等の智識も經驗も持たぬ浅学晩漢であるに相違ない、斯かる者が大きな顔をして、イヤ利口さうな顔をして、當路の有力者などに自己の創見を題目も無く說き立て、教育者が折角職業を続ける研究もせず調査も遂げず、軽々に一言の下に破壊せんとするが如きは遺憾千萬の至りである、圖目八目と云ふ事があるから親切にして且つ能く調査研究を遂げられた批評は大に歓迎するは勿論であるけれども、其然らざるものにありては吾等が到底首肯することが出來ない。

なる程農蠶學校の蠶室は彼等の目から見たならば或は贅沢に見ゆるであらう、乍併之を見て贅澤に陷るものと思ふの云へば學校の施設に對しては一マダ批評する丈の資格の無いものである、此蠶室しく農蠶學校中何れへなりと入學して更に三年も勉强するが良い、其上でなければ眞に識ずるに足らんのである、といつても一サカにソツも通れまいから一言茲に其妄を辯じておくの必要がある。

蠶業教育は生徒に趣味を持たするのが第一の要件

一體農業とか蠶業とかといふ實業方面の教育は文學に關する教育とは違つて非ハイカラ的であるから今日の場合大概の生徒が喜んで之を修めやうとせぬのである、故に之を教ゆる任に在る者は常に、其教授上趣味を持たするやうにせねばならぬことであるが、蠶業教育に於て生徒に趣味を持たする第一要件は各自の飼つた蠶を以て立派に養育せし美事に論を遊らしむるに在ることであるから、ドンナ蠶室でも構はぬといつて蠶兒の飼生に叶はぬやうな場所で飼育せしめては成績が不良であつたならば、生徒は決して之に對して趣味を持つ者ではない、趣味を持たぬ上は何を教へても其效力のないことは今更言ふ迄もないことである。

實業教育は實驗的證明が必要

又實業教育は凡て實驗的證明に據らねばならぬ說く數千言如何に立派に學理を說き眞理を述べても、イザ實驗となつた場合に、一々事實と齟齬するやうなことがあつては、啻に生徒をして其誤目に對して疑惑の念を生ぜしむる計りでなく遂には教師其人の信用に迄疑を抱かしむるやうになるから、必ず教室に於て教へたことは實驗と相一致せしむるやうにせねばならぬ、尤も事柄に依ては必ずしも學理と實驗とが直ちに一致するとも斷言は出來ぬが、實業教育の如きは教室で教へたことは實驗に依つて必ず學理の如きは教室で教へたことは必ず學理の盛衰ならざることを證明し、併し其證明も不完全な蠶室假令ば出來るとの事である、併し其證明も不完全な蠶室假令ば出來るとの事である、併し其證明も不完全な蠶室假令ば光線の入り工合も宜しくなければ排気窓も滿足に設けられてゐないといふやふな蠶室であるならば、失ず多くの場合に於て不可能であるといはねばならぬから、農蠶學校の蠶室は出來うる丈け完全に設備せねばならぬことである、勿論實澤の設備は不必要なるのみならず大に批難すべきであるが、農蠶學校の蠶室より廣く又遠に且つ立派であるから贅澤であると思ふ、批評者の口調は非常識の設備を以て非實用的の餘りに非教育的の餘りに贅澤であると云へば農家の子弟入る小學校は農家の樣な建物を要し、農商務省や蠶絲會の事務所の如きも普通農蠶業家の如き構造に比べて大した不都合はなかつたと思ふ、然るに上に言ふ事が出來ずやり、且北谷公園側の堂々たる煉瓦造は全く無用の長物と云はねばならぬ、農蠶學校の蠶室は決して此等と其の必要の程度を比すべきものでない、又其の贅澤言葉の程度の及ばざる事も數千萬里であると言はねばならない。

格別贅澤呼ばりする程のものではない

ソコデ現今に於ける農蠶學校の蠶室を見るに一二三百人の多數の生徒が、入り込むのであるから、例之ば梯子長を造るにも普通の生徒のより十倍も二十倍も堅牢に又必要ある必要がある、其他の個所も夫れ相當に大きく又堅牢に又動作の良いやうに而かも蠶兒の生理に適ふやうに極めて合理的に建築せられてある丈けのことで、格別贅澤呼ばりをする程のものではない、然るに徒に自己の見を振り廻して當局の施設を非難し、其苦心の存する處を沒了し去らんとするが如きは甚だ心得違ひといはねばならぬ、勿論斯かる愚論に耳を傾くる者もあるまいとは思ふけれども存外盲目の多い世の中であるから茲に一言しておく次第である。

原々種の官營に就て

學務委員　八田達也

去二日鳥取縣へ出張の途次本會へ立寄られたる八田翁を捉へまいて蠶種の課稅問題に於ける其意見を叩くべく一夕其旅館を訪ふた、其時翁は蠶種の課稅問題よりも更に大なる問題があるとて喋々說かれたのが原々種官營問題てある何故に翁は本問題を熱心に唱導せらるゝてあらうか讀者請ふ本稿を一讀して其の意の在する處を知り賜へ

悠々一日の安を偷むの勇氣はない

蠶種に課稅問題とな、夫れよりも大問題がある原々種官營問題即ち之てある、何が故に此問題を以て大問題なりと絶叫するか、其淵源するところ國力の消長問題に大關係を有するからてある、看よ現今に於ける生絲貿易の趨勢を此趨勢が改らなかつたなら徒に杞人の憂を繰返す譯けでもないが、近き將來に於て蠶室は鼬鼠の跳梁に任せ、桑園は雜草の繁茂する處となり、製絲場の荒廢、市場の寂寞等見る影もなき慘狀を呈するやうになりはせぬか、兎に角形勢日々に非にして本年二十萬梱輸出したのが、翌年は十七萬梱に減じた、其翌年は亦十五萬梱になつたといふやうに、ズン〳〵輸出生絲の數量が減少したならばどうであらう、生絲の御蔭で漸く輸出入の權衡を維持してをる我邦は、爲に其國力消耗して、遂には滅亡國の仲間入りをするやうなことになりはせぬか、吾輩は徒に悲觀說を主張する者にはあらざるも、併し現況を目覩して太平樂を陽ひつゝ、悠々一日の安を偷むの勇氣はないのである。

生絲貿易不振の原因

一昨四十年の夏頃迄は旭日昇天の慨ありし我生絲貿易は何が故に今日此悲況を呈するであらう、之に幾多の原因の存することは吾輩能く之を認むるも、併し指を第一に屈したきは我邦より輸出する生絲の雜駁にして、其品位の一定せぬといふことと之れである、換言すれば海外需要者の希望に副ふ生絲が尠い結果、其聲價を失墜したるに因るのである、果して然らば我邦の生絲は何故に雜駁であるてあらうか、何故に其品位が一定せぬてあらうかといふことを深く探究して、之が矯正策を講せねばならぬことになるのであるが、今吾輩の所見を遠慮なく述ぶれば、蠶種家養蠶家及製絲家の三者が互に其歩調を一にして進まぬどころか、時には相背反したる行動を取らうとするから、生絲の原料にして最も大切なる繭が雜駁になるといふのが、本邦生絲の雜駁になる最大原因であるといひたいのである、勿論此他にも種々なる原因はあるであらうが、併し原料繭の雜駁なるに比しては固より齒牙にかくるに足らぬことゝ信ずるのであるから、吾輩は茲に之を說くの煩を避けて、原料繭は何故に如此く雜駁なりやの問題に就て、少しく述べて見たいと思ふのである。

原料繭は何故に雜駁となるてあらう

そも〳〵生絲の原料たる繭は何人が生產するのてあらう固より養蠶家てある、然らば養蠶家は何故に好んで雜駁なる繭を造るてあらうか、否養蠶家は好んで雜駁なる繭を造るのてはない、蠶種家及製絲家と養蠶家との關係が自然に之を造

らしむるのである。

由來蠶種家と養蠶家と及製絲家とは鼎立して同一歩調の下に進まねばならぬ關係があるにも拘らず、蠶種家の多くは其蠶種を養蠶家に供給するに於て多く誠實を缺き、養蠶家亦製絲家に繭を供給するに於て多くは忠實の念に乏しく、而かも製絲家の養蠶家に對する態度は、養蠶家の製絲家に對する夫れよりも一層甚しいこともある、現に我縣に行はるゝ椿飼の如き、世間に於て彼是非難するが如き絶對的悪飼育法と稱すべきものにあらずして、時に此飼育に依れる繭であつても頗る立派のものゝ存することは不可爭の事實である、然るに製絲家の之に對する椿飼の繭なるが故にといふ頭から一段其價値を見下して、良いも悪るいもなく蹈みつけ合に蹈みつけて而して後安々買取らうといふ殘酷の處置を敢てするのであるが、夫れなら普通飼育の繭をば夫れ相當に高く買取るかといへば決して然らずて、椿飼の繭で安い價格の標準を立て之に依て普通飼育の繭をも買取らうとするのである、又同じ普通飼育の繭の内でも、厚飼ひにした繭と薄飼ひにした繭とは自ら其品質が違ふから品質相當に買取るのが至當であるのに、多くの製絲家は決してそうでない、勿論之を鑑別して

滋賀縣東淺井郡田根村尋常小學校强雹後の慘景

買取る丈けの技能の人も尠いが、中には實際良繭なりと知りつゝも大形に失するとか、小形に過ぐるとか、光澤がイケぬとかといつて、種々なる難癖をつけ、胡魔化しうる丈け胡魔化し去らうとする者もある、尤も是等は多く製絲家と養蠶家との中間に立てる繭仲買商人の所爲に屬することではあるが、兎に角是等の關係は常に養蠶家と製絲家とが、圓滿を缺く動機となるので、折角良いものを造つても蹈み付さるゝから詰らぬといふ觀念をイツとはなしに助長せしむるのである、其結果は養蠶家亦製絲家に對して忠實の念を缺き、可成手數を省き給桑量を減じて實質よりは外見の良いものを造らんとし、中には若掻きの際をも敢てして顧みざる者もある、而して又蠶種家の養蠶家に對する、徒に誇大の廣告を爲して之を釣らんとし、或は漫りに新種類を造りて顧客を増すの手段として居る者もある、其甚しきは同功繭に依て製種する者、或は雄蛾の不足せる場合に異種類の蛾を以て再交尾を爲さしむる者等ありて其他不良の手段方法は巧に法網をくゞりて行はれつゝあることも事實である、左なきだに雜駁に流れ易き種類は益々雜駁に流れて、今日に於ては七百餘種の多きを算するのである。

大聲疾呼したきは原々種の官營問題

要するに之等は銘々自己本位の然らしむる處で、三者互に相連絡して其利害を共に與にするの考へなき限りはまた如何ともすることは出來ない去りとて此多年の惡習慣は一朝にして之を破ることも出來ないから漸次之を矯正するより外に策なしである、とはいふものゝ日々海外顧客の信用を失墜しつゝある此際袖手傍觀徒に甘露の日和を待つ譯にも行かぬから何等かの方法に依り之が救濟の策を立てねばならぬが吾輩茲に大聲疾呼天下の同業者諸君に告げ、併せて政府當局者に望まんと欲する問題は即ち原々種の官營問題是である。

（未完）

中米及南米視察談（承前）

法學士　岡　實

巴奈馬の事は此位に止め南米に移ります一々述べると長くなりますから大體を掻き摘んで御話致します。

七、政治の現狀

南米各國の政治上の現狀は如何であるか、御承知の通り凡て共和國であります、而してブラジルの外は西班牙人が其政權を有つて居る（ブラジルは葡萄牙人が有つて居る）

少し別な話になりますが、世界の地圖を擴げて見ると、此の北米南米なる者は恰度歐羅巴の方から各國が南北の順序に從ひ影を映じて居る、即ち歐羅巴の鏡でございます、即ち英吉利は加奈太、北米合衆國に、佛蘭西は一時ルイジアナ地方に、其次に來るのが西班牙是れがメキシコ以南に、葡萄牙はブラジルに、各其影を映じて居る、即ち太西洋を隔てゝ歐洲諸強國が地理上の順に從ひ、亞米利加大陸に各其新出張所を造つて居ると云ふ有様でございます、此新世界即ち各國民の寄り合ひ世帶の場所中、其の北部へは我々亞細亞人が這入れないと云ふのは、抑何たる理由であるか此は大に熟考すべき問題である。

偖南米各國の政治上の狀態は如何と云つて、御承知の通り共和政體は隨分弱點がございます、此弱點の凡ての例を南米に發見することが出來る、殖民地から獨立國に育ち上つた國でございますからして、どうも國家と云ふものを會社事業の様に考へて居る、大統領又は大臣の如きも往々にして日本等で會社の重役が惡いことを行るが如くに、國庫金を消費し又收賄の如きも決して珍らしい話ではない、其の他投票は金の爲めに動くと云ふ様に種々な惡例は其標本を南米に於て見出すことが出來ます、どうも西葡兩國の人は北歐人の如く、政治上の經營にかけては上手であるとは到底言へない。

八、財政上の狀態

南米各國を通じて富源は非常なもので御座いますが、財政狀態は極めて惡く多數の國は不相當な國債を有し、又金紙の差をなくせんが爲めに、政府は非常に盡力致しますが、債務者と債權者とが利害を異にするにより、總て政治上に二つの黨派があつて、其勢相當ると云ふ有様であるから中々行はれ難い、即ち紙幣の値段を下げると云ふと債務者は悦ばない、併し債權者の方は之を上げやうとする、依て國會に於ては終始兩派の執着奮鬪が有る、それが爲めに問題は容易に落着しない、此金紙の差があると云ふことは貿易上に大なる害を及ぼすが、又之れと同時に英吉利人が中々巧妙な藝當を遣るそれは南米各國に於ては英吉利人が經濟上及び政治上の實權を握つてをるから、彼等の一擧一動烏渡した事柄からでも金紙の差が起ることが出來る、尤も紙幣相場は倫敦に立つのであるが、此金紙の差を投機の目的にして生活して居る人さへ澤山あります。

又各國共に國債を有つて居るが其國債は主に英吉利人が有つて居るので御座います、元來借金と云ふものに付ては個人としても亦國家としても餘程關係が似て居ると云ふ實例を南米で見ました、國債を外國人が多くもつとすると、其國に對してはドーモ頭が上らぬ、南米各國間に國際問題等が起つても大概は戰爭することが出來ない、或程度までは戰爭準備をするが、偖いざ戰爭といふ段になると、債權國たる英國は苦い顏をする、英國が苦い顏をすると政府は何事にも手を出す譯には參らぬ、結局一國の權利問題を戰爭で決するを得ずして、多少強制的の意義ある仲裁裁判に附せられるから、南米の如く仲裁裁判に附せらるゝ事件の多いところはない、英吉利は實際南米を領有して居ないけれども、然しながら自分の意見は何んでも行はれ易き位置に居る、英吉利人は實益を收むることを考へ決して政權を南米に樹立せんとは考へて居らぬ、而して南米の大なる利益は多く英人の吸收する所である南米に行つて見ると更に英吉利のえらい所がわかるのであります。

九、商業

それから南米に對する商業は如何といふことを述べます南米を通じて白人は一千萬人に滿たない、白人種以外の土人とか、又は黑人の如きは大體に於て生產もしなければ消費もしない人民である、寒くても宜い裸で居る、まづくつても宜い腹に滿つるに足ればよいと云ふ風な人間である、斯の如き人種が幾千居つても之を以て經濟上又は貿易上の單位と見ることが出來ない、而して今云つた樣に白人種は一千萬に滿

たゞすといふ狀況であるから、而して又之等白人は一所に集合して居るのでは無く、所々に散在をして居るのであるので今日の貿商業を南米で遂げ、それが直ち利益を得ると云ふ決して云へない。貿商の如きは大市場なれば成功するならんも小賣は貿易の單位と見る譚には いかぬ、歐洲人は一時損をしてもかまわん他日の優先權を收めて爲めに相當の店を張つて置くと云ふような つもりで、事業に着手して居る、然し彼等は綿布、毛布、織、及び鐵製品建築材料といふが如く南米の光り雷要する商品を賣るのであるから、日本の商人に比しては除程仕事がやり宜いのである。

十、鑛　業

鑛業の如きは極く容易に發掘の出來る所は大抵既に占有して居りますが、御遠方の地には、發掘すべき有望のものがマダ〳〵ある。

南太平洋濠洋の鑛山地方は特に人烟が稀薄であるから、鑛山事業をやるにしても、豫想外に大仕掛の準備を要する即ち、勞働者に食物を供給し得る兵站の設備をして、而して潮流の富源に接近しなければならぬと云ふ狀況で、日本の如く遊作なく一寸した仕掛で道れる場所は今日では無くなつて仕舞つた、斯の如く鑛山事業には大資本を要する、而して歐洲人中大資本を投じ得らるゝは英人の外には ない、南米の鑛業を英吉利人が獨占せんとするが如き勢を呈しをるのは一つは資本の力の是に至らしめたのである。

十一、漁　業

それから漁業の事でございますが、勿論場所にも依りましやうが、魚屋は實に驚くべき程澤山居る處であります、例へは智利のアントフアガスタと云ふ處は、魚は鰯同樣である、魚は極く陸地近くに詰め寄るから海獸が群をなして魚の群をを追ふ彼の地のデルフインと稱する海獸が群をなして黑く なる、デルフインは下から攻つて魚を追窮するに、魚は水面に逃れ海面に山を築くと云ふ樣な有樣である、此の節は海に群をなしてその上を翔り集り、非常な速力で魚を啄む、其狀況は實に面白い、而して陸地では果の小供等が膝常まで波の中に這入つて、棒を以て追ひかに諸々に推し寄せたる者を打ち殺すと云ふ樣な有樣で、魚は蟲と同じく有價物件ではないのであります、斯ふ云ふ處ありますが、要するに、魚屋の多いことは之を捕ふる人のいのに微じても明らかである、又鯨も智利の南方には澤山居ると云ふことで御庫ります、航海中鯨群に逢ふ事は珍らしくない、若し日本が彼地に遠洋漁業を造れば必ず相當の利益があると思ふ、但し人口が除り澤山居りませんから、魚が幾何あつても遠く へ運搬することが出來ないものであるから所謂水產製造業を發達せざるよりは、他の事業の樣に多くの利潤を見ることが出來ないかも知れないが、必ず相當の利益は得らるゝであろう。

（未完）

面白き小學兒童の貯金法

特別會員
岐阜縣會議員　長谷川藤藏

岐阜縣惠那郡の東野村は風穴蚕種の製造地として其名天下に聲々たるもの である水源は其村に於ける蚕種製造家として又同縣會議員として有力なる長谷川氏が福岡に渡られた談話中の一節である小學兒童に貯金をしむるに最も面白い方法であるとは仰せたから本誌に掲げて後に紹介することにした

岐阜縣蚕種家の勢力は惠那郡

私の本地は岐阜縣惠那郡東野村と申します、全村の戶數三百戶に對し、耕地反別百四十町歩、山林反別千六百町歩ありまして、此内桑園は耕地の六割を占めて居ります約八十四五町歩あるせう、全村に於ける蚕種の製造額ですか……左樣で製造が三萬五千餘枚製造が二十六萬餘枚是合せて三十萬枚位は出來ます、併し其大部分は風穴秋蚕種であつて春蚕種は僅かに五千枚位のものであります。

我が岐阜縣に於ける蚕種製造家は、昨四十一年度の統計に依る全額で四百八十四戶ありまして、其製造額は普通製造十四萬四千七百四十五枚、極製八十二萬二千三百五十五枚になつて居ります、私の村丈けでも製造家が六十九戶も有つて其製造高三萬枚に達して居りますから、岐阜縣の蚕種製造業は惠那郡で持ち惠那郡の蚕種製造業は東野村で持つて居るやうなものであります、故に我郡に於ける蚕種家の勢力は太いしたものであります、其勢力が一方に偏して居る爲に騒といふ上から は兎角穿子板ひせらるゝやうな傾きがあつて現に蚕種稅といふやうな無理不當の二重稅迄支拂はねばならぬことになつてをります。

中流の生活は蚕種製造業の御蔭

私の村はズット以前迄分貧乏したことがありまして、片端から北海道や其他の地方へ移住しかけたのでありますが、此風穴秋蚕種の製造業が盛に道るやうになつてから追々各戶の懐合も直つて來て今では村に全體の收入三十萬圓一戶平均千圓以上の收入になつて居るので移住ところか蚕種製造時期にてもならうものなら他村から澤山人が這入つて來るのであります、先刻も吉池理事から君の村も近來隨分貧澤に流れて來たやうだが般鑑遠かず近く信州遠州間に在りとの御忠告をうけましたが、ホンに近年立派な家屋がイクラも新たに築せられ瓦葺でない家などは幾戶もないやうになりました、即ち村内が富裕になつた證據であります、兎に角ズッと抜き出て大きな財產家もないが又非常に貧乏してをる者も なく、全く蚕種製造業の賜であります、故に蚕種製造の期になりますと老若男女を問はず、悉く働きますが、茲に最も愉快なのは小學兒童が蚕種製造家を手傳つて呉れるといふ一事であります。

小學兒童の貯金

我東野村尋常高等小學校の現在生徒は二百六十人許りあります、毎年九月一日より五六日間即ち農繁期の最も忙しい時期に休校して教師が夫々生徒を引き連れ各製造家を手傳はしむるのであります、尤も尋常一二年の其仕事は繭を並べたり蟻を拾ふだり又蟻を放したりするのであります、之等の仕事は生徒の方が却て大人よりも敏捷てナカ〳〵出て遣りますので、何れの製造家も大に歓んでとりますが、賃銀支給の方法ですか生徒一人の日當最高三十五錢最低十五錢として日當でなく遣つた仕事の量に對して支給するものであります、假へば蟻拾ひ蟻放しの如きは日當ですけれども、繭並べ繭掻きの如きは、趣一枚に付三厘と定めておきますが、學校の引けた後ち即ち午後の三時頃から六時頃迄働いて一人で五六十枚位掻き取る者もあります、て生徒は是等の賃銀を悉く貯金にするのですが此七月末の調べによると其貯金總高が二千圓で一ヶ年に四百圓内外宛增加致します、庶積んで山となるとやらで學校生徒の働きも侮ることの出來ぬものであります。

今日勤倹貯蓄を奬勵する結果何れの學校生徒も皆貯金々々といって居るやうですが、俳し戦から貰つた金を貯蓄せしむるのは餘り褒めた事ではない、多少なりとも生徒が自ら働いて得た其報酬を貯蓄せしむるやうにすれば、自然幼い小供等に良習慣をつけることが出來ますから、其土地々々に依りて相當の仕事を見出し或期間生徒に働かしむるやうにしてはどうかと考へて居ります。

現代武士道の典型

故酒勾農學博士（承前）

水曲山人主筆　加藤知正

あゝ明星隕つ

故博士の斯學に造詣深きは世の皇げて認むるところにして、彼の農學博士玉利喜造君と共に農界の雙璧、二大明星と稱せられ公私萬案皆其の總を敬慕し、其功を仰ぎしに、天命博士に幸薄くして遂に其儚悲境に自盡せざるべからざるに至らしむ、あゝ今や明星隕ちて農蠶界爲めに其の暗きを愛えんとす、博士の死其に博士の爲に惜しむべく、農蠶界の爲めに更に惜しむべきなり。

夫れとなき遺訓

自盡の前日なり、晩翠夕陽に顔へりて流谷の森に歸へるの時、博士は夫人、令息、愛孫等と食卓を圍みつゝ靜に聞て曰く「お前達は是から世を渡らねばならぬ體だから、第一に心

得て置くべきは自分の交際する者を選ぶべきことだ、善くない者と交際すると遂には其の身を誤る基となるから、十分の邊に注意せねばならぬ、御父様は悪いお友達を持つたばかりに世間から色々なことを言はれて居るが、是は決してお父様が悪いことをしたのではない、善くないお友達と交際したからだ、お前達は假令學校あたりで人から何とはれやうとも此の御父様は決して悪いことをしたのでないと思つて、心強く勉強せねばいかぬ」と、即ち三梗を抜き沸々たる盃を擧げつゝその萬歳を唱ふるもの三度大小の白面雙手幾度か勢き幾度か上下し嬉々として食を終らんとするとき客の來るありて博士は直ちに宅を去れり後に夫人のみは今日に限りての異樣の話に、何となく胸からず覺えしが、此際不圖胸に浮びし

故酒勾農學博士の家庭

は夫人が博士家へ嫁き來しより常に心に排りしピストルなり、夫人はもしやと疑つゝ直ちにピストルを何處にか？……と思ふ間もあらせず、客間に走入の呼ぶ聲頻りなるに急遽之に赴き遂にピストルの事は忘るるともなく忘れて其儘寝に就きたり。

恨みのピストル

今より二十年前夫人治子氏が博士家に嫁せし頃なり、夫人一日一室に銀色たけき一挺のピストルを發見せしより、這は何物ならんと博士に尋ねしに、博士徐ろに顧つて曰く「我が祖先は成是れ義の爲めに憤死せるもの、我れ亦武門に生れたる上は、世は變るとも武士道の意地、何時其の身を捨てざるべからざるに至るやも測るべからず、義は重

く生は輕し卿も余が家に嫁せし上は萬一に處して決して此の心を喪ふべからず」と、果ては笑話に終りしが、爾來ピストルの事夫人の胸に懸りて去らず、故ありて其のピストルは之を人に與へ漸く安堵の思を爲したりしが、博士は更に又新なるを購めて之に彈丸を裝塡したるまゝ捨て置れたり。然るに博士の日糖に於ける地位益々時を得ず、其の家庭の上にも漸く愁雲悲雨の去來するものあるに至りしより、十八年間彈丸塡充の儘藏せしピストル不圖夫人の注意するところとなり此のピストル或は此の家に禍を齎すなきかとさへ疑ふに至りしに恐ひべし事遂に事實となりて現れんとは、恨みのピストル、何時の世よりか博士の家に禍せし?

何の因、何の果?

ピストルの事、既に奇縁なり、奇縁は獨之に止らず、博士の嚴父と祖父とは人も知る仙石騒動に際して君父の爲め一文字に掻き切り天晴の最後を遂げ、當時の一美談として今に其の名を遺しゝが其の自刃せしは時恰かも酉年七月十一日なりき、然るに博士が醜類の罪を其の双肩に擔ふて自殺せるも同じく酉年七月十一日なりき、事や固より偶然の果なるべしと雖も、年と月と日とを同じうして、而かも同じ道に等しく自ら其の身を害せんとは嗚呼果して何の因、何の果ぞ、吾人只言ふところを知らざるなり。

塵外の人

博士の篤學にして學界稀に見るの材たりしは何人もよく之を知れり然れども其の磊落にして塵外の人の風あるは知る人少かるべし。

嘗て夫人を迎へたる當時の事なりき、各種の宴會集會等に着用すべきフロックコートなきに常に友人のを借着して其の席に臨みけるが或る日の如きは他人の上着を着違へて歸へれりといふ其の放縱些事に係らざること大方此の如きものあり、博士又北海道に財務局長たりしとき同僚二三子と共に其の地に赴き夜宿を一亭に取る博士嫣然として宣して曰く、『余の鼾聲雷の如く、到底諸君の堪ふるところにあらざるべし、願くは之を許せ』と…………

夜沈々として風蕭々たり、博士自己の鼾聲に驚きて夢醒むれば鼾聲他にありて其の聲雷の如し、怪しみて耳を澄ませば這は之れ二子の鼾聲なり、博士の醒めたるは自己の夫れの爲めならずして二子の鼾聲に驚かされたるなり、我の鼾聲を大なりとして之を謝せしに今や却て其の對手の爲めに其の夢を破らる夜明けて三子默然たりしとは又以て博士が、豪放、磊落、少事に齷齪せず、宛として風塵の外に在る者の如き體を窺ふべからずや。

寬仁以て下に對す

博士が磊落の半面には又寬仁の德あり、博士が嘗て北海道に財務局長官たりしとき一日一屬僚と共に肥馬を某地に驅る、鞭聲肅々として路を行けば微風逸草を搖がし、輕沙蹄後に上り、兩騎相前後して北海の雪山を眺め行くに、いつか博士の馬遲れて屬僚の馬獨り先に走りしより、屬僚稍馬の足搔

を強めて左顧右眄、少時にしてカッと痰を喀き捨つればアッと後に聲あり、周章後を顧みれば今迄遲れに遲れたりと思惟せし博士は早く既に我が後に來り、今喀ける痰は不幸にも長官たる博士の右腕へかゝりたるなり、屬僚驚倒し色を變へ倉皇馬を下りて拜謝其の罪を謝し痰を拭はんとす、博士莞爾として自ら痰を拭ひつゝ曰く『君念を勞する勿れ、只行路の遲れんことを恐る』と、又敢て他を言はず屬僚益々恐懼爲すところを知らず、只後日の譴責を恐れて徐に後に從へり、然るに用終りて後數日を經るも嘗て其の氣配なく博士の應酬依然として舊の如きものあり、屬僚遂に其の寬量に感じて更に忠勤を勵みたりといふ、あゝ今の官吏、一粒を多く食めば即ち以て下を虐げ、言を壯にし、行を飾はし以て其の威を張らんことに汲々然たること比々皆然るに反し博士の如き寬仁以て下に對するが如きは誠に異數の事といふべし、博士にして、依然官界の人たりしならんには、啻に今日の如き悲しみを見ざりしのみならず、良官上にありて下之に倣ふの美風も生ずべく、農蠶家も亦爲に博士に依るところ多かりしなるべきに、事の茲に至れるもの天なり命なりとはいへ博士人生の慘史を歎ぜずんば止まざらんとす。

閲歷と性行

博士は兵庫縣但馬國出石郡出石町内馬場四番地舊出石藩士酒匂久太郎氏の長男にして、母君を訊と呼び、文久元年辛の酉年十一月二十七日を以て生る、長じて頑健、草間、畦邊を疾驅して犬を逐ひ、棒を振り、宛として悪太郎の風ありしが稍々長ずるに及びて學を好み筆硯を友とし、又思慮深くして屢々人の意表に出づるものありき。

博士又親に仕ふる事厚く嘗て駒場農學校に助教なりし時の事なりき、國元より母堂の病氣危篤と聞き倉皇歸り至れば、老へる母堂は喜ばるゝと思ひの外色を爲して博士を叱して曰く『母病むと雖も未だ全し、男子周章して輕々しく其の任を離るは其の道にあらず、疾くおれ』と、嚴に之を固執す、博士思を後に胎すと雖も母の言逆ふべくもあらず、悄然として歸途に着しが、其中途にして母將に危しとの急報に接し再び歸り至れば死に頻せる母堂博士の來るを痛く歡び其の手を採り其勞を謝し、從容白玉樓中の人となり給ひきといふ、博士が性行の一斑も亦窺ふべからずや。

博士明治六年一月家祿二十石を相續し、十年十二月出て勸農局農學校に入り、三年の間孜々學を修め、農學科甲等を卒へ、十三年更に農藝化學科に入りて十六年卒業し、其の年農商務省御用掛を申付けられ母校勤務を命ぜらる、翌年駒場農學校助教となり、十九年農商務局を兼ね、二十年學術研究の爲め歐洲へ差遣せられ、二十三年農科大學助教授に任ぜられ、從七位に叙せらる、二十四年一月歸朝同年農商務技師兼農科大學教授を拜し正七位に陞叙せらる、翌年北海道廳財務長となり、三十年同廳殖民事務長に轉じ、正六位を經て從五位に進み、翌年農商務書記官となりて同省技師を兼ね、翌年再び歐米へ差遣せられ、同年農學博士の學位を受けたり。三十四年生絲檢査所長兼技師に轉じ翌年技師を免ぜられ、三十六年農務局長に進み、三十八年清國に差遣せられ、三十九年本官

を罷め、大日本製糖株式會社長に就任す。此の時特旨を以て位一級を進められ從四位に叙せられたり、之より民間に下り專ら日糖會社の爲めに盡瘁するところあり、然れども禍根既に大にして博士の之に入りしは實に死地に入るの第一歩なりしなり、博士右の外博覽會其他に審査員、調査員たりしこと幾回なるを知らず、其の功績に沒すべからざるものあり、故に二十九年には恩賜金百圓を、三十九年には同二千圓を、三十五年には勳五等瑞寶章を、三十六年には銀杯一組及同一個を、三十九年には勳三等旭日中綬章を同年亦韓國皇帝陛下より勳二等大極章を、三十年には大日本農會々頭伏見宮殿下より紅白綬有功章を、四十二年には本會總裁宮殿下より二等有功章を賜はれり、四十有九年の生涯は遂に此の如き歷史を纏めて其の頁を閉ぢたり、博士の人と爲り溫厚にして篤實、友に厚く、下に親しみ、人に接して壁を設けず、寛仁大量些瑾を省みず、知ると知らざると皆其の德に服せり、而かも農政の事に至りては一世の學者として衆目の迎ふるところとなり、彼の「米作論」「土地整理論」等は最も有名の著書にして學者間に尊重せらる、本會の如き博士に負ふところ頗る多く、畫策經營常に多大の熱心を以て副會頭の職に盡瘁せられたるは吾人の感謝に堪へざる處にして同時に蠶界の謝せざるべからざるところなりとす、博士夫人治子氏は鹿兒島縣士族井上貞敎氏の二女にして明治二十年博士家に嫁してより貞淑の聲高く長男常豐氏を始め四男二女を擧げられ、長女保子氏は工學士岡野忠敏氏の夫人となり、親子之より大に榮えんとして遂に此悲劇を見たるは洵に痛嘆の至りに堪へざるなり。

武士道の典型

坊間酒匂博士の死を以て武士道の權化なりと論ずるものあり、之れ余が意を得たるものなり、武士道たるや廉直以て己を持し、其の責を明かにし名を重んじ苟くも事に當つて一の私事曲倫なきを以て其の精神とす、從て未練、卑屈、不斷は其の斷じて許さざるところなり、故に古來紛紜身に不覺あつて辯ずるに由なければ即ち一刀以て其の命を斷ち責を明にし自家の名譽と地位とを全うしたり不明を不明とし、不覺を不覺とするも恬然顧みるなくんば路傍の犬と何ぞ擇ばん、不明を明にし不覺を償ひて始めて人たるの面目を維持す、而して特に大和民族の體面を維持するなり、然れども不明を明にし不覺を償ふは時に或は事後の恨あり、至難の際あり、故に之に代ふるに至高最極の犧牲を以てす、此の犧牲は則ち其の生命なり、肉體なり、此の生命を空しうし其の肉體を滅して犧牲は其の眞價を發す然れども其犧牲は之れ最後の手段のみ、不明を明にし不覺を償ふに足るものあらば必ずしも此の如き至高の犧牲を要せず、人或は自刄、屠腹を以て武士道と爲せども之れ誤れり、自刄屠腹は斷じて武士道の要件にあらざるなり、己の恥を知て不明と不覺とを償ふことの動機夫れ自身が即ち武士道たるなり、酒匂博士の死は直ちに之を武士道なりとは云ひ難し、然れども其の動機に至りて明に之れ尊重すべき武士道の發露なり、而して會々望月小太郎氏によりて介せられたり英國紳士の處決は博士の動機を一層切實にせるものなり、凡そ生を好み死を忌むは人の常なり、而して古來然りと命を鴻毛より輕んじたる武家時代にありても然りしなり、況

や明治の聖世に在る者おや、博士の如き死せずして其不明を明にし責を全うし得らるべき、手段あらば何ぞ自ら好んで自殺の愚を學ぶべき、勿論法廷に於ける裁判の如き世上に於ける批評の如き共に博士の問ふ處にあらず、自己の不明より端なくも日糖てふ一大會社に破綻を生じ其影響帝國財界に及び更に其の餘波延て海外に及べるの不始末は如何に三省四慮するも救ふに法なく施すに術なきを以て茲に始めて死を決せるなり、博士の心事亦察すべからずや。

實業界の大家某氏の曰く酒匂博士の死は之れ武士道にあらず、難局に處して忍耐其の終を全うするを以て武士道とす、而して之れ商業的武士道なりと、何の囈語ぞ、忍耐其の終りを全うする算ありて死せば則ち身を空しうして世を損ふの罪を免れうべきも過去を不明とし將來を不明として處決したる上は何ぞ悠々一日の命を貪るべき、生きて恥多からんよりは死して名を殘さんこと之れ武士道の魂なり、今や人情輕薄に流れ、風敎紊れ祿を食み下を虐げて徒自己の利を大ならしめんとし、僞善を掲げ大過を祕するの徒多き時に方りて博士に此の事あり、今の風敎、人道に一大覺醒を與へたる點に於ても亦博士の處決は實に偉大なるものなり、吾人が博士の最後を以て武士道の典型となすもの其の所以實に茲に存す、博士が自刄の動機は其の處決によりて明なり、吾人は博士の自刄其のものを以て武士道の發露なり、典型なりといふにあらず否寧ろ自刄は一種の蠻風なり、然れども其の動機たるや、自己の非を擧げて其の責に斃るゝもの眞に日本男子にあらざれば能はざるところなり、中將某齡耳順に達し、身を軍籍に置き乍ら偏言を二三にして罪の輕からんことを希ひ、恥多き生を貪れりと、夫れと之とを比較し來る心事の差果して幾何ぞや、西洋流の道德通中將の爲すところを以て是なりとすべきも、上下二千載大和民族の血ある男子は此の如き女々しきことを許さゞるを如何せん。あゝ奸人の爲に陷られて罪を其の不明に歸し、短銃一發硝煙裡に其の名譽と地位と最愛の妻子とを擲ちて其の身を空しうす、男らしき最後、武士道の典型豈に亦多く吾人の言を用ふるを要せんや(完)

(永前)

精力主義の成功者 若尾逸平翁

重富夕星子

若尾は相場師?……株屋?

翁が一代に巨萬の富を贏ち得たるは誰れも知る處であるが、どうして儲けた? とは人も否も聞かんとする處であるが上來說き來つた如く、叉自ら語る如く、謂所相場で儲けたのではない、僅か二三年の間に百萬圓以上を贏ち得、千八百俵も入る樣な分限者になつても相場には手を出さなかつた、否或る方面から見れば相場に手を出したとも見らるゝが、相場師とはならなかつた、相場師とはならなかつたがチト違ふ相場師となつた、否大に違ふ相場師となり、株屋ともなつた。

其鈍い樣な鋭い眼で、明治政府を信じ天朝の御威德を睨んで、人の厭がる紙幣を惜し氣もなく銀貨と換へて百餘萬兩を利し得た以來、思ふ樣に金も動いたが時の來る迄は動かさない、金が惜しい爲に積んで眺めたい許りに動かさぬではない

動かしたい上は利を見ねばならぬとの考へは、炎ゆるが如き野心を常に吹き消されて烟さへも見せぬ、烟だも見せぬ此の炎が時機到来の響きに接すれば一面の猛火となつて宙を焼び他の人達でも釣り込まずんは止まぬ慨がある。

時ならぬ利を得た翁は、麻来馬車鐵、正金日本其他に向て世人の顧りみぬものに投資した。投資したのではない下落に買ふたのだ、新橋上野間を馬線とせる馬車鐵が一時株主として海息吐息と云ふ迄下落したとか、ソンなに不景氣になつてたまるものか、必ず反動あるべしと大手を擬げて買ひ込んだ、一人自分のみではない、今東京電燈会社長をして居る佐竹氏迄も勧めて其株を買はしめた、其當時若尾は株で損したとの流説紛々たりしもののありしかど、忽ちに回復亦回復で倍額以上となつた、更に其株を持つてヨリ多くの利益を得ると勉めた、蓋か大に相場師と遊ぶ處である。

明治三十年頃の東京電燈会社の二本榎発電所

世の相場師とは其趣きを異にするが、世は急速に轉換して馬車は電車となり、昨日の馬糞、嘗て丈なりし、東京の電灯明滅し、三角形の馬も跳め日は赤、緑如の眼に青紫色の電灯明滅し、東京に引き換へ今られなくなつて使利代りには、乗換に目を廻さねばならぬことになつたが、一時外国資本の街鐵及び電氣鐵道だと、素人は其名を聞くも赤馬を電氣に乗り換へて、跡から時株を持つて居つたが今は持たぬ。

ナニ私しだつても重役だとか何とかいふて居れば、一年に三千兩や四千兩は貰ふ者サア、だが、併し年田日だなんて偉らい人が居つて電車を合併し、賃銀を均一にすると云ふことで私しも会議に行きました、行きましたが併し自分の考へるには合併したら不利益で、迚ても均一ではやりきれるものヂャーネーと、主張して見たが私しら等の様な無學文盲の者の云ふことは聞いて呉れぬ、是は困つたものだと思つたが乗れる者に無勢で仕方がない合併と極れば利益があるものかと思つたから、五萬七八千株も有つたが、夫を皆んな賣り放しで、電燈株を六萬株許り買ひました處が、私しが賣り放す以前に電燈株は日に〳〵下落する許りだのに、電燈株は日に〳〵上る許り、僅か三日

許りの間に一株三十圓宛儲かつたから都合百八十萬圓許り儲けた勘定で、四十年前に三日掛りで八貫の荷を負つて歩く一貫四百文だけ儲けなかつたのも此の遇平で、三日に百八十萬圓儲けたのも此の遇平であるが、物は何んでも思ひ切りが大事である、其頃に比べると世の中は進歩したものだ。

之を見て翁の機を見るに敏となす勿れ、徒らに一攫千金を夢むべし、而も此の間に處し多数は以て利となし、天下を挙げて合併を得策とする渦中に座し、一人ネジけて横に這ひ蟹的行動を為して以て進の斷誤りなきを得たるもの、机上の經濟學やミルの算盤珠の好くする處に非ず、是全く堅忍持久、鍛鉄の精神と、敢て勝ち得たる質朴の花の光明に照らされ、餘澤を致す處、先見の明ありと云へば夫れまでなれど、先見の明あると云へば、夫れ之をも先見の明也と云はゞ、何ぞ、八貫目の荷に三日背中の皮を剝き利するに儲かる一貫四百の愚をゑさんや。

以上翁の今日を致せし梗概を摘さんだのであるか、翁は利己的以外如何に熱精を盡したるかを窺はう。

蠶絲業上に表はれたる翁

一度蠶種貿易の有利で面かも國家將来の經濟に對する消長を憂つた翁は、茲に本業蠶絲業に熱血を集注して他を省みなかつたが、敢て利己的の製絲事業のみでない、飛躍あれば遊場して桑を植えしめた、由來翁の出生地たる中巨摩郡在家塚邊は畑に富んで居る地方で、現今では烟草の栽培も處によりては、桑の植付の為の安くつて水邦繭の將来競爭に勝ち得ざることを說き、桑蚕養蠶の之に數倍する利益を指示して遊說に熱心した、蓋し此地方養蠶業の開祖と云ふもよい。

會々蠶種業者の出る事起るに及んで民部省は、條例に依つて取締つたが、其時に翁は世話役を風説の二人で、其時に居つた處、が越後屋庄兵衛が千五百枚許り可を受けて製種し、之を他に賣却したが其引渡時機に不景氣で、引渡しが出來なくて翁の處へ、ワザ〳〵來て頼んだ、此當時は政府の許可ある送狀が付かねば送り出すことは出來ない時代であつたから翁は氣の毒に思つて、送り狀を書て賣ひに縣廳へテク〳〵出かけて行つて其義に及んだ、處が、官廳として二枚の送り狀は書けぬとテンデハネ付けられた、書けねとの御言葉なれども書て頂かなければ人民が難渋する譯だから書て頂きたい、ダメだからなら大藏省へ願出せ、イヤソレでは時機を失する譯だから是非願ひたい、ナニ政府へ向て不都合な事を申す奴だ生意氣なエライ目玉を頂戴したグット癪に障つた翁左らば縣令に(土肥健蔵氏)願するからとドーアを排して出やうとすると

チヨツト〳〵!!!

何か御用と振返れば、濟まねが一寸此札を銀貨に取換へて來て呉との頼み、イヤ私しは急用で縣令に遇はねばならぬッ

ンナ次第では御應らぬと振りモギッタが、仲裁するものがあつたから之には何か仔細があるべしと取り換えに行き歸り來れば、先程の送り狀は今回に限り貰てやるとの案外な話しに翁も腹の中で嘲笑つたが

思ひ込み言ひ込んだ事は、何處迄も通さねばならぬと云ふ強情を見込んだ相川縣廳、其翌年には翁を拉して蠶種の大總代とした翁、

其當時を語り出てゝ曰く、字も讀めず何も出來ぬ私しを大總代にしたのは全く此の事があつたからだと思ふ。

君と(同行せられた入田達也翁)知合になつたのは僅か大總代の時からであつたが君は夫れ以來身代なすつて日本の達也となつて世の中の爲に働いて呉れたゞが若し君が身上を其儘今に持つて居る樣のことでは石和の達也に過ぎなかつたと思ふ、君の功績は身上以上だが其頃は若いと思つたが

モーヅーナルカネー 下略

扨なれと云ふから大總代になつて千五百萬枚の許可を受けた、其頃の蠶種製造家はスボラのもので、大凡の見當で製造するのだから千枚も百枚も製造して讓り合せたものだから其年蠶種が多過ぎて(明治五年)自分で許可を受けたものでも、千枚が千枚製造は出來ぬ、又其頃の蠶種は他府縣より十日か十一日早く發蛾したもので、其頃規則今で云ふならば施行細則とも云ふべきものが出來ぬに發蛾すると云ふ始末で、大騷動が持ち上つたから東京へ行つて、大藏省へ迫て見た處が規則がまだ出來ぬ、出來ぬでは困りますがと云へば『今やる』今やるでは困ります發蛾しますが『やかましい』と怒鳴り付けられた、其頃今の澁澤さんなども親方の方で苦勞したものだが、夫れても困る〳〵の一矢張りて、漸く山梨縣は規則なして製造することを允許されて歸て來た。

豈計らんや罰金五百圓

製造を允許されて歸つたはよいが其年の秋になると、願つたものはよいが、名前を讓つたもの丶種は輸出することはならぬとの御觸れ、サア困つたものだ輸出がならぬとなれば一文にもならぬ次第だが、自分は既に送り狀を添へて出して仕舞つたが、其罰で五百圓の御灸を据えられた、御灸は好いが一文にもならぬでは困ると云ふので、大藏省へ恐る恐る罷り出て一度製造を許して置て輸出が出來ぬと云ふは誠に困る話しでありますがと云へば、何に政令に背く奴だ、イヤ決して政令に背だ譯では御座らぬ許可があつて送り出した譯であるから是非御許るしをと、理窟では行かぬと思つたから只管困る〳〵の一矢張で嘆願に及んで動かなかつた、漸く聞屆けられて大總代の事ではあるしと云ふので百四十五圓旅費やら日當やら頂戴て歸つたが、其時分は役人が意張つて箸にも棒もかゝらんかつた。

嗚呼何ぞ其の熱誠なる、養の若尾機械の發明と云ひ之と云ひ事に當り其善美を盡し寢食を忘れて倦まざる翁の如き、眞に活動の爲に生くる人に非ずして何ぞ去る明治三十九年第一回本會總會に於て翁に金賞牌を送りしもの敢て過賞ならむや。

更に其他方面を見よ

翁の撰ばれて貴族院議員となるや、中央線敷設の計畫あり翁之に熱狂し東奔西走殆んど寢食を忘れ朝に星を戴き夕に月を踏で歸る事珍らしからず、而も政界の風雲醒くして、解散の議傳はるや、倉皇目白に飛び大磯に走せ早稻田に飛ぶや會々前島密氏に逢ふ、談茲に及ぶに至つて口角沫を飛ばし辯論四隣に徹するも些の介意する處だになし 而も言論句々山だしの統計のみ蠶の駄賃が何々、肥料の駄賃が何々と擧げ來り、決して他に及ぶものなく、民人の痛苦、塗炭の苦みを訴ふるのみ、而も洒々然として遞信通の前島氏に當る、恰も審判官を缺ける擊劍の試合に似たらんか、シタゝか御面を喰れども外れたの一斥、御小手をタップリしてやられたれども脊なりけりで、鋭鋒肺腑を挟るものあれども理窟はそうかも知らぬが 交通の不便、貨物の停滯、產業の不振、農民の苦痛は、理窟でも不理窟でも困るものは困る也、困るものを困るとするは翁の六斷三略也、此の六斷三略には前島氏も解說に苦しみ、時の利非ざるを以てするも、時の利非ざるは翁の最も困ると主張する處しにて、天下形勢政界の風雲を解けども山梨も日本の一部なり何を以てか繼子とすらんと、說伏の方法も茲に至つて愈に出でざりしならん、其方法のない處が翁の意氣を強くする處にして、袂を捕へては困るとかこち、袖にすがりては困ると訴ふ所以也。

一方理に於て論ぜば他方は困るの一言のみ、時の利非ざるを示せば猶困るの一語磐石の如し。

此の相撲を見せられては早稻田伯と雖も吹き樣もなく、團扇の擧げ樣もなく、果ては僅かに仲裁して冷汗を拭ひたりしとはさもありなん。

勿驚僅に七人……の差

斯の如くにして六韜三略を振り廻し、椿山莊も訪へば滄浪閣にも伺候して其開通を嘆願し、爾來顏を見ても困る、遇ふても困るの一天張、殆んど挨拶の代りとする位に熱狂したが時や利あらず再三解散に逢ひたりしと雖も、終に僅か七人の差を以て衆議院の通過を見るに至つた。

此時だ悔しくて悔やしくてならなかつたのは、何故と云ふたつて、愈々明日はこの問題が衆議院へ出ると云ふことになつたので、嬉しいやら心細いやらで歸たつて眠られるものじやないサ、尤も前々から飛び歩いて大體の樣子は判つて居つたが、愈々七人の差で通過すると云ふ見込まで附いたが、若し其場合になつてドーなるかも知れぬ、下手をして贊成者の方に休む人でも出られ樣ものなら折角茲迄掉ぎ付けて殘念だつたと云ふ樣の事なら、腑甲斐ない話しだと思つたから、鳥の鳴く頃から飛び歩るき初めて、無理やり起して宜しく賴むと說き廻つて、夜の白々明けだつた白縣の代議士(名は御預します)の處へ行つたが、遊びに行つて歸らぬと云ふ、一人の處へ行つたら頭が痛いから堪忍して呉れろと云ふから、笑談云つチャイケヌ君は、夕べコレコレで八八をやつて居つたではないか、夜中ソンナコトをやつて居ながら縣下の大問題の爲に頭が痛いなんてふらち千萬の事が云つて居られるものか、行かねば困るぞと云つたが是非堪忍して呉れと云つて來ず、彼是して七時頃にな

って又一人の處に行つて見ればドコへ行つたか行衛不明で探し樣もない、時間は來るし困つたと思つたが手後れとなつては又不味と思つたから、開會前に飛び歸つてアレコレ心配したつたが其甲斐があつて、遂々自縣選出のものは何の役にも立たなかつたが夫れでも七人の差で通過した時は嬉しくつて嬉しくつてたまらなかつた」

啻に夫れのみならず、中央東線既に甲府に開通せんとするや、甲府監獄其醜態を停車場前に現ずるを憂ひ、之が移轉の必要を感じ、民人の爲に當局有司を說くこと再三、漸く議會に提出せらるゝ運び迄掉き付けたが不幸空しく二三期を過ぐ翁の無念や其絕頂に達すと雖も亦奈何とも成し難し、翁窃かに其六韜三略を繙き木幾を薄ふして狂奔すること更に數倍其間星霜の久しきを疊したりしと雖も議會の通過を見て好く其今日あるを致せるもの、異に翁の熱狂に負ふ處なりと云ふも敢て不當に非ざるべし、嗚呼翁の如く一點に其勢力を集注して倦まず而も事の剛度を增すに從て、更に數段の勢力を增し、之が徹底を見ざれば未だ曾て之を放擲したることなき深き執着と撓まざる熱誠とに至りては吾人の得て端睨すべからざる數に屬すゝ雖も、蓋し翁と雖も其行路を迴りて昨今を反省すれば。

光明を見て走りたる？

熱血其光明を自ら磨き出したる？に就き疑ひなき能はざるべし、之を疑ふと同時に、其萬隙を排したるに驚き且つ其際限に好く打ち勝ちたる精力の偉大なるに驚くこと更に大なるべし此の境界に身を置きて過去を追懐すれば光明の見えたるに偉駄天の如く走りたる處もあるべく、切瑳琢磨自ら其光明を打ち出したるが如き處もあらむ、茲に至れば殆んど常人の企及し能はざる未知數の問題にして得て忖度し能はざる範圍に屬す、其觀察の方面に依つては人各々其說を異にすべしと雖と何れより見るも偉大なりと云ふに至つては少くとも其聲相一致すべし、偉なるかな翁……夫れにしても。

更に偉大なるは女性也

翁の過去及現在を通じて邁往直進、奮鬪亦奮鬪、常に〳〵凱歌を奏しては更に、一歩は一歩より大に進む其根底を爲す精力は翁の天稟に出づるか將亦後天的に世の荒波より受けたるかと云はゞ吾人は其後者に在りと云ふに躊躇せず、事に當り根氣のよかりしことは、其成功に對する要素たるに相違なしと雖も、然りながら或る地點迄は到達しねばならぬとの其「○ならぬ○」と云ふ孤憤が根氣をも好く爲しめたる處にして晩近に於る勝利は其餘波のみ、如何に根氣が好いからとて根氣の好いと云ふこと丈けでは、ならぬ○ならぬと云ふ孤憤は起らぬ。

抑も此の或る地點迄到達せねばならぬ●●●と云ふ孤憤を起さしめしものは何か、云ふ迄もなく、【今となれば姦通して吳れた妻を拜む】との翁の此の語が充分其消息を語つて居るではないか、翁と雖も姦通したのを拜むのではない、姦通したと云ふ動機が翁渾身の血を反撥して七日七夜の間に翁の今日を作成したのを感謝するのだ、即ち云ひ換へれば渾身の血に、打ち勝たねばならぬ、打ち勝つて後に婦德の大切なることを反省せしめねばならぬ（本木に勝る上木なしとの自覺を與へねばならぬ）と云ふ分子丈けが止まつて女性に對する愛の分子が消失したのである、消失しない迄も其大多數は同化せられて其力は輕微のものとなつた爲に今日を致したと云はねばならぬが、其七日七夜の血球の變化に對する翁の苦痛は思ひやらるゝではないか、時に白刃も露を結び鞘を拂つて殘恨にむせびもしつらむ、されど自らを闡明して心機を一轉せるさへ既に凡人に超ゆる人格を有す、加之爾來悪戰苦鬪好く自己が力量のあらん限りを振はんとの猛烈なる誠意を持して今に至る之を捨てず、而も獨立不羈、社界公共の爲に鞠躬盡瘁し惡に報ゆるに善を以てする雅量を有し、其間據るべき蔓、賴むべき礎なきに巨萬の富を重ぬ、翁の如き眞に

時代の寵兒？いな〳〵

然らず、女性の反撥に逢ひ自己力量の有らん限りを盡さんとせる誠意の花にして天の命ぜる所に忠實に從ひし結果也換言すれば精力主義を實行したるに在て存す、茲に到らば女性の反撥は其力を甚だ失ふと雖も、斯る反撥ありて初めて好く（初志を操守し得らるべく若し反撥なかつせば中途其操守は徐々に緩みて遂に破壞せらるゝに至らむ、翁と其軌道を均ふするもの世に多しと雖も翁の右に出づるもののなきは蓋し其操守を消失したるに據るや多かるべし（敢て軌道を同ふすればとて必ず結果を同ふするとは云はず）既に反撥鍘㥀の有るあつて然り、况んや尋常の孤憤操守に於て乎、女性亦時に取りて捨て難しと雖も翁に取ては眞に捨て難かるべし、翁齡正に九十、今尙矍鑠として行くに杖を用ゐず、腰に梓の弓も見ず居常文筆を友とし閑日月を悠々送ると雖も、重要事は親ら之を裁決出馬し、決して代人をして處理せしめたることなく何處迄も其赤誠を披瀝し仆れて止むの勇氣を持す、吾人は此掬すべく愛すべき精力主義の翁の自重して其天壽を愈々永く保たれんことを祈る。（完）

曲折波瀾に富む翁の傳記は詩人を待つて始めて描寫すべく、本人特に眠ひ、石女も立つて舞ふべしと雖も余詩人に非ず無味平々に永く紙面を汚ぜしを讀者に謝し併せて懇な翁に乞ふ

最新 蠶種論 全　三田伊三郞著

曰く外山博士の蠶種論曰く久保田氏の日本風穴蠶種論曰く三田氏の最新蠶種論何ぞ夫れ蠶種論の世に出づることの多きやとは曾て某氏の編者に語れる處であるが是れ從來蠶種と同一視せられた蠶種が漸く重要視せらるゝに至つた一證となすに足ることとて吾人は此種の著書の續々公刊せられんことを希ふ者である、本書第一編に總論第二編に蠶種至極論第三編に蠶種製造通論第四編に秋蠶種製造特論を說き、二百八十六頁の全文中當業者の參考に資すべきもの尠くない。（定價壹圓參拾錢發行所京都市二條通烏丸西入有本書籍部）

史料

千九百六年度世界重要產絲額統計（其の十二）

（永　前）

波斯政府は一時同國の入口「エンゼリー」に於て蠶種の檢査を行ひ且つ之れに輸入税を課せんことを企てたが輸入商人の激烈なる反對と在「テヘラン」土耳古公使の熱心なる反對とに遭ふて終に此の計畫を拋棄した。

好天氣の引き續きと桑葉の豐饒とに依り蠶兒の發育は良好であつて前年度に比較すると約十二日間速に成熟した此の有樣を見て皆々喜色面に顯はれ收穫の過多を豫想したが生憎上簇間際に成つて突然激げしき炎暑の來襲を受け續て大雨降りたる爲多數の蠶兒を殺すの不幸せに出遇ふた。

繭の買入は六月十五日頃に始り七月十日頃に終つたが繭の質は千九百四年と千九百五年とに比較すれば良好であつたが豫期した程に良好とは行かなかつた、飼育最終期に於ける降雨の爲めに軟化病を起し、繭は之れが爲めに汚穢された。

波斯の製絲場は、外國の買手と激げしき競爭を試み、地方に寄つては繭の全部を買占て之を製絲した、之れが爲め相場は非常に昂騰し、外國商人は三四「クラン」（一「クラン」は約我が二十錢）位高くとも競て買入れた。

極東支那

上海の輸出　千九百六年六月一日から千九百七年五月三十一日に至る一年間の上海の輸出は七萬四千四百二十三梱（作蠶絲を含む）に上つた、前年度の夫れは六萬九千六百十三梱であつた、之を輸出先別にすると。

輸出先	一九〇五年一九〇六年度	一九〇六年一九〇七年度
佛蘭西	一八、九一四梱	二一、九四一梱
英吉利	七五一	六九四
伊太利及瑞西	一〇、五〇〇	八、五九四
亞米利加（新約克及桑港）	一〇、一九三	一三、七一一
印度（孟買及新嘉坡）	三、九三五	
埃及（スエス、アレキサンドル、ポートサイド）	一、五三七	六、八六八
ジー（トリポリ、マールータ）	五五四	
支那海岸（香港其他）	一、八三七	
日本（一）	一、八三七	一、六〇七
輸出合計　白及黃生絲	四八、二二一	五三、四一五
作蠶絲	二一、三九二	二一、〇〇八
	六九、六一三	七四、四二三

（一）一九〇五年―一九〇六年度の日本への輸出は作蠶絲のみで其高一千百五十九梱である。

五月三十一日現在在荷高

	一九〇六年	一九〇七年
白生絲	一、五〇〇梱	—梱
黃生絲	一〇〇	一〇〇
小計	一、六〇〇	一〇〇
作蠶絲	一、一〇〇	五〇〇
合計	二、七〇〇	六〇〇

製絲用として上海から歐羅巴に輸出した繭は一九〇六年―千九〇七年度は皆無であつた。

前諸年度の輸出高を左に紹介しやう。

輸出先	一九〇二年一九〇三年度	一九〇三年一九〇四年度	一九〇四年一九〇五年度	一九〇五年一九〇六年度
佛蘭西	一九、九四六梱	二一、三九六梱	二〇、四二五梱	一八、九一四梱
英吉利	一、〇三七	一、三〇八	一、六四五	七五一
伊太利及瑞西	六、七〇〇	七、九七七	一一、七三〇	一〇、五〇〇
亞米利加	一二、三七五	一一、五七三	一一、七六〇	一〇、一九三
諸港	六、六五九	一〇、二四六	八、六七五	七、八六三
白及黃生絲	四六、七一七	五二、五〇〇	五四、二三五	四八、二二一
作蠶絲	一二、六七四	二一、四八〇	一九、八五〇	二一、三九二
合計	五九、三九一	七三、九八〇	七四、〇八五	六九、六一三
キログラム	三、六〇〇、〇〇〇	四、二四四、〇〇〇	四、二二五、〇〇〇	四、〇一〇、〇〇〇

廣東の輸出　千九百〇六年六月一日より千九百〇七年五月卅一日に至る一ケ年間に廣東から輸出した生絲は左通である。

輸出先	
佛蘭西	二八、二二六梱
伊太利及瑞西	二、三六九
英吉利	六六九
歐羅巴への合計	三一、二六四
亞米利加	八、八六七
輸出合計	四〇、一三一
孟買及印度	五八五ピクル

五月三十一日現在在荷高

一九〇六年	一九〇七年
四〇〇梱	五〇〇梱

梱の正味の重量は四十八基て「ピクール」は六十基四三〇であるから一九〇六年―一九〇七年度の輸出生絲は百九十六萬二千基である、之を前諸年度に比すると左表の通である。

輸出先	一九〇二年一九〇三年度	一九〇三年一九〇四年度	一九〇四年一九〇五年度	一九〇五年一九〇六年度
佛蘭西	二八、九一八梱	二四、八三三梱	二六、七一〇梱	二五、一三三梱
伊太利及瑞西	四、六一四	五、三五〇	四、二六七	四、三七七
英吉利	九五五	一、七〇七	一、二七一	一、二三四
亞米利加	一〇、三九一	一一、五四七	九、九八五	八、六九八
合計	四四、八七八	四三、四三七	四二、二三三	三九、四四二
孟買及印度	一、〇六九ピクル	一、〇三六ピクル	一、七七七ピクル	一、五九七ピクル
キログラム數	二、二一九、〇〇〇	二、一四七、〇〇〇	二、一三四、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇

東印度

「カルカツタ」の輸出　千九百〇六年一月一日から十二月三十一日までに至る一ケ年間「ベンガール」より輸出した生絲は左の通である。

	英吉利	佛蘭西	伊太利	合計
一月	九五梱	一一五梱	—梱	二一〇梱
二月	一三六	一七九	—	三一五
三月	九八	一二二	五	二二五
四月	一三五	二一八	—	三五三
五月	一二四	一九九	四	三二七
六月	九三	二四三	—	三三六
七月	五一	一四五	—	一九六

八月	八〇	二二二	—	三〇二
九月	八五	二二四	二〇	三二九
十月	—			
十一月	一五二	一八七	—	三三九
十二月	七六	四八	—	一二四
合計	一、一二五	一、九〇二	二九	三、〇五六

孟買の輸出　孟買の輸出は英佛へ輸出した「カシミール」の生絲を合せて約八百五十梱其正味の重量五萬五千基である。千九百六年千九百七年の印度全體の輸出を表示すると

カルカツタの輸出	三、四四七梱	二七〇、〇〇〇斤
孟買の輸出	八五〇	五五、〇〇〇
合計	四、二九七	三二五、〇〇〇

である、最近五年間の夫れは左の通である。

年次		
一九〇一	三、六二五梱	二八〇、〇〇〇斤
一九〇二	三、八六四	二九五、〇〇〇
一九〇三	三、一四八	二四五、〇〇〇
一九〇四	二、二六五	一八〇、〇〇〇
一九〇五	三、六一四	二八〇、〇〇〇
平均	三、三〇三	二五六、〇〇〇

（未完）

廣東の蠶況

廣東瀬川領事より外務省への報告に依れば第五回作蠶繭は引續きたる惡氣の爲に發育不良のところ目下二三割方の被害を蒙れるも若し今後尙天候に變化なきに於ては其損害は一層甚だしき模樣あり

蠶絲業と冷氣

「モーベリエー」蠶業講習所長　エフ、ラムペール

「冷氣」は蠶絲業に於て種々なる用途を有するのである、第一冷氣は蠶種の保存に之を使用し、第二冷氣は蠶繭の保存及殺蛹に之を使用するのである。

蠶種の保護に使用する冷氣

「冷氣」は蠶種との關係上種々重要なる用途を有する、即ち冷氣は蠶卵胚子の發育上極めて必要であるが、其の他第一春蠶種の保存及蠶種の運搬中に必要にして、第二同一の年內に種々なる春蠶の引續きたる數度の飼育上に必要である。

第一　蠶種を孵化せしむる爲めの冷氣の必要　產卵後受精したる卵內の胚子は「バンドレット」Bandelette（紐狀）の狀態となる春蠶種の卵內に於ては胚子は蠶卵が冷氣を受けざる間、及冷氣が其作用を行ふ間此の「バンドレット」の狀態に於て止まるものである、「越冬」とは冷氣が其の作用を蠶種に及ぼす期間を云ふのである、次に掃立中溫度の作用に依り胚子は此の時迄引續きたる「バンドレット」の狀態より變じて、幼蟲の狀態となりて以て孵化するものである、蠶卵が掃立の前或る時の間冷氣の作用を受けざるときは決して孵化せざるものとする、故に冷氣は蠶種を孵化せしむるに必要缺くべからざるものである、之れ冷氣の蠶種に對する第一の用途である。

第二　冬期の後に於て蠶種を保存するに必要なる冷氣　天然の狀態に在ては夏期產卵したる卵は冬期間其の作用を受け、翌年春期に至て孵化するから、蠶種の生活上四期に之を區別することが出來る、第一產卵より冬の初めの寒氣迄に至る先冬期、第二冬期に相當し且此の期間冷氣の作用が蠶種に及ぼす冬期、此の期は約三ケ月間繼續する、第三、最後の冷氣より桑樹が春其の第一の桑葉を發芽して掃立時期に至る迄の後冬期、第四、胚子が「バンドレット」の狀態より幼蟲の狀態に移り、蠶兒の孵化に終る孵化期之れである。

期間が一定せざる先冬期間に於ては蠶卵は冷氣の作用を受けざるが故に氣溫の昇騰作用の下に孵化することが出來ない、此の期間蠶卵は活潑に呼吸して溫度と空氣との必要を感ずる冬期間に於ては蠶卵は徐行生活の狀態に在りて冷氣の爲めに痲痺し、呼吸容易にして、多く空氣の必要を感ぜない、但し此の期間は濕度の過度に特に注意を加ふることが肝要である。

冬期後即ち後冬期間に於ては蠶卵は活潑に呼吸し得て、攝氏十二度の溫度の下に孵化することが出來る、攝氏十二度の溫度は恰も桑樹が成長を始むる溫度と同一なることを特に注意するを要する、此の期間に於ては時期より早き溫度と冷氣の復歸とに付、蠶卵を保護することが大切である、何となれば溫度の作用に依りて胚子は「バンドレット」狀態より幼蟲の狀態に移るが故である、而して若し此の際に當りて氣溫降下するときは胚子の變移作用忽ち止まりて、次に來るべき溫度の昇騰を待たなければならぬ、此の溫度の激變は蠶兒の爲に極めて有害であるから後冬期間は佛國南部に於けるが如く氣候の變化激しき國に對しては、蠶種を、健全の狀態に保存する上に於て極めて困難である、故に實際に於ては人工的に冬期の期間を延長して、後冬期を全廢若くは短縮することに努むるのである、蠶卵が冷氣の作用を受けつゝある間は胚子は「バンドレット」の狀態に止まり、從て其の存在に有害なる外部の作用に感ぜず、容易に「バンドレット」狀態より幼蟲の狀態に變移することが出來る。（以下次號）

蠶種と風穴貯藏

農商務省の調査に依れば風穴に蠶種の貯藏を爲すもの年々増加し本年の貯藏數は實に百七十萬以上にて前年の三十二萬に比し五倍以上の由尚ほ府縣別に依り區別せば左の如くである

府縣	枚數
岐阜	[illegible]
東京	[illegible]
富山	[illegible]
兵庫	[illegible]
群馬	[illegible]
栃木	[illegible]
千葉	[illegible]
福島	[illegible]
廣島	[illegible]
山形	[illegible]
石川	[illegible]
和歌山	[illegible]
滋賀	[illegible]
愛知	[illegible]
島根	[illegible]
埼玉	[illegible]
新潟	[illegible]
靜岡	[illegible]
福井	[illegible]
山口	[illegible]
岡山	[illegible]
高知	[illegible]
奈良	[illegible]
長野	[illegible]
茨城	[illegible]
神奈川	[illegible]
京都	[illegible]
愛媛	[illegible]
三重	[illegible]
福岡	[illegible]
鳥取	[illegible]
德島	[illegible]
大分	[illegible]
大阪	[illegible]
山梨	[illegible]

實務

桑園年中行事

愛媛縣農事試驗場 池田榮太郎
馬場由

九月 白露 秋分 陰暦八月節

朝夕漸く涼風を覺ゆるに至り、秋分即ち秋の彼岸の中日には秋季皇靈祭が行はれる、陰暦九月晦の月十五夜も此月の下旬の交に當るのである。

月見船煙管落す 浅瀬かな　　櫛 良村

秋冰に うつろひて風人を吹く

桑園徐ろに秋の來るを報ずるものゝ如く桑間に徐ふ蟲頻に最早地下に冬を保たんとしつゝあるの時である、此時吾人は桑園に何を行つたものであらう、といつて之と定る行事はないやうであるが、見渡す桑園に點々目を痛むるものは蚕病である。其實夏秋蠶を行ひ同一桑樹を使用したる程度に應じ其だしい、左に本月の行事に代へやうと思ふ。

蚕縮病の豫防

蚕縮病は過分の損業、伐採の爲に枝の貯蔵養分減退するから生ずる病である、故に之を豫防するより外に良策はない、高は刈改むるより外に良策はない、高は刈改むる、枝刈として之れを豫防するには年一回より、外伐採せねやうにするは勿論、蚕縮の憂少なき桑種を選擇すること、風返し小牧、細江の如き枝條細小にして葉は片之の小さいものは此病に罹ることが多く魯桑十文字の如きは此病に罹ることが稀い、又過肥地及多湿地に栽培する一種の蚕は病すること、多いから、排水可良なる砂壌土等に栽培し適當の手入を施すが良い、又根刈及中刈に對する一種の蚕は一株中に一の細條を殘し置くときは發病すること、が少いけれども此殘條に勢力奪はれ、新條の育に影響するといふ缺點がある。

又既に發病したものは殆んど敏治の方策はない、枝條除去且つ本數を減じ、根部に細桑を生じたるときは、僅に効がある、衰廢したものに一時に速効肥料を與ふるときは爲に却て發病することがある、之れ根の貯蔵養分を一時に消費するが爲である、此他桑園の生理上に害あるものは胥該病の誘因に因りて病勢を盛ならしむるものである。

園中即事

九月桑場圃　大田稼多々
再蠶錦繡歌　三蠶衣食霧　初蠶徐稅供
寄題紋椅子　憶匆輕綺羅　人力敏如何
花すゝき草の袂の露けさを
暮れ行く秋のつれなさ

絲況

横濱市場

先月中に於ける横濱生絲市場は取りたゝて、記すべきことなく一言にして盡せば一般に不活潑沈なりしと云ふを憚らぬ、されどもこは偏段に於てのみ、流石に生絲の出秋とも云ふべき八月なれば實行に於ては可也と申し得べきも、買手も賣手も流々なりなれど是非なき次第なれ、月の初めには土曜を以て終はれる七月末の旅意稍緩げな氣合受けたれば少々上向くことなるべしと思ひきや日曜越しに加へての「サンマホリー」にて一般休業同様なりければ商談とても渉々しからず僅かに八百九十俵の相場も變らぬ流々に薄商内を以て起點としたが米國向は弗々にて歐洲筋へ引き送まれた模てある、相場は四日に至り上一番九百俵に引き返し、七日に至つて上州南部鹿蘇五俵高を示したるも見て顧重げにて、市場を眺はす程にも至らざりき。

時やあらぬ、花やの花ならず三日間紅育の帝國劇場より目下機屋は在荷を有するに依り買ひ漁まず之も弗々手合せある如くなるも目下は取引なくされど多物に對する織物は前途好望なりとの報告來りしも場面は變りなきあじきなき中旬に入りては各商館共多く見送勝ちにて上一番格は南三館の直待ち注文口へ拾圓安にて手合せ行はれ歐洲向へ續て賣行たれば十五日に至り一般五圓高の氣合なりしも買逃さざれば弗々商内にはありたるも直段は些と落ち付き工合なりしが下旬に至り双もや上一番拾五圓安にて英一番其他へ賣行きし向き氣合ある模様なるも文安直なるにやや相場下押の氣味にて商談もなく々二十四日に至り五圓方の下押となり米國向は入電面白からず歐洲向買氣あるも偏段折合ず遂に月末に双五圓安の八百七十五圓にて見切手合を行ふに至つた今先月中に於ける集散の模様を表示すれば左の如くである。

明治四十二年八月 自三十一日 至一日 生絲集散表

区別	持越	入荷	賣了	地方使用	繰越
横濱	一六五五	二五四八三	一八四二〇	八二三	二二七九一
横濱	二九六八	五〇二一	三〇八一	一六	四九九二
横濱	五三〇	二〇一八	一四五七	一九	一〇七五
横濱	四一	二一六	一五〇	一九	八八
横濱	二〇〇九〇	三三一七三八	二三一一〇八	八七四	二八八四六

備考

一、表中原位圖に九貫目を掲す

二、持越は先月より本月に持越したるものにして本月一日の調査に係る

三、前月分の繰越と其數一致せざるは商端のものありしに依る

四、賣了中米國に輸出せるものは九千七百十二俵外に玉糸二百七十五俵にして歐洲に輸出せるものは三千八百〇五俵なりとす

之を昨年の同月と對照すれば入荷に於て六千八個を増し積戻に於て二百七個減つて手合に於て千五百七十七個賣了に於て二千百二十四個増したから昨年よりは數は賣れた、數は賣れたが値段は甚だ不味い、昨年の高直は碓氷社の羽子板が千六十圓に賣れたが今年は甲斐の矢島組の太と同甲南社の細とが千四十圓が最高てあるから二十圓方安いのみならず、昨年の當月は岩代の共同金象印が八百四十圓が一番安かつたのが同し共同金象が七百七十圓と云ふ安値て七十圓も下つたと云ふに至つては有難からぬ現象て銀塊相場と支那絲から來る影響であると云ふことが推せらるゝが細かいことは左の日別表て見て貰ひたい。

明治四十二年八月（自一日至三十一日）生絲集散日別表

（器械太□　同中△　同細○　座繰×　折返し＋）

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名（最高／最低）	社名（最高／最低）	種別	最高價格	最低價格	摘要
一日	二、四二五	―	―	―	―	―						日曜日
二日		四五一	四一九	―	―	六	武藏／信濃	瀧澤製絲／小口組	○□	九九五	九〇〇	歐洲口の手合へ信州上一番格八百九拾圓にて取組出來せり
三日	七八七	九五一	七二九	―	一、二三五	二六半	甲斐／岩代	矢島組金／共同製造所	□＋	一、〇四〇	八八二半	引續き信州物手合相應に出來したるが相場變りなく保合なりき
四日	五九〇半	七三〇	七八三	一八	六〇〇	三三	甲斐／岩代	甲南社／共同三馬	○＋	一、〇三〇	七九〇	歐米とも弗々出來し氣配よろしく相場は五七圓高に進みたり
五日	九八一	九二四	一、〇七一半	―	―	一〇〇	美濃／岩代	森田製絲／共同金象	○＋	九九〇	七七〇	此程中より商談中の上州南部座繰の取組出來其他は別に變りなし
六日	一、一三三	一九九	一、一〇九半	―	―	三二	駿河／岩代	富士山社／共同三馬	○＋	一、〇二〇	八〇〇	人氣變らず靜かに保合へり此の中獨り買望むは細筋物なりし
七日	一、一三七	一七五	六一二半	一四	一、七二四　玉絲八〇	三四	三河／信濃	萬寄製絲／小口組	○□	一、〇二五	八九〇	上州南部座繰の顕物は五圓高に出來し其他は別に變りなし
八日	二、一〇五	―	―	―	―	―						日曜日
九日		一五九	九九〇	一八	―	五三	相模／武藏	平米製絲／大星館	○□	一、〇三五	九一五	捗々しき商談も出來ずして一寸人氣靜かなりし

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名（最高／最低）	社名（最高／最低）	種別	最高價格	最低價格	摘要
十日	八四五	二四二	一、三五〇半	五五	―	五六	甲斐／岩代	甲南社／共同二馬	○＋	一、〇三五	八五五	必要物は變りなく賣行けり
十一日	一、一二四	―	八、一二半	―	―	三五	陸中／信濃	天民社／入○製絲	○□	一、〇〇〇	八八五	續へて靜況にして鋒々然たる商談あらざりし
十二日	一、三二二	八二九	七八八	一四四	一、五七一	八六	上野／同	碓氷社姫／甘樂社來金	××	九八〇	九一五	信州物前直より十圓安にて補充商ひ出來せり
十三日	一、〇七三	五二	五〇一半	九	―	二九	伊豆／信濃	城南社／小野社	○□	一、〇三五	八九〇	別段新らしき商談は出でざりしが弗々續へて賣行きありし
十四日	九三九	六〇〇	六八八半	―	五三七	四一	上野／信濃	甘樂社手／小松堀組	×□	九八五	八九〇	歐洲向は弗々前よりも賣行けども米國向は捗々しく氣配を示さず
十五日	一、八九四	―	―	―	―	―						日曜日
十六日		五二〇	一、〇二四	四二	―	二〇	越前／信濃	日頃市製絲／尾澤組	○□	九九〇	八九〇	必要續きの口へ五圓高にて出來せしが悉く歐洲向のみなり
十七日	一、四〇二	一七四	一、八三九半	一九	―	一五	三河／岩代	國寶社／共同三馬	○＋	一、〇一五	八〇〇	米國向は捗々しからざりしが歐洲向中細筋は頗る優勢なるが如し
十八日	八三〇	一八六	一、一六七半	九	六七九	二八	信濃／同	新龍社／渡透三協	□□	九六五	八九〇	必要口にも一通り行渡り後新規入電薄くて商談頓と靜かなりし
十九日	一、〇三二	一三五	七〇二半	二〇	一、五六六　玉絲八九	四一	上野／信濃	碓氷社／岡谷二人重組	×□	九一五	八九五	商談薄の爲め人氣靜かにて折返し絲は五圓安なりし
二十日	八四九半	四五八	四七九半	―	六七九	三七	飛驒／信濃	墨極社／日木社	□□	一、〇一〇	八九五	一番館へ信州上一番五圓安にて折合たるも何分面白からざる成行なりし
廿一日	九一二	一八〇	五六五半	五九	一、二四七	一九	駿河／信濃	泉館／小口組	○□	一、〇〇〇	八九五	前日に續き人氣頗る重く鋒々商談なし
廿二日	二、〇四二	―	―	―	二七六　玉絲三五	―						日曜日
廿三日		一、四九二	四〇七半	六二	―	二四	岩代／信濃	共同金象／東英社	×□	九六五	八九〇	信州物五圓安にて買人少なく唯出來安ながら上州座繰近頃稀なる大商內を行ひたり
廿四日	一、〇三七	一八〇	六九八半	一八	六四一	二八	下總／信濃	須藤製絲／林組	○□	一、〇三〇	八九〇	相場は又々遂に五圓方下落を告げ不振の成行なりし
廿五日	一、〇九六半	一八一	一、〇六七半	二七	―	五〇	甲斐／岩代	甲南社／共同一馬	○＋	一、〇四〇	八七〇	前同樣安唱ひにて折合なりしも折返し前直より五圓安にて出來せり

廿六日	一,四一〇	四一	一,四七三	一七	—	四半	武蔵豊石館 岩代共同二馬	＋○	九九〇 八四五	多少買氣ある向も見送り居り益々面白からざる足取なりし
廿七日	一,二三六	七九七	一,〇三三	—	二六四	一〇	上野交水社 信濃金山社	□×	九一〇 八九〇	信州物前直より五圓安に出來せしが悉く歐洲向なり
廿八日	九七四	一七一	七八八	一八	一,七九三 玉繰一六	二	武蔵林組 相模漸進社	×□	九〇〇 八五〇	直段同事なりしも捗々しき買入なく大勢は依ほ不況の成行なり
廿九日		—	—	—	—	—				日曜日
三十日	二,一八九	九八	一,二六九半	—	—	三二	三河日登社 信濃常田館	□○	九九〇 八七五	新規注文捗々しく入來らず人氣は概て不振の成行なり
卅一日	一,三七三	七八四	七三七	九	一,三八四 玉繰五五	三三	信濃大和館 同白鶴社	□□	八八五 八七〇	信州及折返し絲の當用口折合たるが相場は五圓安にて人氣頗重し
合計	三二,七三八半	一〇,七〇九	二三,一〇八	五五八	一三,五一[illegible] 玉繰二七五	八七〇				賣了生絲二萬三千百〇八個の内約定納が六,七三五個即日納六,四一六個其結果が九,九五七なりし

尙本年一月以來の生絲集散の狀況を示し且つ八月末に於ける統計と前年の夫れとを對照すれば左の如し。

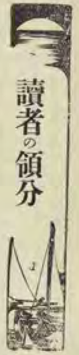
▲は減じた印×印は増した印

年月	持越	入荷	賣了	殘戻	繰越	輸出數量	輸出價格
四十二年一月	四五,三六八	一四,九七〇	一八,九二六	一,一二〇	三八,三三〇	一〇,三六八	九,三六三,九九六
四十二年二月	三八,七五九半	六,六〇七半	一五,八四九	一,八四三	二七,六七五	九,三五六	九,六五四,〇五七
四十二年三月	二七,三一七	一四,五三三半	一五,二八〇	一,八六五	三六,四九六	六,三五三	七,五七六,〇一三
四十二年四月	三六,四九六半	一六,二三五	一七,〇五〇	三,三九七	三三,三七四	一七,〇五〇	八,八八八,八一五
四十二年五月	三三,三七四半	一三,五八五	一八,二三八	三,一五四	一五,四三五	九,五六五	八,九二五,八三三
四十二年六月	一四,七四四	二一,六三三	二一,八八九	三,五四九半	一〇,九一七半	五,〇七[illegible]	六,三三四,四一五
四十二年七月	一〇,九三三	三七,七〇七	一七,三三三	一,五七五	二〇,一四三	八,四六七	八,五〇一,五二八
四十二年八月	二〇,〇九〇	三五,七七八半	二三,一〇八半	八七四	三八,八四六	一三,五一七	一三,六五九,〇三六
計		一三〇,一〇八	一五五,〇九九	一五,九五四		七九,八三七	七三,四七九,六四二
四十一年八月		一二一,三五四半	一〇九,三四五半	一三,一〇四半		五一,七五三	六一,六一八,三三四
比較		×八,七五四半	×四五,八五五半	×八五〇半		×二六,〇八五	×一〇,八六一,七〇七

明治四十一年横濱生絲貿易概況　全

原合名會社發行

本書は表題の如く昨年中に於ける横濱生絲市場の概況を記したものである、一月より十二月に至る迄の貿易の有樣を月別によく知り得る計りでなく、生絲繭屑物羽二重等の統計幷に佛米淸等諸外國の蠶絲業の狀況をも明かに知ることが出來るから、其當業者の爲に其き參考たるは言ふ迄もない唯非賣品なるが故に一般の希望者が容易に手にし得ざるは遺憾とする處である（發行所横濱市辨天通三の四九原合名會社）



讀者の領分

富士登山記

通信常會員 蠶業講習所技手　松下憲三朗

富士山へ登りたいと思つたのは予が多年の宿望であつた、而かも種々の事情に遮られたので、未だ其目的を遂ずる機會がなかつたが、本年は幸に好時期に休暇を得て登山を企てた、析橋巻島君と云ふ好道連を得たので、七月二十九日に愈々出發することゝなつた、予が登山なしたいと思ふたのは。

一、富士山頂の光景及眺望は如何に雄大なるもので、且つ想像と如何なる相違があるであろうか。

一、海拔一萬二千尺の高山より下界を見渡せば如何なる趣味があるであろうか。

一、高山植物や青の狀況並に登山中氣候の變化は如何のものであろうか。

一、富士山は日本一の高山で（新高山は例外として）其英姿の雄大にして、最高なる、恐らく世界第一で、古來より靈山として著名のものである、此氣高き山に登つたならば、吾人に如何の感化を與ふるであろうか。

等であつたが、時日が許さぬ爲二日間に往復することに決したので、十分なる探檢は出來なかつた、服裝は輕快を旨とし兩人共に洋服に脚絆、足袋、草鞋で傘及雨具は一切携へず、予は寫眞器を肩に掛けて「メイヤスシヤア、ズボンシタ」を入れたる風呂敷包一つを携へ、双眼鏡を手にしたのみである、巻島君は「ザツク」の鞄を肩に掛け、中に「メリヤスシヤタ、ズボンシタ」を入れ、外に雜誌　帽子ビスケツト等を詰めて居る。

七月二十九日午前六時十五分大垣行列車にて、新橋を發した、當日は拂曉薄霧の氣味ありしも、次第に晴れ渡りて誠に長閑なる天氣となつた、然るに國府津、松田邊に至りし午前九時半過には、四釆方に白雲が湧り出でゝ、殆んど富士を見ることが出來ず、一時胸裡に怨波を漂ばしたが、小山、御殿場に着するに及んで「心當てに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴る不二のね」であつた、漸く愛に愁眉を開き元氣を恢復した。

午前十時三十分に御殿場に下車し、直ちに不老館（富士屋）に入り晝食をなし登山の準備を整へた、即金剛杖、草鞋（一人前上下五足を普通とするそうだ）繪ばがき、合力、馬等を準備して、正午十二時と云ふに御殿場を出馬した、合力は當地の住人野木啓五郎と云ふ四十五六の温順の男である、賃金は二日がけにて壹圓五十錢、馬が一頭に付太郎坊迄七十五錢、金剛杖が一本十錢、草鞋が一足三錢（粗造なもので東京のものに比すれば耐久力半分である）繪葉書が一枚二錢乃至三錢である。

御殿場口は東表口と稱するので、尙此他に各方面よりの登山口は澤山ある、序に一寸記して見よう、即大宮口或は西口と稱するのは、東海道鈴川驛より下車し馬車鐵にて大宮町に至り、淺間神社の背後より登るので、頂上迄約八里と稱する別に大宮新道なるものがある、從來の開鑿に係り四合五勺にて大宮口と合するので里程は稍短縮するとのことである、須山口又は南口と稱するのは佐野驛より須山を經て登るので、頂上迄約七里と稱せられ、富士山腹寶永山の麓四合目にて御殿場口と合するのである、須走口又は東口と稱するのは須走町より登るので頂上迄約六里此道は小山に通ずる街道で古へより登山者が多かつた、今は此町より南は御殿場北は甲州吉田に鐵道馬車の便がある　吉田口又は北口と稱するは甲州大月驛に下車し、馬車鐵にて吉田町に至る、當町より頂上迄約八里、昔日本武尊東夷を征伐して歸途、甲州に掛り此所にて富士を遙拜し給へりと爾ふ、此道は八合目にて須走口と合一するのである、御殿場より頂上迄約八里と稱すれども、實際數は御殿場より太郎坊迄三里四丁（時間約三時間を要す）太郎坊より頂上に至る約一萬八千二百尺、此里程約二里三丁（登山時間約七時間乃至八時間）である、富士登山は御殿場より登りて須走に下るのが比較的容易で、且つ愉快である又吉田口より登りて御殿場口に下るのも面白いそうである。

御殿場を出で約二三丁の村端れに富士山表口本社淺間神社がある、下乘して參拜し再び乘馬して所謂富士の裾野に取り掛つた、見渡す限り一面の高原で中個には陸軍演習の爲め設けたる大なる「バラツク」があつた、此地一帶は火山灰の細砂せられたるもので、馬の蹄を沒し走るに從つて砂塵全身を蔽ふには閉口した、馬は

一撥を加ふれば直ちに疾走して其愉快又一入てあるが、馬の疲れを懼れて馬丁が許さないから徐行して、午後二時頃一里松に達し、約二十分間休憩、写真器を取り出し予等二人乗馬出發の景を撮影した、写真は總て位置配置を正し「ピント」を合せたる後、合力の野木君をして「シャッター」を撮らせ、予は即写真中の人となつたのであるから一般に不出來であるを免れない、行くに從ひ漸次に山麓の森林帯に入り、馬返を過ぎ太郎坊に着したのは午後三時過てあつた、此所にて此馬を返し休憩約三十分間、予は写真を写す巻島君は得意の「スケッチ」を初めた富士山は御殿場より之を眺むれば其巍ゆる状、實に平穏て緩慢て割合に能く見え、此れしきの山へ登ることは何でもないと思はれるけれども、さて其麓に立ちて巍峨たる山頂を仰視すれば實に峻嶮なる急勾配て、どうして彼の山頂迄登り得るかと思ふのである。

午後四時太郎坊を出て徒歩にて登り初めた、總ての荷物、悉く合力に負はせ、僕等は單身、金剛杖を一本持つたのみてある、富士は俗に草山三里木山三里禿山三里の諺があるが、一里松迄は草山にして「ふじばかま」「まつむし」草、「すゝき」、「かや」「ふしぐろ」「せんのう」等の雑草を生じ、夫より太郎坊迄は木山即喬木帯にして森林をなし、もみの木、ふじ松等多く茂つて居る、夫より以上は禿山で三合目迄は所謂、灌木帯をなし、やまはんのき、いはやなぎ等岩石の間に生じ三合目より七合目迄は所謂草本帯て往々株草を生じ、又稀れに「はいまつ」「おにく」等の寄生植物がある、八合目以上は所謂地衣帯て僅かに岩石に固着せる地衣があるのみてある。

却説太郎坊よりは登るに從て急勾配となり、二合二勺迄は乗馬にて登る人もあるけれども、此れ以上は如何なる人でも徒歩でなくてはならぬ、此所にて休憩約二十分間甲斐山中湖を背景として撮影し再び登り初めた、此日午後より實に近來稀なる快晴となり、恰かも天候極めて平穏、春の如き景色てあつた、登るに從て駿河灣より伊豆半島、箱根、足柄等の展望漸々佳境に入り、十歩行きては後振り返り、二十歩登りては下界を望む、爰に於て双眼鏡の役目もあるようになつた、三合目に着きしは午後五時半、石室に休憩する内大分寒さを感じて來た、檢温器を取出して氣温を檢すれば華氏六十度てある、(正午御殿場の氣温が八十九度、前日東京が九十二度)是や此行くも歸るも風引きて知るも知らぬも大方は咳」と云ふこともあるから、爰に合力に命じて荷物の中よりメリヤスシヤツ、ズボンシタを取り出し、冬仕度となり、先づ四方の展望を初めたが、双子山を右方に見下し、遠く伊豆半島より天城山、駿河灣等恰かも手に取る如くてある、巻島君は此所ぞと腕に撚りをかけ頻りにスケツチを初める、時恰かも日は富士の頂上を越へて中腹深く落ちたれば、箱根、足柄の諸山を「バック」となし、駿、相、甲、三州一面の平野(高山より見るときは下界總て平野の如く見ゆ)を畫板となして写りたる所謂影富士は、實に得難き奇觀てある即ち写真器を取り出して撮影した、次に頂上及八合目萬年雪を背景とし、吾等同行二人が金剛杖に縋り足引き摺りて登山する光景を撮影し、更に一大元氣を出して登山を初めた、四合目の石室に着きし時は日は既に西山に没して薄暮蒼々たるの時てあつた、此際に於ける箱根山中蘆の湖、甲州山中湖の光景は實に繪にも写真にも到底見られぬ圖である、更に眸を轉らして駿河灣、清見潟、の夕景色は又一入の雅趣がある、登るに從て坂路は益々峻嶮となり、山骨焦爛、礁沙之を覆ひ、寸一の草木を見ず、足は疲れる、腹は空く、元氣は漸次に減退し、追々吐息を漏らす様になつた、馬鹿

松下東京蠶業講習所技手並巻島氏富士三合目登山の光景向て左松下氏右巻島氏

一番先づ弗子を呑み林檎を喰ひ「ビスケツト」か噛りて空腹を充たし、又もつ杖に倚りて登山を續けた、恰かも月は中天に高くと云ひたいが此方の山が高いので、何だか月が山の中腹に掛てつて居る様な氣がする、丁度寶永山の側面を登りつゝあるときてあるから、又一層の雅趣がある、實に滿天拭ふが如く一點の雲なく、滿月に近き月は皎々とし下界を照らし、遠くは太平洋に浮ぶ漁火、近くは足柄山中小山紡績の電燈と相應して、曠大、無邊の夜景は到底パノラマ位ては想像が出來ない、(よもすがら富士の高根に雲きへて清見が關にすめる月影)まだ宵の口てあるが、餘りに絶大なる光景愈々佳境に入りて足の疲れも身體の弱りも打ち忘れて思はず五合目て時を移したが、斯くては果てじと猛進一番五合五勺の石室に着いたは午後八時、此日六合迄登りて宿泊する豫定てあつたが、六合目には中道廻りの行者が多く宿泊して混雑して居ると云ふことてあつたから、幸ひ五合五勺は昨年の新築で相客は小田原の中學生が僅かに三人あるのみてあつたから、爰に御輿を下すことに決定し、忽ち座敷へ個ひ込んだ、高等工業の健脚見二人は御殿場より吾等と相前後して登つたが、トー〳〵三合目で弱つて腰を据へた、吾等の後より始終尾行して來た外國人三人は、四合目か四合五勺邊にて捕虜になつたらしい。

先つ旅裝を除くべく草鞋を脱ぎ、足袋を去り、脚絆を解いたが、足を洗ふべき水を持て來ない、暫くして濡れ手拭を持ち來りて「サアドーゾお上り」(ハア水が不自由てあるわい無理もないと足を拭ふて上つたら、忽ち蒲團を布いて呉れた、中々氣がきいて居る、座敷は廣いものておまけに客が少いから蒲團はドツサリある既にして晩餐の用意が出來て膳は運ばれる、宿泊料は一人前五十錢だが膳に上るものは氣壓の低い所て煮た飯てあるから充分熟して居ない　其マヅサ加減は到底南京米以上てある、夫れに副食物は干物類二三點を摘み入れた腕盛りが一ツに、胡瓜の一夜漬が附いて居るのみてある、先づ弗子を命じ携帶の牛肉罐詰を切りてタンコツプを傾け、晩餐を濟して爰に漸く元氣を回復した、(弗子一個六錢、正宗瓶二十五錢)時に午後九時室外に出て見たが中々寒い、驗温器を取り出して氣温を驗せしに華氏五十二度、月は皎々として中天に懸り遠く太平洋は雲か海か見分けが附かぬ、「さよ更けて富士の高根にすむ月は」の古歌を思ひ起し、室に入りて寢に就いたのは午後十時てあつた、室内は割合に暖い、何分室の三方と天井は岩石を疊み重ね、前面僅に厚き板戸を嵌め切りて、爐には絶へず火を焚いて暖を取つて居るから、さながら温室のやうである、それに蒲團は二人分を引き被つたから少しも寒くない、實に想像外てある、就寢後暫くの間は今日胸裡に印したる現象が記憶を繰り返し、夫れに此石室ては巖石の間より僅に出つる雪解水を導きて三秒間に一滴位つゝポツリ〳〵と水壺に落つる、其の水の音で夜の寂れ行く様何となく物哀しう、約一時間位は墨先生と奮闘したが、何時か仙境に入りて目が醒めたのは午前三時、直ちに飛れ起きて写真乾板の入れ換へをなし、洗面用の水を請求したが僅かに「コツプ」に一杯の水を呉れた、實に山頂に於ける水は貴きもので予は此一杯の水にて先づ口を嗽ぎ歯を磨き、手を洗ひ顔を洗ひて最後に手巾に濕して洗濯(?)をして絞りて干した、此れは一些事てはあるが節儉、貴重等に就き予は大なる教訓を得た。

午前三時半朝食を濟し四時此紀念多き石室を出發した、元氣は前日に百倍して怒ちにして六合目に達した、東天、紅く白く、澄み渡りて數層の雲靆は五色を彩り、風靜かに氣清く、神氣、心身を襲ふ心地がする、七合目に達したときは四時四十分、此所には朝日館、日出館、二軒の石室がある、直ちに室前に写真器を据へ明け彼の一大奇觀たる御來光、今や遅しと待ち構へた、既にして四時四十五分の頃、紅く、白く彩りたる雲間より中天高く數條の瑞光を放つと見る間に、太陽の形態、恍然として現はれ次第に半圓を畫き、燦爛たる黄金色の光輝を發しつゝ瞬く内に正圓を出現したる光景は、到底、何物を以ても之を表狀すべからざる現象てある、げに太古天照太御神が天の巖戸に立隱りの古事を想起して、愈々崇高の念を高め、思はず萬歳を絶叫すると同時に、写真器の「シャッター」を撮りて此空前の光景を「カメラ」中に收めた。

寶永山は寶永年間の噴火と共に突出せし一峰で、大宮口と御殿場口の中間六合目の位置にある、故に七合目の登山道を少しく左方に偏して噴火口の斷崖に臨みて俯瞰するときは、仔細に見ることが出來る、峰の中央の大坑は即舊噴火口で底部には積雪がある、坑内凡そ三つに區分せられ、其四圍殊に大宮口の方面は年々崩壞して、今は口廣く底淺く成り行くのである、坑側には十二時石、屏風岩、牡丹岩、臥龍石、蓮華石等の奇巖があるが、皆合力の説明により双眼鏡で望み見たのである、更に引き返して登山を續け、八合目に達したときは午前六時先づ休憩をなし、名物の甘酒を飲む、(一杯三錢)此邊ては氣壓が極めて低き爲、鍋に沸騰せるものを汲み來りて直ちに呑むも百六七十度の湯を呑む位てある、小憩後巻島君は例によつて「スケッチ」に熱中する、予は八合目萬年雪を撮影して後双眼鏡を手

にして、各方面の展望を試みた、北は甲州郡內地方より、西は駿州清水港、近きは相州江の島より遠きは東京筑波山等を微かに望むべく、甲州山中湖、箱根芦の湖、駿河灣を始め、足柄山、天城山、伊豆半島、大島三宅島等は實に眼下に手に取るが如し、思はず時を過して七時を過ぐる頃又もや登山を始めて途中萬年雪を味ひ、愈々加はる峻險を金剛杖に力を藉り、九合目の石室に達したときは殆んど青息の恣であつたが、室中の氷塊を砕きて湯を得し、元氣を附けて愈々胸突八丁の嶮に差し掛つた、此邊は巨岩怪石相重疊して黒砂赫灰の如きは殆んど絶無で、僅かに岩石の間隙を通路として攀ぢ登るのであるから、二歩を運びては一息三歩を登りては足を休め漸くにして絶頂に達し遂に雲中登仙の客となつたは午前八時、實に「聞きしよりも思ひしよりも、見しよりも、登りて高き山は富士の根」其通りである、先づ銀明水に至りて暫時休憩神水を飲む、冷めたきこと氷の如し（茶碗に一杯一錢）爰にて記念の撮影をなし、展望を始めしが風忽ち起りて下より「もや」を吹き揚くり天候俄に險惡となる、寒きこと嚴寒中の如し、仍て「ハンカチーフ」にて頸を卷き手拭にて頰被りをなし、其上より帽子を被むつたが、急激に寒くなつたから、水鼻は滴り手は「しびれ」を覺へた、夫より所謂「おはち廻り」と稱して內院（舊噴火口）の周圍を廻り初めた、先づ鐵鎖によりて梯子段を上り駒ヶ嶽の嶮を超へ、官幣大社淺間神社奥宮に詣で遙拜の後、登山記念の「スタンプ」を金剛杖、扇面、繪葉書等に捺印せしめ（一箇に付金一錢）社頭にある富士山郵便局に至りて各地方に宛てたる繪葉書を投函し、記念の「めたる」等を求めた、此際風稍や凪ぎて濃霧晴れたるにより、三島ヶ嶽の岩石の一角に端座して双眼鏡を手にして四方の展望を試みた、十三州の山河沼湖、平原、海港は悉く脚下に繪圖をなし、さながら一面の地圖の如くさしもに高き山嶽は、恰かも蟻蛭の起伏するが如く、深さ幾十尋の大湖も僅かに一小盃水の如く、幅數百間に亘る大河富士川も一反の木綿を布いたやうである、其雄大なる壯觀、絶景、筆紙の能く盡くす所でない、忽ちにして雲霧は浮々焉として起り、蓬勃として流れ、山に亘り谷を埋めて觀望の極を充分に盡さしめなかつたは甚だ遺憾であつた、夫れ靈山其秘を全く開くを許さゞるか。

松下氏が富士山頂中央氣象臺觀測所前に撮影したる光景

斯くて本社を辭して「コノシロ」池を過ぎて、劍ヶ峰に差し掛つたときは天候甚だ險惡となり、合力は止めたけれども予等二人は强て登り絶頂にて萬歳を呼んだ、之を見て教員二名に引率せられた十餘人の中學生も引き返して登り來り、校歌を斉して辭し去つたのは愉快であつた、嚮野中氏の觀測所は嶮ヶ峰の斷崖にあるが、其正面に廻るは頗る危嶮であつたから、側面より之を見て當時野中氏の此石室の冬籠の壯舉を想起し、再び元の途に下りた、峰下に親知らず子知らずの嶮がある）此際に於ける天候の險惡は却て吾等をして一層神々しき念を強からしめた、嶮ヶ峰は富士頂上即十合目（海拔一萬二千二百五十尺）より高きこと二百一尺なりと云ふ、嶮ヶ峰では記念の石を採集し且檢温をしたが華氏四十五度（午前九時頃）であつた。

山頂の噴火口は大小の二箇である、其大なるものを內院と云ひ、其東北に位する極めて小なるものを小內院と云ふ、內院の周圍は約十七八丁位はあるべく深さは六七十間位はあらう、內院は其下方に甚だ厚き熔岩流あり上部には熔岩流の火山礫層と交互して表はれて居ると云ふ、其東面及內院側の日陸には積雪重疊して白皚々たるの光景である、內院の縁邊に沿ふて賽の河原、金明水に向て周るを內周りと云ひ、內院の外側面を周るを外周りと云ふ、內周りは約一時間半を要し、外周りは約二時間を要す、此日風强く且つ濃霧ありし爲め、內周の道を取り劍ヶ峰を下りて殘雪の坂路を橫斷し、賽の河原を經て金明水に至る、金明水は銀明水と相對し、背後には劍ヶ峰に次きて高き白山嶽が聳へて居る、其麓に天拜所がある此所にて撮影をなし、神水（一杯一錢）を呑む冷たきこと氷の如し、金銀の神水は共に地中より湧出するもので汲めども涸れず、雨降れども溢れず、實に清澄なるものである、夫より嶮坂を昇りて久須志ヶ峰に昇る、峰の北端には久須志神社あり、其頂上平坦の地には中央氣象臺の觀測所がある、事務所に所長を訪ひ許可を得て、櫓閣の下に吾等兩人腰打掛けて記念の撮影をなした、此時恰かも御殿場警察署長下田茂久氏の登山せらるゝありて撮影に就て種々便宜を與へられた夫より北口即吉田口に廻り、十二軒石室中の久須志ホテルにて暫時休憩し、更に伊豆ヶ嶽に登りて不動尊を拜し、北方の展望を試みたが、風强く時々「もや」が掛つて僅かに南北都留一帶の峡谷、桂川の奔流、吉田町等を認むるのみで、甲州身延山信州諏訪湖等の遠望が出來なかつたのは頗る遺憾であつた、因に記す頂上の所謂八峰とは劍ヶ峰、馬背山、雷岩、釋迦ヶ嶽、藥師嶽、經塚、駒ヶ嶽であつて、佛家は此八峰を以て蓮華に擬し、芙蓉の名榮に起るとは寛保二年森內子謙の著「芙蓉圖說」中に記してある、又觀音ヶ嶽に於ける水蒸氣の噴出は噴火作用の最も微弱なるもので學者は之を汽狀噴火口と稱し、纔かに活火山の名殘を止め、此東部方面には地熱を利用し酒を燗し、或は鷄卵を煮ることが出來ると云ふ。

下山は須走口によるのが愉快である、下山の準備としては先づ少くとも三足の草鞋を用意せねばならぬ、即新しきもの一足を穿ち、取り換へたる舊き草鞋を橫に足の中央に固く結び附けるのである、而して中途其橫に結びたるものが砂礫の爲に磨り切れて用をなさゞるに至らば之を取り捨て、尚新しきものが一部破れしとき之を解きて更に新らしきものと穿ち換へ、舊きものを前の如く足裏の中部に橫に結び附けるのである、斯くて用意が整つたから先づ帽子とビスケットにて元氣を附け、午前十一時を過ぐる頃、下山の途に就いた、北口は八合目にて吉田口と須走口と合するのであるが、下山は砂走りの道を取りて、一直線に一瀉千里の勢を下るのが面白い、兎に角墜體の加速度で自然に速力が加はるから、足と杖にて之を制禦しつゝ下らねばならぬ、足は砂中に五六寸も埋まるから頗る敏速に砂土より引き上げねば稍もすれば前に倒れる憂がある、又速力の加はりたるときは一足飛べば約五六尺を滑べり下るのであるから、少し急速度にて下るのが却て容易で、又非常に愉快である、此調子にて下るときは實に云ふべからざる妙趣のあるもので、到底平地では試みることが出來ない、僅かに二十分間にして六合目石室即中道廻りの要地に達し（富士山腹周圍の登山道各六合目を廻りたる道を中道と云ひ熟練なる行者の通路である）休憩をなした、何分快速な以て下るのであるから、自體の疲勞は覺へないが、振動が激しいので、途上の氣味がして耳が鳴るのを覺へた、休憩約十分間にして再び發足し、矢張登山道を左に見て砂走りを快走し、約三十分間にして初めて森林帶に入り行くこと二丁餘、一合目の茶屋に着したのは零時三十分頃て、頂上より僅かに一時間餘で第一合目迄下山した、茶屋にて晝食をなし名物の饂飩をやつて見たが、其まづさ加減は御話にならない、矢張帽子の罐詰の厄介になつて、後發する內藤雨に襲はれたが、歸京の汽車時間を氣遣ふので雨の晴れるを待つことが出來ないので、笠又は油紙、傘等を求めたが、人家は只此茶屋一軒あるものであるから、買ふにも借りるにも仕方がない、止むを得ず頭からづぶ濡になることに決して出發したが、幸ひにして雨が晴れたので心配は杞憂に屬した、行きても〳〵盡きせぬ森林中の下り坂を小走りに下り行き、小寶社、雲切社等は非常の速力を以て通過し馬返しに着したのは二時過であつた、暫時休憩の後須走町迄約二里の間をがた馬車（荷車の上に箱を打ち附けたるもので急の間に合せだから頗る珍妙奇態のものである）に乗りて、須走町に着し、東口本宮淺間神社に詣で鐵道馬車の待合に驅け附けたが、今や發車せんとする所であつたから、直ちに飛び乗り御殿場に着したのは午後五時過、登島君と共に無事下山の祝盃を擧げて晩餐をなし、同地午後七時四十分發にて新橋に歸着したのは午後十一時半であつた。

以上は只登山中見聞したる事實を予が胸裡に浮びたるまゝに秩序もなく、飾りもなく出駄ら目に書き綴つたのである、若し夫れ鐘秀の氣靡字に磅礴し、雲烟飛動し、氷雪崔嵬として眞に所謂千秋に聳ゆる富士の美に至りては、到底杜撰の筆硯能く其妙を寫し得る所でない、幸ひに登山者の參考ともならば幸甚である。

試驗

桑園改良試驗（附夏秋蠶專用桑園の造利）

通常會員 埼玉縣立農事試驗場技手 水野辰五郎

絲價一千幾百圓の聲は今や昔の夢と物語らるゝ昨今の狀態で、九百圓八百圓臺が、先づ以て蠶絲の標準價格かの如く此處更に前途に曙光を見るを得ぬので、到る所蠶業の將來を悲觀し、嘆聲を漏しつゝあるの秋である。勿論徒らに唖然として、今後の好況を夢想し、恬然省みざるが如きは、元より策の得たるものでないが、又翻て考ふれば、此の悲觀嘆聲は、延て少なからず養蠶上に悪結果を與へ、更に一倍の落膽を産む場合少なくない、蓋し養蠶業の如きは、特に大なる覺悟を以て元氣に經營せねばならぬ業たればである、養蠶には飼育上種々の禁物がある夫婦喧嘩も其一つである、又飼育中或は養蠶前に家内に不幸のあつた時には、其年の養蠶を見合せ、或は飼育し來つた愛兒をあたら水葬するか、又は他人に讓る習慣が行はれて居る所もある、之れ等は元より迷信の然らしむる所ではあるが、其迷信の因て起これる根元を推察するときは恐らくは此の不幸なる年に於て、違作の悲境を演じた實例多かつたが爲めに、斯の如き年は、蠶は必ず病む捨つるに如かずと、過信せしめた爲めであろう、予の實視する所に訴ひても、確に家内喧嘩の絶ぬ家、又は不幸のあつた家は比較的不結果の養蠶をなすものが多い、養蠶には實に家内喧嘩は禁物であるが、同時に此の悲觀落膽等も又大の禁物である、大なる覺悟を以て元氣に事に當たると云ふことは、獨り養蠶上に限らず、有らゆる方面の目的に對して、其成功を見るの元素であるから、吾人は先づ以て此の悲觀し落膽するの不得策を悟つて、同時に勇奮して現在以下に絲價下落すとも倘泰然として斯業を經營し得るの良法を研究し、且つ實行に務むべきである、今や我が蠶業は國家の命脈を握きると云ふ重要なる地位に立ち、即ち斯業の興廢は、直に國家の消長に關する所以であるから、例へば經濟界不振の爲め、絲價下落を重ね、最早養蠶業が、算盤が持てぬ場合に立ち至り、自滅せんとするの悲境に陷いつたとするも、斯業に代つて貿易品の巨擘たるを得、且つ農家の副業たる性質に叶ふ、適當なる事業を發見せざる以上は、養蠶業の自滅を傍觀する譯には行かぬ、自然伊佛の轍を踏んで、必ずや保護奬勵を行はなければならぬのであらう、幸にも斯の如きことは、遠き未來はいざ知らず、目今に於ては比較的有利な事業であるから、何んの奬勵を待たずとも、年々膨脹の姿であるにも拘らず、又一面には、一貫目四圓の繭相場では、到底算盤が持てぬ、蠶に桑を遣る張合がないなど、兎角六七圓の繭價であつた時を夢みて、意氣銷沈して居るが、其に繭價一貫目四圓では、算盤が持てぬかが疑はしい、予をして言はしめたならば、倘相當の利益があると思ふ、のみならず、倘進んでは、一貫目四圓以下の繭を作り出だすべく、勵んで、絲價下落の場合に處さなければならぬ、養蠶家も等しく農家ではないか、米麥作に對しては、算盤の持てる持てぬに關せず、己れの天職かの如く、汲々として怠たるなく、炎天に身を焦がし、四體に流るゝが如く汗するも、厭はざる狀態であるのに、何ぜか養蠶業に對しては、第一算盤の立て方が比較的苛酷である、米麥作が農家の天職なら、昔はいざしらず、今日の養蠶業は、同じく農家の天職ではないか、マイナスの養蠶業でも營まなければならぬと言ふ譯ではないが、兎角養蠶業は利益多いものであると云ふ考へが、先入主となつて居る爲めにか、少し位の利益は利益と見ない弊があるので　本年の如きは養蠶業を遇すること比較的苛酷である、更に例を捕へんに、斯樣なことを云ふものがある、養蠶によつて得た金は、金に重みがない、米を賣つた金は、金に重みがある、養蠶によつて得た五十兩の金を製へて、酒や肴を購ふことは何んとも思はぬが、米を賣つた金で、鹽魚さい買へ得ぬとは、農家一般の狀態である、何ぜであろう、等しき金、其金の値打に輕重があるとは、蓋し其得たる途に於て、養蠶の如く僅かの日數の間で、且つ一家を舉げて、夫れに從事し、何れも皆相當の報酬を得らるゝので、即ち米作に比すれば勞少なくして、多き利益を得らるゝより、得るに易すきものは失ふも又易すいとの理屈になるてあろう、或る米作本位主義者は言ふた、養蠶は質朴なる良農をして、贅澤心を增長させ、延ては輕佻浮薄なる惰農を作るから恐れねばならぬと、之等は元より謬見の甚だしきもので決して養蠶其物の罪でなく其人の罪たるや勿論言や一笑の價値もないが、兎に角養蠶は如斯利益の多いものとして居つたから、現在の絲價繭價では、落膽の淵にあるのも當然である、宜しく此の考を打捨てゝ、養蠶家も等しく農家であると云ふ頭で、經營せねばならぬ、斯く考へたならば必ずや倘充分なる利益ある事業として、喜こんで其業に忠なるを致すや確かである、勿論現在の狀態を以て滿足することなく、倘一層の多利を收めなければならぬ、且つ又一面には例へ三杯十圓の繭に下落するとも倘相當の利益ある養蠶業たらしめなければならぬ、即ち經濟の原則に叶へる少費多獲の方法を考案すべきである、之れ實に斯業の現況に照して、最も急務なる問題であつて、此の解決により、我が蠶業が愈安全となり、又愈々多利なる事業となり、斯業の發展期せずして達する事であろう。

少費多獲の術としては勿論種々ある、飼育術に精通して良繭を多獲するも其一つであり、桑葉人手を可成養蠶に影響なき限りに於て、其量を減じ、又は廉價に求むべきは勿論、蠶室蠶具は損傷せざる樣、且つ便利であつて大に勞力を省き得て、且つ蠶兒の衞生にも適するものを貴び、之を使用するが如きは、皆其宜ろしきに適つた手段であるが、就中桑葉を最も廉價に土地より生産し、又廉價に之れを購入するは、生産費の節減手段中、生産費の大部を占むる桑葉のことゝて其効果最も著しき譯である、兎角養蠶家は、飼育上のこと

に於ては、やはり七分作、五分作、又は全作なると、隨分八釜敷謂ひ、其飼育上の研究に就ては、其方、冷淡なる樣である。苦心して居る樣であるが、桑園の問題に對しては、其方、頗る當三百三十三、以上の收業を上げ得らるゝことは、幾多の實驗又幾多の事實が證明して居る所である、蓋し飼育上に於て、半作以下の不結果である蠶業を營んで居ることを自覺しては、有らゆる作物中、此類少ない不幸を祈ひて、之れが救助を吾人に向つて乞ひつゝあるのであらう。

夫れ斯樣な有樣であるから、蠶業改良の餘地絲々たる中に、桑園を改良して、從來に倍徒せしむる手段は、最も容易なる途である、急務と云ふ言葉が、殆んど亂用されて居る有樣であるが、愚らく、斯樣な問題に對して、用ふべき至當なる言葉であろう。

予は桑園の改良方策として、之れが解決を試みんとする、年作物たる桑樹に對しては、其方研究や決る、年蔭に十年、永遠に養蠶業に從事する人士諸賢の參考たるを得ば滿足する所である。

一、肥料及耕耘

二、桑園の栽培用肥料の得失

三、夏秋蠶專用桑園の副利桑皮利用の製紙

一、肥料及耕耘

予は一反歩の桑園より、刈桑六百貫、（桑葉三百貫、内、外）を收獲すべき目論見である、之れに左の如く施肥して居る。

堆肥	三百貫	大豆粕	三十貫
人糞尿	百五十貫	過燐酸石灰	四貫

合計

堆肥	三百貫	人糞尿	百五十貫
大豆粕	三十貫	過燐酸石灰	四貫

合計

而して此四肥料三要素の全量何程であるかを計算せば、

此の四肥料中堆肥の全量は、二三月の頃桑樹畦と畦との中間に、深さ幅一尺位の溝を掘つて此に施こし、人糞尿を撒ひて中間となし置き次に三四月の交に於て腐熟せる人糞尿の半量を、適宜稀釋して矢張り畦間に施こして、少し土を覆ふのである、而して盛り上ぐ、此の方法を繰り返すなり

次に以上記した如き甚だ少なからぬ肥料を施こさねばならぬ理由を一言せん、今刈桑六百貫の中に、何程の肥料成分が含まれて居るかを計算して見るに、分析の結果によると。

	窒素	燐酸	加里
六百匁	二貫四百七十八匁	二貫四百七十六匁	二貫八百六十匁

云ふことは、恰も肥料として窒素三貫八百十六匁、燐酸六百匁、加里二貫四百七十八匁を、其土地から直接奪ひ去つたと等しい譯である、從て從來と等しき土地の生産力を維持し、即ち年々六百貫以上の收穫を擧げんとするには、理論上少なくも前記した成分に、相當する丈け肥料として與へなければならぬ譯である、而のみならず肥料の種類によつて異なるれども、凡ての肥料は其與へた成分の悉くが、作物の爲めに吸收さるゝのでなく、必ずや幾分は飛散、或は流失したり、又作物の吸收に適しない形で居る分もあるから、二要素の關係を考ふると、其收穫物の中に含まれて居る、窒素の全量よりも、尙多少多い量を肥料として施こさなければならぬ譯である、予が一反歩に對して、前述べた如き肥料を適量と認めたのも、此の理由に據つたのである。（未完）

方にては柄鎌と稱するものを以て其柄を手にて支ひ鎌を足にて踏み込み土を耕し返す）式の如く、先づ與肥料を、再ひ耕作土の表面に曝露して、其肥料成分を損失する恐れがない、本來より考へれば、片起しする方法は決して盛服の田來得んん方法である、何んとなれば前述したるが如く肥料成分の損失を妨ぐることゝなるし、且つ又其施肥の發展を妨げる恐れがあるし、又何時に肥料の發展を妨ぐることゝなるし、又何時に御かゝいなしに、根を切斷することになるから、自然桑の生育を害する等の惡しき結點を一掃せんには、予が行ひつゝある方法、即ち從來栽桑者間に唱へられて居つた、土用布子式が最も良からうと思ふ、勿論高刈立通し仕立又は土質の如何によつては多少の斟酌をなさねばならぬ。

桑園年中行事

二三月の交　全土を平かにし畦間に深さ幅一尺位の溝を堀り堆肥大豆粕、過燐酸石灰を施こし少しく土を覆ふて全土を平かにす

三四月の交　畦間の田所に人糞尿を施こし土を覆ふて全土を殆んど平かにす

四五月の交　此間雑草を削る

五月の交　春蠶用桑にありては春蠶に刈取後直に夏秋蠶用桑にありても又夫れに準じ、株間に大豆粕及人糞尿を施こし全土を平に耕ひ起こす、除草をなす

六七月の交　除草をなす

七月の交　畦間を耕起し且つ株間の土を深ひ畦間に土を高く盛り上ぐ

八月の交　土を株際に寄せ畦間を淺き溝所となす

落葉後、

	窒素	燐酸	加里
七百五十六匁	一貫九百目	一貫六百八十五匁	七百五十匁
六百匁	百九十五匁	百四十五匁	百五十匁
六百八十八匁	四〇五匁	八百九十九匁	百九十五匁

合計

此の四肥料中堆肥の全量は、二三月の頃桑樹畦と畦との中間に、深さ幅一尺位の溝を掘つて此に施こし、人糞尿を撒ひて中間となし置き次に三四月の交に於て腐熟せる人糞尿の半量を、適宜稀釋して矢張り畦間に施こして、少し土を覆ふのである、而して盛り上ぐる全部即ち、大豆粕の半量と人糞尿の半量は、春蠶期刈取後、可成速かに、其株間に穴を堀つて施こし、土を覆ひ置く斯く爲すことは、片起しこし、（上武地方に於て一般に行はれて居る、上武地方にては、

	窒素	燐酸	加里
六百匁	二貫八百三十五匁	二貫五百匁	二貫八百三十五匁
百五十匁	二貫百匁	百四十五匁	百五十匁
四百五十匁	三百五十五匁	三百八十五匁	四百五十匁

合計

此の四肥料中堆肥の全量は、二三月の頃桑樹畦と畦との中間に、深さ幅一尺位の溝を掘つて此に施こし、人糞尿を撒ひて中間となし置き次に三四月の交に於て腐熟せる人糞尿の半量を、適宜稀釋して矢張り畦間に施こして、少し土を覆ふのである、而して盛り上ぐる全部即ち、大豆粕の半量と人糞尿の半量は、春蠶期刈取後、可成速かに、其株間に穴を堀つて施こし、土を覆ひ置く斯く爲すことは、片起しこし、（上武地

	窒素	燐酸	加里
七百五十六匁	一貫九百目	一貫六百八十五匁	七百五十匁
六百匁	百九十五匁	百四十五匁	百五十匁
六百八十八匁	四〇五匁	八百九十九匁	百九十五匁

合計

金拾貳圓　此價五十錢　此價貳圓　此價五圓六十錢

問答

蠶室消毒に就ての質問

長野縣　通常會員　松下兵太郎

蠶室の消毒をなすには七十度以上の保溫が必要だけれども、時期によりては甚だ困難である。依てフォルマリンを溫湯に混和して噴霧すれば、完度の保溫室で消毒すると同一の効力あるものでありませうか。

答　低溫の場合はフォルマリンを溫湯にて噴霧し難布するが得策だけれども、室內溫度七十度未滿では完全に奏効せないものである。假し冷水にて稀釋するのよりは効分効力多きものである。

育蠶に就ての質問

茨城縣　通常會員　米川利重

秋蠶飼育の際に、蟻中溫度は十五度以上で、五六日目降眠の候いたるときは絕食せしむるは危險であれば、雨降なる給するの外ありません。若し雨降なる給すれば蟻蚕を濕にして乾燥を計るとふ法もあるが、是れは小蚕蠶室のことで大蚕蠶室には是れに依る手段はありませんか教へて下さい。

學藝委員　八田達也

秋蠶には質問の如き場合に遭遇することあつて困難を感ずるものであるが止むを得ずして雨降なる給する場合に據る蠶座へ蟻蚕の無都を上へ成るべく薄く桑に飼育するがよい、而して、給桑後は新沙を行ひ出來得る限り乾燥を圖る外に手段はない、若し蒸熱を覺ずるあらば、時々枯桑葉の如き類を燃燻して後も室を閉鎖し、空氣の調節に努めるがよい。桑葉の如き類を燃燻したる布巾で拭取るも強き不可能のことでもあるまい、其他小蚕の桑葉でも出來得る限りは風力を利用した經驗の器械等で雨露を排除して給與する方法要である。

秋蠶專用桑園に就ての質問

仙獨山縣　通常會員　山本司呂吉

秋蠶專用桑園は、春蠶用のものよりは密植するが宜しき樣に思ふが、一反歩の栽植位如何ほど適度でしようか何ひ度。

學藝委員　八田達也

秋蠶專用桑園の植度には土地の肥瘠、桑樹の種類等によつて一概には云へぬが、肥沃なる土地の根刈仕立ては、桑苗の如き大笠種類は一反歩の植度は、五百株內外が適度とする。但し是れは實生苗等でなく、普通の接木苗等を栽植した場合である。密植に過ぎるときは桑條の下部の葉は黃色に枯れて、給桑に適せざるものが生ずることになる。

秋蠶飼育に就ての質問

山形縣　通常會員　日野達五郎

(一)普桑の實生の桑葉に青絹の小便を散點したるものを、秋蠶に給與して害はありませんか、若し害ありとすれば蠶兒は如何なる病氣を發生するでせうか。

(二)秋蠶育中に朝六十三度の場合が時々あるが、其時には焚火を用ひて給桑時間を早等にするか、又は焚火を用ひずに給桑時間を延ばすが宜しきか御教示を乞ふ。

答

(一)實驗したことはないが、差したる害もあるまいと思ふ、若し害ありとする特殊の病氣を發生することはあるまい。

(二)多少の火力を使用するに必要である、給桑量も幾分減ずるがよかろう。

桑樹の病害に就ての質問

岐阜縣　通常會員　村雲市介

標本の如き「カビ」が桑葉の表面に附着して、蠶兒の食桑が悪るい、之に何と名くる病菌で、蠶兒若しこれを食するときは害あるものですか、又それが驅除防の方法を教へて下さい。

答

質問の病害は桑の表面黴病と稱するもので、秋季落葉期に近づけば吟々と此病類を見ないことはない、然れども氣候乾燥して桑園も亦風通と日光の透射がよければ發病期迄か、或は全く發病しないことがある。九月上旬より既に發病するが如き桑園は前記の故障あるものと認ぜられる。

被害桑葉を蠶兒に給與するも敢て差支ないけれども、蠶兒に多少悪影響するの類あるから、無害桑を給する如くはない。

驅除法は唯単に風通と日光の透射に注意する外良策はない。

紫綬理事の渡米

本會理事にして生絲檢査所長なる栗藤常兵氏には其筋より米國視察を命ぜられ客月二十四日インプレスオブヨヤポン號に搭乘して渡米せられ目下賓業團の一行と共に北米に在りて到處大歡迎を受けて居られます何れ歸朝の節は我生絲貿易に關し最も有益なる御土產談を語らるるでありませう

會務錄事

總裁殿下各支會へ臨

本會總裁殿下伏見宮貞愛親王殿下には今秋各支會に於て擧行せらるる品評會賞授與式並に總會等に臨場あらせらるることなる其御日程等左の如し。

九月廿九日　東京御出發長野御泊

三十日　長岡御泊

十月一日　新潟支會第一區品評會案賞授與式御臨場長岡御泊

二日　輕井澤御泊

三日　御歸京

埼玉支會合臨

十月五日　東京御出發

埼玉支會第二區品評會案賞授與式御臨場

川越御着

御歸京

十月九日　東京御出發

午後五時十八分上野御出發

午後五時五十分上野御着

午後六時二十分長岡御着

午後八時四十二分長岡御發

午後十時四十分長岡御着

十月十一日　新潟支會第一區品評會案賞授與式御臨場長岡御泊

午前八時一分長岡御出發

午後四時二十五分輕井澤御着

十月十二日　輕井澤御泊

午前八時一分輕井澤御出發

午後四時一分長岡御出發

小千谷御出發

長岡御着

十月十三日　長岡御泊

午前九時一分長岡御出發

午後二時四十五分上野御着

十月十四日　東京御出發長野御泊

午後五時十分上野御出發

午前十時四十二分御着

午前十時十分御着

午後四時三十七分仙臺御着

大日本蠶絲會宮城支會總會御臨場

十五日 福島縣御旅行 午後二時二十五分仙臺御出發
同 五時四十一分福島御着
十六日 大日本蠶絲會福島支會總會御臨場
十七日 栃木縣佐野へ御旅行 午前七時三十五分福島御出發午後一時十分小山御着
午後二時 十 分小山御出發午後三時八分佐野御着
十八日 大日本蠶絲會下野支會第十回品評會褒賞授與式御臨場茨城縣御旅行 午後十二時二十四分佐野御出發午後一時五分小山御着
午後二時五十五分小山御出發午後五時四十分水戸御着
十九日 午前武德會午後大日本蠶絲會茨城支會第一回品評會褒賞授與式御臨場
二十日 御歸京 午前九時三十三分水戸御出發
午後一時四十 分上野御着

支會設置及支會職員の囑託

德島縣は從來地方委員部を設置致し來りたる處會務の擴張を圖らんがために今般同地方委員部を廢し支會を設置すると共に會頭の推薦に依り同支會長左の通り總裁殿下より囑託あらせられたり。

德島支會長 渡邊勝三郎

新潟支會委員部長並に商議員、群馬支會委員部長、埼玉支會委員部長、千葉、信濃二支會委員部副長及三重支會商議員異動ありたるに付各支會長の推薦に依り本會々頭より夫々左の通り囑託せられたり。

新潟支會委員部長 中蒲原 四戸總太郎 古志 齋藤文吾
同 商議員 東頸城 部谷彌介 西頸城 大平廣彌
群馬支會委員部長 碓氷 金森輝夫 利根 西川泰彥
埼玉支會委員部長 比企 奥田榮之助 南埼玉 水谷庸之助
千葉支會委員部副長 海上 足立義男
信濃支會委員部副長 北安曇 太田憲治
三重支會商議員 村島長三郎

地方委員部職員の囑託

本會和歌山及愛媛地方委員長更迭異動ありたるに付今回本會會頭の推薦により總裁殿下より左の通囑託あらせられたり。

和歌山地方委員長 川上親晴
愛媛地方委員長 伊澤多喜男

特別會員の推擧

左の諸氏は本會々務に貢獻せられたるの勞効顯著なるを以て總裁殿下の台聞に達し今回特別會員に推擧せられたり。

茨城縣 川崎清平 萩原甚平
高知縣 山中一巳 明神藤太郎

本會職員の出張

八月十七日 吉池理事には秋田縣蠶絲組合聯合會曾蠶絲共進會へ講師として出張同二十七日歸京せらる。
八月十七日 吉永囑託講話の爲め埼玉縣北足立郡平方村に出張同十九日歸京せり。
九月六日 吉池理事埼玉支會へ出張即日歸京せらる。

蠶學者の招請

八月十四日より十八日迄五日間農商務省に於て本邦著名の蠶學者を招致し諮問會を開かれたるが、本會は之を機として一夕純露に上京せられし左の諸氏を招請して晩餐を饗し、和氣藹々の裡に種々懇談を交へ午後八時散會を告げたり。

押川 昭吉 下岡 忠治 理學博士佐々木忠次郎 紫藤 章 芳賀權四郎
農學博士 大森 順造 農學博士 外山 龜太郎 石渡 繁胤 十時 増次郎
三吉 米熊 林 驛作 針塚長太郎

婦人部の設置

富山支會にては曩に氷見郡婦人部を組織し去十日之が發會式を舉行したるが更に又下新川郡西布施村婦人部を組織し同十四日發會式を舉げたり、因に同婦人部は屑繭整理法講習會を去五日より開き頗る盛況なりといふ。

會頭一行の山陰紀行

本會々頭松平男爵は去七月二十四日より吉池理事及小池書記を隨へ、京都、鳥取、島根の三府縣下蠶絲業視察及本會擴張の爲め出張せられたるが、男爵は現に日英博覽會副總裁たるを以て傍ら同會の用務をも便せらることゝて、歸路廣島縣下に趣き再び京都に立寄り、炎威燬くが如き暑中の旅行も些の恙なく、去八月十一日無事歸京せられたり、今各地經過の景況一斑を左に揭ぐることゝなしぬ。

七月二十四日 出發は午後六時三十分と定りぬ、本會事務所の諸員は云ふまでもなく、日英博覽會の和田事務官長以下數十名の人々に、加ふるに同車にて押川農商務次官の大臣代理として京都なる蠶業講習所授與式に臨む爲め出發せらるゝことゝて、各の人々も多く送りてプラットホームに集りたれば一等車の前は人を以て埋むるばかりなりき、軈かて一聲の汽笛と共に見送りの諸氏と分れ、寢車に落し着き一夜を明かせば二十五日の午前七時十分無事京都に着しぬ、先に來れる紫藤檢查所長、本多東京蠶業講習所長及昌谷京都府事務官、石渡京都蠶業講習所長等數十名の人々に迎ひられ、定宿なる麸屋町の俵屋に着し朝餐を喫し後直ちに京都蠶業講習所卒業式に臨まる、式後大森知事の案內にて京都農園を一覽し、午後四時四十六分の京都發にて福知山に向ふ、元と會頭の豫圖日程は京都一泊の上翌日綾部に赴く豫定なりしも、福知山の荒川郡長始め有志諸氏の懇請と支會長の請

求に依りて、俄かに日程を變更して直ちに京都を發することゝなれり、波多野京都支會副會長及幹事長なる香川農務課長、井上山崎の兩技手、大島城丹講習所長其他十餘名同行福知山に至れば荒川郡長其他有志者數十名來り迎へられ、一行は平佐旅館に投ぜり。

福知山の講演

二十六日午前九時より久昌寺に於て講話あり、來會者五六百名、荒川郡長開會の辭を述べたる後、松平男爵は毅然として演壇に進み、莊重なる態度を以て、曾頭我國が日英博覽會に贊同したる由來を說き、舉國一致好成績を舉げ益同盟國の親交を厚ふし、以て世界の平和を確保すると共に一方通商貿易の擴張を圖らざるべからざる所以を述べて論結し、次で蠶絲業の本體に入り農は我國家を組織する根本にして蠶絲は農家の副業として、最も適當なるものなりと斷じ、益之を改良發展せしめ國家の富源を涵養せざるべからざる所以を說き、而して之を執る蠶業家の持する態度、信義を重んじ醇厚の俗を養成し以て國光を輝さんことに努力せざるべからずと論じ、約一時間にして降壇せり、男爵の演說は莊重犯すべからざるが如く、來會者は襟を正ふして傾聽し大に感動せるもの、如かりし、次で吉池理事は總て職業は宗敎に次て人の心理上に感化を及ぼすものなりとの四哲の格言に依り蠶絲業は國民の品性を崇高ならしむるに於て最も有効且緊要なる所以を述べ之が改良發展せしむると共に一面販路の擴張を圖らざるべからず、而して販路の擴張は本會の綱領として最も重しとする所、今後も又諸君の贊襄を得て極力之に盡瘁せんと喝破し、例の快辯を振つて縱橫自在に說き去ること一時間餘、大に來會者の注意を喚起せり、講演終りて後ち有志者五六十名より成る午餐會に臨む、荒川郡長起て挨拶を述べ、會頭答辭を爲し次て荒川郡長の發聲にて本會及會頭の萬歲を祝して散會せり。

綾部講演

二十六日零時四十二分福知山發にて綾部に趣き直ちに講話會場なる女子實業學校に臨し、午後二時より開會、此日炎熱殊に酷烈流汗衣を絞るにも拘はらず來會者無慮一千餘名、場内立錐の地なし、以て當地方の蠶業に熱心なるを想見するに足れり、會頭及吉池理事の講演例の如く、聽衆又熱心に傾聽怠惰ざるもの、如し、午後五時散會の後波多野鶴吉氏等の經營に係る郡是製絲株式會社及城丹講習所を巡覽せり。

郡是製絲株式會社

郡是製絲株式會社は改めて此に言ふまでもなく、製絲界關西の重鎭として名聲海外に噴々たるものなり、明治二十九年の創立の際は百釜未滿の小製絲場なりしも、爾來波多野氏の奮勵經營宜しきを得、今や分工場を合せて八百六十四釜となり、一箇年の產額十二萬斤の多きに達し、堂々關西に雄視する大製絲場となれり、而かも之が資本金は創立の株數に對し全部拂込みたるに過ぎずして今や固定資本のみにても拂込株金に倍加するに至れり、之れ毎年株主に對し相當の利益を配當したる上に殘れる利益金を以て漸次擴張したるものなりと云ふ、今又約十萬圓の豫算を以て工場改築に着手しつゝあり、其發達せる盛況は一見盲ふべからざる快感を與ふ。

然れども是れ單に形以上の觀察のみ、若し夫れ本社の內容に立ち入りて波多野氏の理想的經營及其特長、殊に本社と養蠶家との間に於ける信用等、本邦蠶絲業者の模範たるものに至ては限りある本欄に到底盡し得べきにあらず、そは他日を期して本誌に詳記し以て讀者に見ゆる所あるべきなり。

城丹講習所

城丹講習所は京都府蠶絲同業組合聯合會の設立に成り、京都府及若干の補助金を與ふるもの、明治二十年波多野氏等の首唱に依て設立せられたるものなり、爾來數百名の卒業生を出し地方蠶業の改善發達に資する所尠からざるは世人の公認する所のものなり。

和知川の納涼

午後七時より郡是製絲の催しに係る和知川夕涼の舟遊に招かる、二艘の船を艤して同川の中流に浮ぶれば、涼風徐に來りて日頃の苦熱を洗ひ去る頃、無數の燈火は水面に浮びて流る、是ぞ當地の一名物なる燈籠流しなるもの、蓋し一行の為に特に催せるものならん、心行くまで涼を取り午後十時過ぎ艶麗なる旅館に歸りて宿す。

宮津の講話

二十七日午後六時五十二分宮津に向ふ、竹澤何鹿郡長其他數十名に送られて出發、七時四十六分舞鶴着、海岸に至れば京都府汽船壬寅丸纜役して一行を待つ、一行乘船宮津町なる府立水產講習所に着す、牛窪講習所長及技師の案內に依りて觀覽の後、午餐の饗を受け、午後三時より同地劇場萬年座に於ける講話會場に赴く炎熱猛烈しく恰も金を鎔すの思あり、左れど熱心なる當業者は續々と來り、場內溢員一千有餘名を算す、會頭及吉池理事の講話約二時間半にして同行の波多野氏又一場の講話を爲せり、終りて郡會議事堂に催せる有志者の歡迎會に臨む來會者八十餘名津原郡會議長の歡迎の辭に次て會頭の挨拶あり、田邊郡長は本會及會頭の萬歲を祝し、會頭は郡長及有志者の健康を祈りて乾杯を爲せり、六時三十分辭して旅館と定めたる山嘉別莊に入りて終日の汗を洗ひ去りたる後、更に文珠の瀨戸なる文珠樓に開かれたる京都支會長の慰勞會に臨む、支會長代理なる波多野副會長香川幹事長及田邊郡長其他の主客合して十餘名獻酬清談に時を移し午後十一時旅館に歸る。

天橋觀覽

二十八日天橋遊覽の豫定ありしを以て午前四時起床、香川幹事長、星野與謝蠶絲同業組合長、山本宮津町長等十數名の諸氏と共に文珠の瀨戸に至り、智恩寺及籠神社に詣で種々の寶物を觀たる後、天橋の全景を眺望するに最も適當なる成相

山に登り傘松に至りて所謂日本三景の一なる天の橋立及び附近の全景を下瞰す其明媚なる風光は記者の筆の拙なると紙面の狭小に到底盡し得べきにあらず、敢て之を記さんか寧ろ天下の名勝を傷くるあらんことを恐る、故に啻々しき賛美の形容詞を用ゆるを略すべし、成相寺の住職は来り迎ひ同寺の寶物にして國寶となれる弘法大師の眞筆其他及源相光の書等を会館の一覽に供せり、斯くて眺望に時刻も移りたれば愛を割て山を降り、文珠の瀬戸に至れば壬寅丸又舞鶴より来りて一行を待つ、直ちに抜錨して舞鶴軍港を巡覽したる後舞鶴に至り田邊郡長其他十數名の人々に送られて、午後四時三十分舞鶴第一阪鶴丸に乗して鳥取縣境港に向ふ京都以来數日間同行幹旋の勞を執られたる香川事務官補、井上山崎両技手等と此に袂を分かちたり。

阪鶴船上の涼

日本海上波静かにして月光清く、船の進行に連れて涼風徐に起り、陸上の温度に比すれば十度以上も降れることゝて清涼の海氣襟を拂ひ宛然蘇生の想ひあり、閑かに結れる夢は一聲の汽笛に覺されて甲板に出て見れば何時しか出雲の三保港に着しぬ、軈て名にあふ關の四本松に送られて伯州境港に入れば、藤本島根縣事務官是高鳥取縣技師其他數十名の人々に迎ひられ、上陸したるは廿九日の午前六時なりき。

蠶桑雜觀

▲廣東絲の改良 米國絹業協會は往年嘗て廣東絲の改良に對し懇切なる注意書を送り来り、我當業者は深く其厚意を謝すると共に、當業者々之が改良に數て苦心經營し來つたのであるが、今春亦同協會は同一の注意書を清國廣東地方の蠶絲業家に送て之が改良を促した、本會は其注意書を翻譯して各支會へ送付し夫々各當業者に之が警告を與へられんことを求めて置いたが、清國蠶絲業の改良問題は實に本邦蠶絲業の興廢問題にも影響するのであるから、當業者は一層の覺悟を以て他日噬臍の悔なきやう奮勵努力せねばならぬことであります何れ同協會の注意書は之を次號に掲載し會員諸氏の一讀を煩はすであらう。

▲米國新關稅法 米國大使館報告に依れば米國政府は八月五日の兩院協議會にて議定せる新關稅法を發表し第一條より第四十一條に亘り稅率の規定、最高最低稅率、課稅標準、會社課稅規則、關稅裁判所新關稅法等を定めたさうであるが、其內本邦輸出品に對する稅率改正の大要を舉ぐれば左の如くである。

▲茶　新關稅法にても從前の通り無稅

▲羽二重　從價割課たる五十パーセントを四十パーセントに引下げたれば重目物に利あるも輕目物に不利なるが本邦品は主に輕目物なれば大體に於て不利益となりたるも其販路に害を及ぼす如き事はなからう

▲絹手巾　現行稅率の儘なるも左の修正を加えた

一、縁縫せざるもの又は單に縁縫せるものは一樣に從價稅五割を課す

二、縁縫したるもの又は縁縫模樣に擬したるもの其他縫技刺工刺繡を施したるものは總て六割を課す

▲絹物稅　四割五分を課す

▲陶器彩色附　描畫其他裝飾を施したる物は從價六割然らざるものは從價五割五分に決し何等變更を見ない

▲花蓆　價格及び緣縫の如何に拘らず一平方碼三仙半の均一稅を賦課せらるゝ事となつたから、低價の物は半倍の引上げを見るも大體に於て本邦品の利益となつた

▲樟腦　粗製樟腦の新關稅は從來と同じく無稅にて精製樟腦は舊稅率と同じく一封度六仙である「セルロイド」製造の原料に用ひらるゝ物は新稅法により日本「セルロイド」製造業の競爭に備ふる主意にて一封度六十五仙並に三割の從價稅を課する事となつた

▲石炭　無煙炭は新稅は舊法と同じく無稅である有煙炭は米國石炭を無稅にて輸入する外國より輸入する石炭は無稅とした然るに議會は大統領の盡力にて一噸四十仙の稅率を妥協をなし舊稅は舊法と同じく一噸十五仙である因て日本石炭は空乘低廉なる運賃にて合衆國太平洋沿岸地方へ輸入せらるゝに至つた

▲硫黄　硫黄及硫華は一封度四角の課稅に更め無稅品目硫黄の部に但書の文字を挿入した

▲雜貨　或者は從前の儘に或者は引上げられ本邦の漆器、木製品、紙製金錢、提灯、日傘、團扇、紙製玩具、ナプキン等（紙綿を除く）の紙製品は從前の如くなるも新又は除上げの竹製扉の衛立は從價五割五分より四割となり締行李は自四割至四割五分紙製綿類は自三割三分至四割五分、綿布張日傘は四割五分乃至五割となり鳥毛は一割五分より二割となつた

▲拔絲細工　テーブル、クロスセンターピースの如き木綿麻又はリンネルにドロンウオーク工程を施したるもの舊稅に比し從價二割五分乃至三割五分より六割に引上げられ「ドロンウオーク」を施したる麻又は「リンネル」の手巾は舊稅率五割五分より六割に引上げられた

▲日本酒　新稅法はスティル、ワイント同一の條項に編入され最早爭論の餘地なきに至らしめたるが其稅率は左の如くである

一、樽詰酒精は十四％以下一ガロン四十五仙瓶詰十二本一ダオート以下にして其他

▲贅澤品には多少の增率を見た

▲鐵道枕木　一割に引下げらる

▲百合根　輸入は依然好望なる可く新稅法に依れば根千は五弗である

▲絹製靴表　絹製ネマキ、麥稈眞田、經木眞田、鹽詰の魚類及野菜類落花生、米、醬油、藤皮、薄荷の新稅率はデンダレー率と同じい

▲生絲屑絲　は無稅である

大體より之を見るに今回の關稅改正は必要品の稅を引下げ奢侈品の稅を引上げられたるゝので本邦品の米國への輸入は米國總輸入額に對し僅かに千分の四十八に過ぎざれば日本品の稅率を如何に定むべきかは今回の改正に當り米國に取りては甚だ輕微なる問題であつた、而して次の改正迄は鮮なくも十年の歲月を要すべく、新關稅率に於て我輸出貿易を發展し得るの餘地充分であるのは我に取りては甚だ利便なるものと言はねばならぬ。

▲江州の激震 去八月十四日の江濃地方特に江州に於ける震災は非常の慘狀を呈したが今滋賀縣技師土居伊太郎氏からの報導を記すれば左の如くである。

（口給參照）

一、震災當時の模樣及餘震

八月十四日當地に起りし震災は近來稀なる激震にして其の被害の中心たる東淺井郡虎姫村附近より東西三里南北四里餘に亘り家屋の全潰及半潰せるもの約三千七百戶人畜の死傷五百餘に達するの大慘狀を極めたり當長濱町の如きも其の中心點より僅かに一里餘の距離なりしを以て損害尠からず二千有餘の町戶一として異狀を來さざるなく各自應急の避難所を設け從來の家屋を放れ夜間に在ては火災の萬一を慮り洋燈の點火を禁止し暗憺たる慘狀は實に筆紙の名狀すべからざるものありたり而も其の後引續き餘震鳴動頻りに來り人心恟々たりしも日を經るに從び漸く靜穩に歸せんとするに際し再び同月二十四日第二回の強震ありて更に人心の動搖を來し倍々不安の念に打れありしと雖も幸ひ其の後著しき震動なく時日の經過に伴ひ鳴動鎭かりつゝあり當時は稍靜穩に復したるものゝ如し（八月三十一日迄の餘震回數總計九十回なりとす）

一、震災が蠶絲業に及ぼせる影響

夏蠶は全部收繭を了したるの期なれば更に被害を認めずと雖も秋蠶にありては飼育中の蠶種約百六十枚分（蠶齡は二齡飼食より四齡二三日に亙るもの）を蠶く投棄せざるの止なきに至り飼家屋倒潰器具の破損等により其の掃立を見合したるもの約二千五百枚此の收繭豫想石數千五百石殘繭乾燥場倒潰の爲め供託せし委託者の貯繭約四十石は蒸汁污染の爲め腐敗し僅はざるものとなれり以上は震災の爲め直接蒙りたる損害なりと雖も家屋及蠶室の倒潰蠶具の破損せるもの頗る多きを以て來年度春蠶飼育に影響する所尠なからざるものゝ如し

一、震災と蠶絲預防事務所

蠶卵原種母蛾檢查は例年の通り八月十日より開始し八十の連員百六十餘名の助手等悉く檢查に從事せるの際なりしも幸ひ當日は午後休憩の折柄にて一人の被害者なく事務所建造物も亦損害極めて僅少なりと雖惟し單に人心の平穩に復する迄臨時休業を爲したりき然るに其後精密なる調査の結果本所建造物は頗る危險なるを判明し遂に移轉の必要を起り同月十七日移轉場所の選定に着手せり元來本所の建物は木造家屋と異なり石灰「コンクリート」を以て築造せるものにして去る明治二十四年濃尾の震災に於て少しく龜裂を生し居りたるもの今回の強震に再會し更に其龜裂を大ならしめ欠損亦強害あるか或は暴風の起るあらば忽ち倒潰の悲慘を見るべく殊に構造の築造方に付ては餘りに研究深からざりし時代に於て建設せしものなるが隙間無筋にして震動の爲め側面「コンクリート」重積の連絡を斷ち非常なる危險に瀕しつゝあり故に應急假檢所を設けて假事務所に當て更に新事務所より北方約十三丁を距る同町大字三ツ矢眞宗傳免寺派說教場を借入れ八月二十六日移轉に着手し漸く諸般の設備を整へ九月三日より蠶卵原種母蛾檢查を開始するに至れり

一、蠶絲預防事務所新築移案及急施會開設と其の結果

以上の如く本所建物に損害を蒙り新築の必要相起り建坪三百二十餘坪經費一萬八千四百三十餘圓を以て事務所建築の提議をなしたるに縣は他の新築又は修繕物と共に提案し八月三十日急施會召集三十、三十一日の兩日に亙り討議の結果續々原案可決となり目下敷地調查中にして決定の上は直に起工の運に至るべし

一、秋蠶種補代配付

前述の如く秋蠶種飼育者被害の結果本年の收繭減少すべきを愍び縣農會は東淺井郡農會に補助金を交付し郡農會は晩秋蠶の蠶種を購入し無代配付を爲しつゝあり希望者意外に多しと云ふ

▲ス氏の本邦視察談 去三月九日桑港出帆のコレア號に乘りて同月二十六日横濱へ上陸したる米國絹業協會長ウイリアム、スキンナー氏には五月三日神戶を出帆して支那に渡り、上海に於てホワイトヨーク專門學校時代の學友なりし孫道番の招宴に列し、夫れより揚子江を溯りて漢口に出て北京に遊び轉じて滿洲に入り、西伯利亞鐵道によりて露京に遊び、獨佛を經て四ケ月有半の旅行を無事に、七月十三日紐育へ歸へられたさうであるが、氏は其主宰する協會の機關雜誌アメリカン、シルク、ヂヤナル記者に對して左の如き意味の談話をせられたさうである。

予が今回の旅行は最も有益にして興味ある旅行であつた特に日本に於ては頗る盛歡呼と盛宴とを以て迎へられ横濱上陸より神戶出帆に至る迄月餘の間刻々愉快の念に堪えず、就中大日本蠶絲會總裁伏見宮殿下の御宴、濱離宮の拜謁及び隈大官の招宴等は余の最も光榮とする處であつた而も余は、米國機業家が如何なる生絲を要するかを日本人に諒知せしめんが爲に全力を盡し、且つ米利堅標準非に依るの必要を鳴らしたるに、彼等は凡て此忠言と並に米國織物業家が彼等と事を共にせんとするの希望を認識し稱讚した、日本の製絲工場中には隨分規模の宏大なる者鮮からざるが孰れも其業務の改良發展に努めて居る、織物類も進步せる組織の物ありて或織物に就いては今後或は米國の有力なる競爭者たる事なしとも限らぬ云々

▲カルロ、バイニー氏本會を訪ふ 伊太利國の蠶絲業家カルロ、バイニー氏は本邦蠶絲業調査の目的を以て久しく來朝せられて居るが、去二日本會事務所を訪ひ吉池理事と午前九時より午後三時頃迄の長時間斯業に就ての懇談をせられた。

▲夏蠶の實蹟と初期秋蠶の狀況 本年の夏秋蠶の狀況に就ては各府縣の通信員から報導せられたのを綜合して、八月廿四日に公表したのでありますが六哲的の恨みはあれど會員諸君の參考もがなと考へ左に之を揭載することにしたのであります

一、本年度に於ける夏蠶の掃立は春蠶用桑葉の餘剩多かりしと（府縣に依り多少不足せる處あるも大數上）春蠶繭の賣行き豫想外高價なりしを以て當業者の意氣を强め全國を通じて約三割前の掃立高を增したりと雖も奈何せん掃立以來の氣候は少なからざる困難を當業者に感ぜしめ識者をして其結果如何を氣遣はしたりしが幸に壯蠶期に及び天候回復せるを以て掃立高に對すれば收穫減少の感み免るゝ能はずと雖も能く前年度に劣らざる收繭額（報告未着の處あるを以て詳細に知り得ざるも大略）を見るに至りしは國家の爲慶賀する處にして之れ畢竟近時當業者の技術大に進捗せるを以て好く其障害に對抗して措置宜しきを得たるに因るなるべく特に上簇期の天候順調なりしを以て平年に比し繭層厚く多少絲量少き憾あれど一般に解舒の良好なるは幸なり然れども各府縣を通じて繭價の値開き平年に比し多きは斯かる年柄にありては止むを得ざる處なりと雖も痛も遺憾の極と云はざるべからず

二、本年度に於ける秋蠶は初期に於けるものは旣に上簇結繭の終るものありと雖も晩秋蠶にありては今尙掃立を終らざるを以て全般を窺ふこと能はざれども其初期に於けるもの（七月下旬より八月上旬掃立のもの）は一般に其經過良好にして掃立量も三割內外の增加を見たりしが本年は近年稀なる暑氣なる上に降雨少かりしかば桑葉の發育中途にして運緩となり開葉せるものは其硬化甚だしく爲に多少蠶兒の發育不齊及體軀の肥大せざる爲繭形小に絲量少きの嫌は免るべからずと雖も增收額を得るは期して待つべく尙昨今時々降雨を得て葉餘の伸長見るべきものあれば其後の掃立も多かるべく加之昨今の天候は飼育上申分なきを以て之亦豐收を得るならんか

今左に夏蠶の實蹟（七月下旬迄に收繭せるもの）及初期秋蠶の狀況に就き本會に達せる報告左の如し

夏蠶之實蹟

府縣名	昨年の收繭高	本年の收繭高	繭の價格	繭の品位	備考
崎	一〇七	一〇〇〇	三十四五圓	普通	
大分	[illegible]	[illegible]	昨年四十圓 本年三十五圓	不良	
佐賀	[illegible]	三〇〇〇	昨年三十九圓 本年三十五圓	不良	
熊本	一三三三	一三〇〇	三十七八圓	劣等	
鹿兒島	[illegible]	一四〇〇	二十二三圓		
徳島	[illegible]	[illegible]	四十二三圓	解舒不良	
香川	一八八	一四〇	三十二三圓	普通	
愛媛	[illegible]	[illegible]	三十七八圓	不良	
高知	[illegible]	[illegible]	三十二三圓	普通	
三重	[illegible]	一八〇〇〇			
岐阜	[illegible]	[illegible]	四十圓內外	解舒良	良好なるも絲量乏し
愛知	[illegible]	[illegible]	昨年四十二圓 本年三十五圓	稍良	早物不良晩物宜し
富山	[illegible]	[illegible]	二圓七十錢—三圓五十錢	佳良	早口のもの多少劣る
長野	[illegible]	[illegible]	三圓—三圓十錢	佳良	
山梨	[illegible]	一八〇〇	昨年三十四圓 本年三十三圓	良好ならず	絲量少し
東京	[illegible]	—	—	—	僅少調査の價なし
千葉	[illegible]	—	—	—	殆ど無し
廣島	[illegible]	四〇〇	二十二三圓乃至三十六七圓	中位	
島根	[illegible]	八〇〇	三十四五圓	佳良	
島取	[illegible]		昨年と大差なし	中位	
京都	[illegible]	八〇〇〇	四十圓內外	普通	
奈良	[illegible]	一〇〇〇	四十四五圓	不良	
和歌山	[illegible]	[illegible]	三十八圓內外	優良	
茨城	[illegible]	[illegible]	昨年二十六圓 本年二十五圓	良好	
群馬	[illegible]	[illegible]	三十四五圓	良好	
栃木	[illegible]	[illegible]	三十四五圓	良好	
埼玉	[illegible]	[illegible]	三十圓內外	不良	
福島	[illegible]	[illegible]	昨年三十六圓 本年二十五圓	解舒佳良なるも絲量乏し	
山形	[illegible]	八〇〇〇	三十八九圓	可良	
宮城	[illegible]	[illegible]	昨年上四十圓 本年上三十八圓	解舒良	殘桑多く昨年より掃立六割を増す

秋蠶之狀況

府縣名	昨年の掃立枚數	本年の掃立	發育狀況	上簇せるものゝ經過	收繭せるものゝ品位並に價格
長崎	[illegible]	四割增	佳良	佳良	品質佳良にして價格四十圓內外
福岡	[illegible]	三倍增	佳良		絲歎多く一石三十五六圓
大分	[illegible]	四割增	普通	既に上簇せるものなし	降雨頻繁にして飼育困難
佐賀	[illegible]	大差なし	可良	上簇せしものなし	
熊本	[illegible]	二割增加	可良	上簇せるもの少く經過は良好なり	
鹿兒島	[illegible]	二割五分增	佳良	未詳	
徳島	[illegible]	三割增		上簇せるもの佳	品位良好にして解舒可なり四十五六圓位
香川	[illegible]	四割增加	良好	良好	價格目下三十三圓乃至四十二圓位見當
愛媛	[illegible]	二割增	不良	上簇せるもの普通	四十圓內外
高知	[illegible]	三割增	佳良	佳良	品位可良なるも三十圓內外昨年より六七圓安
廣島	[illegible]	二割增	良好	良好	品位は中等にして三十六圓位
島根	[illegible]	昨年より少し	佳良	上簇中	
島取	[illegible]	大差なし	良好	上簇經過良	品位佳にして三十六七圓なるも昨年より三四圓安
京都	[illegible]	多少增加	大概良好	未詳	三十圓より三十七八圓
奈良	[illegible]	三割增	可良	良好	品質優良にして四十圓內外
和歌山	[illegible]	一割增	無事發育	可良	
三重	[illegible]	一割增	不良	上簇經過面白からず	成繭小粒にして繭層薄し三十四五圓
岐阜	[illegible]	多少增加	不良	上簇せるものにして絲量少き傾あるも解舒頗る良好	繭形小さきものあるも解舒良好
愛知	[illegible]	二割減	發育佳良	上簇せるもの良好	昨年は四十五圓本年は目下四十二三圓に位
靜岡	[illegible]	大差なし	良好	上簇せるもの成績良好なるを示せり	
富山	[illegible]	三割增	良好	上簇せるもの佳良	品質佳良にして四十圓乃至四十二圓
長野	[illegible]	一割五歩增	早物不良晩物は良好	上簇に至らず	
山梨	[illegible]	多少增加	良好	普通	品位良好三十五六圓 解舒良好なるも絲量乏し
神奈川	[illegible]	一割增	良好	上簇せるものは良好なる成績	未だ呼聲なし
東京	[illegible]	二割增	極めて佳良		
千葉	[illegible]	二割增	良好	解舒不良の傾あり	二十七八圓より三十圓內外
茨城	[illegible]	一割增加	可良		
群馬	[illegible]	一割增	發育良好	上簇中	收繭せるものは品位可良なるも二割安にして四十五圓より四十圓迄
栃木	[illegible]	二割增	良好	上簇せるもの如し	
埼玉	[illegible]	幾分減少	佳良	上簇中のもの良好	收繭せるもの少し然れども品位佳良三十四五圓
福島	[illegible]	一割三分增	佳良		
山形	[illegible]	一割五分增	極めて良好	經過良好	品位可良にして四十圓內外
宮城	[illegible]	四割增	一部不良なりしも大部分良好	經過は不良ならず	收繭可良と見て可なり價格三十五六圓
青森	[illegible]	三割增	良好		品位佳良なるも絲量少し價格三十六七圓

▲世界の蠶況 に就き佛國里昂蠶絲商組合に於ける最後の調査報告は左の如くであります。

西 班 牙

收穫は「ヴアラレス」に於ても將た「ミユルシー」に於ても殆んど昨年と大差なく繭質は稍良好なり

佛 蘭 西

收穫額は概ね昨年と等しく稍增加したるが如きも不幸にして飼育期間天候不良なりし爲絲質は良好ならざりき相場は昨年との比較左の如し

セ ヴ エ ン ヌ	三、七〇乃至三、八五	三、一〇乃至三、三〇
ドローム及アルデーシユ	三、六〇乃至三、九〇	二、八〇乃至三、〇〇
ヴ ォ タ リ ユ ー ズ	三、五〇乃至三、八〇	三、八五乃至二、九五
イ セ ー ル	三、六〇乃至三、七三	二、七〇乃至三、〇〇

最近各地の商況左の如し

ガール（七月三日）三、七五にて賣買行はる

ラザール(七月四日) 三、八五にて手合あり
ベニロール、シユール、セーズ(七月四日) 相場三、〇〇乃至三、二五
イヒール(七月三日) 繭は種類により三〇〇乃至三〇〇又は三、二五
アルデーシユ(七月二日) 繭は好況にして三、七五乃至三、八五、繭質甚好
グレスト(七月四日) 「オート、ドローム」を除く外は收穫概して昨年と大差なし「オート、ドローム」は霜害を蒙り收穫非常に減少せり繭質は昨年より佳良

伊太利

收穫昨年に比し一割乃至一割五分減少殊に「ピエモン」地方は霜害を被りたれば非常に減少せり
南部伊太利殊に「カラーナル」地方は掃立數量昨年より減少したれば從て收穫も減少せり
トスカーヌ(七月四日) 三、七〇乃至三、八〇「マール」
ヌオール(七月三日) 相場上物四、〇五乃至四、四五並物三、七〇乃至四、〇〇下等品三、三〇乃至三、六〇
ミラン(七月一日) 昨年に比し收穫稍增加せり相場は「マール」、「ペルガーム」三、四七、「アレシア」三、三九

墺地利匈牙利

匈牙利收穫多量但し五月初旬の霜害の爲昨年に比し稍減少せり
南チロール 收繭高一年より稍增加但繭質は不揃なり相場は三、四〇乃至三、五〇
「ゴーリッツ」及「グラヅスカ」天候順良桑葉多量の爲收繭好良「ゴーリッツ」市場に於て賣了したる繭は三、四九七八基に上り相場は平均三、一二クローネ

東歐羅巴

シリー 收穫は略昨年に等しく相場は一「オーク」に付き二十一乃至二十四「ピアストル」
ブルース 當市場總體に於て入荷約二百萬基に達すべく相場は一「オーク」に付一四乃至一八、五「ピアストル」
アンドリノープル 收繭頗好昨年に比し增加繭質亦頗好
高加索 繭は昨年よりは甚頗好にして一「アー」に付一三乃至一六「ルーブル」
波斯 收繭は昨年より稍增加繭質甚好
土耳古斯坦 白繭一五乃至一六「ルーブル」黄繭一七「ルーブル」

極東

上海 本年の輸出豫想左の如し
白生絲 四八乃至五〇、〇〇〇梱
機械生絲 一五、〇〇〇梱
黄生絲 一四、〇〇〇梱
廣東 第一第二回の收繭左の如し
第一回 四、〇〇〇乃至四、五〇〇梱
第二回 二、〇〇〇乃至二、五〇〇梱
第三回に付きては確報に接せず

▲東西蠶業講習所試驗問題

東西蠶業講習所に於て去八月十二日より十四日迄の四日間同所及各府縣廳に於て入學試驗を行はれましたが其試驗問題は次の如くであります。

本科入學試驗問題

英語

英文和譯

I. Children insensibly come to resemble those who are about them—as insects take the color of the leaves they feed on.

II. When a false friend is trying to persuade you to your own disadvantage, yield, and you win only his contempt; firmly refuse, and he at once acknowledges you as his Superior.

III. We envy a man who has achieved great Success, but we do not see the failures and heart-aches upon heartaches which he buried beneath his triumph.

文法

I. Correct the errors:—
a. The wind blowed hardly last night.
b. Japan is consisted with five main islands.
c. When I asked him if he has ever been at Nara, he answered that he has not, but he is going there this Summer.

II. Fill up the blanks with appropriate words:—
a.—Shinano is—longest—all the rivers—Japan.
b.—— a previous engagement I was prevented—accepting his invitation—dinner.

和文英譯

I. この頃のやうに鐵道事故が續々と起つては旅行もなかなか安心しては出來ない
II. それと知つたら何とか仕樣もあつたらうに

動物學

一、動物の先代交替とは如何實例を擧げて說明せよ
二、左の動物を分類せよ
十二指腸蟲　カウガイヒル　ヒドラ
疥癬蟲(ヒゼンムシ)　介殼蟲(カヒガラムシ)　カメのテ
浮塵子　魚(シミ)
エンマムシ　タラウムシ

物理學

一、毎秒一九、六米突の速さにて直上に投上げたる物體は幾何の高さに達す可きか 但重力の加速度は毎秒九百八十糎とし空氣抵抗なきものとす
二、次の術語を說明せよ
波の干涉　發音體の共鳴　光の分散(分解とも云ふ)

地理

一、本邦重要輸出品及輸入品を問ふ
二、左記諸國の首府を問ふ
1、和蘭　2、希臘　3、暹羅　4、印度
5、メキシコ　6、西班牙　7、濠太利　8、加奈太
9、瑞西　10、土耳其

作文

勸儉論

化學

一、單體又は複體の分子量は密度二倍なることを說明せよ、
二、左の分子式の名稱を問ふ
$NaHCO_3$　$KClO_3$　$Na_2S_2O_3$
$KMnO_4$　$Al_2(SO_4)_3.K_2SO_4.24H_2O$

養蠶本科入學試驗問題

數學

一、元價五圓のものに定價を附し、その定價の二割引に賣るも尙二割を利せんとす定價を何程となす可きか
二、三十五日間に仕上ぐ可き工事あり、今十六人にて毎日六時間づゝ働き二十日にて漸く $\frac{2}{5}$ の業をなせり約束の期日までに竣業を爲し終るには毎日八時間づゝ働かしむるも尙幾人の不足なるや

以上算術

三、$\frac{x+3}{3-x}+\frac{x+6}{6-x}+\frac{x+9}{9-x}=3$ を解け
四、正午に甲府を發する普通列車と午後六時に同所を發する急行列車とが翌朝同時に乙府に到着する時は急行列車の毎時の速度如何 但甲乙兩府の距離へ三百二十哩にして急行列車は普通列車より毎時平均十二哩早しとす

以上代數

五、圓周に於ての角は同じ弧の上に立つ所の中心に於ての角の半分なり

以上幾何

植物學

一、葉の構造を記載せよ
二、左記植物は何科に屬するや
馬鈴薯　桑　蘿蔔

製絲科本科(男)入學試驗問題

代數及幾何

一、$\frac{x^2-6x}{x^2-4}+5+\frac{2}{x-2}=0$ を解け
二、$8^{20}+\frac{3^{20}}{2}$ の整數部分の數を問ふ $\log 2=.30103$

以上代數

三、菱形の對角線は互に垂線なることを證明せよ
四、斜邊及直角の頂點より之に引ける垂線を與へられたるとき直角三角形を作る方法を說明せよ

以上幾何

算術

一、$\dfrac{13.0625\div\left(\frac{1}{2}+\frac{3}{8}+\frac{5}{16}\right)}{1.3\times.25+\left(\frac{1}{242}-\frac{1}{27}\right)\times.922}$ を簡約せよ
二、商人あり品物を二割高く賣らんとせしに却て其賣らんと欲せし價の二割を減して賣れりと云ふ此商人の損益如何
三、製絲工女一人一時間繰絲するときは石炭一斤(日本斤)を要す而して火爐一平方尺に付一時間に石炭九封度(英斤)を燃燒するとせば百二十人の工女を使役する工場にては火床面積何程の汽罐を要するや
又一日十二時間繰絲するとし八ヶ月の燃料幾許なるや
四、年利率を一割として現時より滿三ヶ年後に受取る金貳千圓の現價如何

製絲本科女生入學試驗問題

製絲法

一、十四「デニール」の生絲を製するには繭幾粒付けて繰絲すれば可なるや

二、普通の工女は一日（十時間）に幾許の繭を繰り幾何の生絲を製し得るや
三、生繭及水乾燥繭の一升重量は約幾許なるや

算術

一、一反六圓の紬と一反二圓五十錢の木棉縞とを合せて十二反買ひしに其價格總計四十圓五十錢なりと云ふ各幾反なるか
二、生絲の相場百斤に就き九百六十圓のとき三貫五百匁の生絲の價格幾何
但し生絲一斤は百六十匁とす

理科

一、竹、蘆稈等を燃やす時に爆聲を發する理由如何
二、蠶の變態を問ふ

作文

一、製絲場を觀るの記

製絲別科入學試驗問題

作文

遊學せる姉ノ安否を問ふの文

製絲法

一、選別繭と不選別繭との繰絲に於ける利害の點を示せ
二、同種の繭を繰絲するに絲量に多少を生ずるは何故なるか
三、百人繰の工場にて一日間に製造する生絲量及使用する繭の數量は大略幾許なるや

文藝

懸賞 俳句

花の本花翁宗匠選

秀逸

[illegible]

人
茸狩や笑ひくさなる籠の底　千葉　梅居

地
碪うつ手の狂ひけり親の咳　武藏　秋峰

天
咲揃ふ樂しみ長し菊の花　丹波　古城

追加
世の人の知らぬ慾あり菊の主　選者　花

蠶海涓滴

△久敷學者 及實際家の未決問題たりし北極探檢の一事クック及ペアリー二氏に依て決行せられ不日其探檢の詳報發表せられんとす正に之れ空前の壯舉。

△ペアリー 氏米國海軍省及び國務省に打電して北極に米國々旗を揭揚し周堆方全部の所有權を獲得したる旨を公式に通告せりと北極皇合衆國の領有か。

△米國全土 の鐵道に關係したる鐵道王ハリマン氏逝去して爲に株式界に大動搖を惹起したり勿論此事一時の現象なりしも以て同氏の勢力を知るに足る。

△世論區々 たる官吏增俸案愈々十六議會に提出せらるべしと傳ふ高級官吏よりは寧ろ下級官吏を增俸せよ吾人は此點に於て雙手を舉げ之を贊せん呵々。

△ブ氏一度 空中飛行機に乘じてドーバー海峽を横斷せし以來歐洲各國飛行機熱に冒され其熱度正に沸騰點を越ゆ空中戰爭の實現も亦近き將來に在るか。

△此際我邦 亦臨時氣球研究會組織せられて夫々幹部の任命あり應殿は殺宜空中飛行機の研究を遂げ更に新發明を爲し列國の心膽をして寒からしめよ。

△本年の米 作樣は以來天候頗順に其大厄日たる二百十日及二百二十日無事なりし結果六千萬石の收穫豫想せられ日本開國以來の豐作也とは寔に重疊。

△本邦六十 餘名の實業團體米以來到處大歡迎を受く之れ日米親交の一連鎖たらん一行中の蠶絲所長如何なる觀察眼を齎らすならんか鶴首して之を待つ。

△滿洲總督 奉天地方蠶業の有望なるを認めて同地農事試驗場内に更に蠶業學校設置の計畫を立てたりと四百餘州の蠶業發展して本邦の蠶業無恙や如何。

△七月一日 より八月卅一日に至る二ヶ月間の生絲輸出額二萬二千二百五十俵昨年の同期よりも減少すること一千三百十九俵也其原因何處にか在る寒心。

△本年秋蠶 掃立枚數昨年の百四十一萬二千三百餘枚に比し約二割の增加也而かも天候頗順飼育容易の結果何れも近年稀有の成績を舉ぐ蠶家先づ一安心。

△信州諏訪 の蠶病豫防事務所長蓮澤某事務の失態を苦にして縊死を遂ぐとは無績也一死以て其責を明にせんとの考ならんも去りとて餘りに小心の處置。

寄贈書目

養蠶衛生及保護社交換建議書	宍戸久藏
明治四十一年生絲檢査成績	石川縣生絲檢査所
蠶病豫防事務成績	島根縣蠶病豫防事務所
蠶病豫防事務成績	山梨縣蠶病豫防事務所
戊申詔書通義	帝國教育會
通俗蠶桑教科書　全	富山支會
大日本產業組合中央會一覽	大日本產業組合中央會
全國產業組合大會決議錄	大日本產業組合中央會
第二回生絲試驗成績報告	長野縣生絲同業組合聯合會
蠶病豫防事務成績	長崎縣内務部
事蹟報告	廣島縣蠶業講習所
臨時報告煙害試驗成績	京都府蠶業講習所
明治四十一年山形縣蠶業統計	山形縣内務部
蠶病豫防事務成績	高知縣内務部
明治四十一年横濱生絲貿易概況	原合名會社
老農懇親會紀念	加州日本人中央會
新潟縣統計書勸業之部	新潟縣
農科大學學術報告	農科大學
第十五回總集會報告	岐阜縣郡上蠶業談話會
明治四十一年生絲檢査所報告	生絲檢査所
福島縣立蠶業學校報告	福島縣立蠶業學校
明治四十一年事蹟報告	東京蠶業講習所
宮城縣蠶病豫防事務成績	宮城縣蠶病豫防事務所
水稻と智利硝石	智利硝石普及會日本本部
蠶種界に行はるゝ不正の實例	不正蠶種撲滅期成同盟會
第四次輸出重要品要覽農產之部	農商務省農務局
蘭山紀念號	東京植物學會
蠶病豫防事務成績	福井縣蠶病豫防事務所
第貳拾壹號蠶絲貿易要覽	茂木商店
亞爾然丁國に關する報告	外務省通商局
業務成績報告書	高知縣蠶絲同業組合
愛媛縣勸業統計年報	愛媛縣内務部
東京教育博物館一覽	東京教育博物館
四十二年度の生絲に就て	神榮株式會社横濱支店
改正產業組合法	大日本產業組合中央會

AVIS.

1°. Le bulletin de l'Associations séricicole du Japon est l'organe des membres de cette société qui compte actuellement plus de 30.200 membres.

2°. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans de rapport sera inscrit dans une langue européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par leés interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Séricicole du Japon.

NOTICE.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 30.200

2) This association has for its object the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigners of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

文藝懸賞募集

俳句

（十月分ノ切九月末日迄来投書各月の課題に毎號其月にノ切る）

▲選者　花の木花翁宗匠

▲課題　紅葉。新蕎麥。小春。柿。水鳥。

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

一題句つゝ一人に付五句限り。用紙端に限る。一二三枚林。郵在（葉）宛ら為べし。應募者は本會員外と雖も其選に入るべし。住地の綴郵便局名を記し共明記せらるべし。之れなき者は今其選に入るも賞ぜず

規則狂句（柳川）

（原稿ノ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　雷鳴業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

俚諺（鄙々連）

（原稿ノ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　雷鳴業に關係するものに限り女工などに相ほしめて恐支なきもの（但し雷鳴なるものは投書とす）

▲懸賞　天（一人）會報半ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

一と口噺

（原稿ノ切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし但し単語なるものは投書とす

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

五行文（生文）

（名寫）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　雷鳴業に關する百般の事を見聞した儘面白く記すこと文體は隨意

用紙　端書一枚に一題限り一行二十字詰にして五行に記すこと

懸賞

天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

狂句〜俚諺應募者は用紙一枚に付き五句限り（一と口噺一人に付三ツ限る）▲用紙郵便は會員外と雖も郵便局名を記し住地の綴郵便局名を記し共明記に入る者は大日本蠶絲會文藝係宛にて送るべし住地の綴郵便局名を記し共明記に入る者は今其選に入るも賞ぜず

高橋鬼川氏病気の為狂句俚諺一と口噺五行文は本月休載せり

注意御斷

大日本蠶絲會報廣告料

特等		並等	
同數	一頁	半頁	一四分ノ一頁
一回乃至六回（一回ニ付）	壱拾貳圓	七圓	拾五圓
七回以上（一回ニ付）	拾七圓	拾圓	拾貳圓
	拾圓	六圓	七圓
	六圓	四圓	四圓

●會員は右料金の二割引とす●四分の一頁未滿は掲載せず●前金にあらざれは掲載せず●一頁は一行二十七字詰七十二行とす

●本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十二年九月二十日印刷發行

編輯兼發行人　東京市神田區錦町三丁目十八番地　小池松市

印刷人　東京市神田區美土代町三丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町三丁目番地　三秀舍活版所

禁轉載

發行所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.	
	Picols.	*Picols.*	*Picols.*	*Picols.*		*Yen*
1	1364	—	—	—	———	—
2		264	3	—	Takizawaseishi.	995
3	443	410	15	695	Yajimagumi.	1.040
4	392	440	18	318	Kōnansha.	1.030
5	552	602	56	—	Moritaseishi.	990
6	637	624	18	—	Fujisansha.	1.020
7	640	344	19	970/45	Mankiseishi.	1.025
8	1184	—	—	—	———	—
9		557	30	—	Haramōtoseishi	1.035
10	475	759	32	—	Kanrasha.	1.035
11	632	457	19	—	Tenminsha.	1.000
12	744	443	48	884	Ushuisha.	980
13	604	282	16	—	Jyonansha.	1.035
14	528	387	23	302	Kanrasha.	985
15	1065	—	—	—	———	—
16		576	11	—	Higorōchiseishi.	990
17	789	1034	8	—	Kokuhōsha.	1.015
18	467	656	16	382	Shinryusha.	965
19	581	395	23	881/50	Ushuisha.	915
20	478	269	21	—	Shimonitasha.	1.010
21	513	328	11	701	Izumikan.	1.000
22	1149	—	—	155/19	———	—
23		229	14	—	Kyodoichiba.	965
24	583	393	16	361	Sudōseishi.	1.030
25	617	600	28	—	Kōnansha.	1.040
26	793	829	2	—	Hokokukan.	990
27	695	581	6	149	Kōshuisha.	910
28	548	443	1	1009/9	Hayashigumi.	900
29	1231	—	—	—	———	—
30		715	18	—	Nittōsha.	990
31	772	415	19	759/31	Yamatogume.	885
Total	18.415	1.304	491	7695/254	———	—

1 yen vaut environ *fr.* 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Août 1909.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(August 1909.)

	Report. Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back	Importer. Brought forward.
Filature. Filature.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Zagori. Bereel.	9.551	14.334	10.361	—	463	13.061
Kakeda. Ozibayashi.	1.675	2.824	1.733	—	9	2.757
Autres. Other.	298	1.135	819	—	9	605
	20	122	84	—	10	48
Total.	11.544	18.415	12.997	7.759	491	8.712
1908.	10.999	15.035	11.240	1.146	239	6.844

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Rien à signaler spécialement sur notre marché du mois d'Août, on peut en résumer en deux mots : inactivité générale. Cependant, comme c'était le mois d'Août, c'est-à-dire l'époque où la soie arrive en grande quantité, la vente de ce mois accusa une augmentation de 3,124 balles sur celle du mois correspondant da l'année dernière ; mais les prix n'ont point progressé. Shinshu extra No 1 s'est vendu d'abord à yen 890, puis à yen 900 vers le milieu du mois et est tombé enfin à yen 875 à la fin du mois. Au même mois de l'année dernière, *Hagoita* de *Usuisha* accusait le plus haut prix de yen 1,060 et *Eléphant d'or* de Kyodo le plus bas prix de yen 840 ; mais au mois dernier de cet an, *Yajimagumi* de *Koshu* et *Komansha*, accusèrant le plus haut prix de yen 1,040, et *Eléphant d'or* de Kyodo accusa le plus bas prix de yen 770, de sorte que le maximum de prix de cette année a été inférieur de 20 yen à celui de l'an passé, et le minimum de prix a été également inférieur de près de 70 yen.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant le mois d'Août.

THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The general condition of the Yokohama market during the month of August, may be summed up in two words : general inactivity.

But generally speaking, the condition may be described as brisk and satisfactory. As compared with the same month of last year, August of this year boasted, in sale, an increase of 3,124 bales. But the prices can not be said to have been satisfactory : Extra No. 1 of *Shinshu*, which was at first quoted at ¥ 890, soon got to ¥ 900, only to fall back again to ¥ 875 at the close of the month. During the corresponding period of last year, it was the *Hagoita* (battle-door) brand of the *Usuisha*, *Shinano*, that commanded the highest price of ¥ 1,060, while that quoted at the lowest price of ¥ 840 was the *Zojirushi* (elephant) brand of the *Kyodo Kwai* of *Iwashiro*. This year, however, the highest seller (¥ 1,040) is the silk put out by the *Yajimagumi* and the *Komansha*, of *Kosha*, while the lowest one (¥ 770) is the *Zojirushi* above mentioned. The reader will see from these figures that there is a difference of ¥ 20 between the best seller, this year and last year, while for the poorest ones, a difference of ¥ 70.

The following table shows the movements of silks during the relative period.